

研究ノート

南フランス・ガール県西部のロマネスク聖堂

ーアンデューズ周辺からセヴェンヌ山地までー

中川久嗣

Les Églises Romanes dans l'Ouest du Département du Gard :
la région d'Anduze et les Cévennes.

NAKAGAWA Hisashi

Résumé

À la suite de la monographie précédente, je traite ici les églises, les chapelles, les abbayes et les prieurés de l'époque romane ou du style roman qui se trouvent à l'ouest du département du Gard, surtout la région d'Anduze, le Piémont Cévenol et la Haute Vallée de la Cèze. Ce pays correspond approximativement à l'ouest de l'ancien diocèse de Nîmes, et aujourd'hui à l'arrondissement d'Alès. Il s'agit la porte sud des Cévennes. Sur chacune de ces églises, j'analyse son histoire brève, sa forme, sa structure architecturale, ses sculptures, et ses décorations, etc.

本稿では南フランス・ガール県西部の、アンデューズやトルナック周辺からガール県最西端のセヴェンヌの山間地に点在する中世のロマネスク聖堂を対象とし、可能な限り知りうるものすべてを訪問・調査し考察を加える。

取り扱う聖堂は、ロマネスク期とは言っても厳密な時代の限定はせず、11-12 世紀のいわゆる盛期のロマネスク期を中心として、その前後の時代もゆるやかに含めたものである。聖堂全体がロマネスク期のものから、大なり小なりその時代の部分が残っているもの、建築様式がロマネスク様式をとどめているもの、そして現在では遺構となっているものなども含まれる。建築の一部分がロマネスク期のものとなると、その数は非常に多くなり、その全てを網羅することは難しい。結局はロマネスクの部分かどの程度残っているのかによるのであるが、その選択が多少とも恣意的なものにならざるを得ないことはあらかじめ断っておきたい。

聖堂の配列は、おおよそ現在の行政地域区分に準じて整理することとし、ガール県の県番号(30)、大まかな地域、そして自治体(Commune)の順で番号を付した(フランスの地方のコミューンはしばしば合併・再編が行われるので、最新のものには対応していないこともあり得

る)。同一のコミュニオンに複数の聖堂がある場合は、「a. b. c. d.」というようにアルファベットで区分した。

用語・訳語について。まず聖堂の名称については、本文中で建築物としてのそれを指す場合はそのまま「聖堂」とし、個別的名称としては「教会」あるいは「礼拝堂」を用いた。教区教会については、いちいち名称に「教区」を付けることはしていない。カテドラル（司教座聖堂）は「大聖堂」と記した。「abbatiale」は通常「修道院付属教会」「修道院付属聖堂」などの訳語をあてるが、本稿では「修道院教会」とした。また「prieuré」についても、わが国では「小修道院」と訳すことが多いが、本稿では個別の名称を記す場合以外はそのまま「プリウレ」と記してある。「chapelle」は、聖堂内にあるものは「礼拝室」とした。プロテスタントの«temple»は、日本語に訳すのが厄介な用語の1つであり、「église」との区別を意識してこれまでは機械的に「寺院」とか「礼拝所」などとしてきたが、本稿からはプロテスタントの「教会堂」と訳すことにした（わが国では建物としての«église»を「教会堂」と訳す研究者も多いが、筆者はそれを「聖堂」としている）。なおフランスのプロテスタントはしばしば「ユグノー」とも呼ばれるが、本稿ではそのまま「プロテスタント」としてある。

「バロン」(baron) もまた日本語にするのがなかなか難しいが、本稿では差し当たってそのまま「バロン」と記すか、単に「領主」あるいは一般にしばしば用いられる「男爵」を採用した。

身廊内部のベイは、西側から第1ベイ、第2ベイという順に数える。壁付きの方形柱（付け柱）は、英語の「ピラスター」ではなくフランス語のまま「ピラストル」(pilastre) としてある。また通常、身廊と内陣の間に架けられることが多い«arc triomphal»は「凱旋アーチ」とした。

採りあげる聖堂は、そのほとんどが筆者が直接訪問・調査したものである。ただし私有地であったり（「私有」と記した）、アクセス困難その他の諸事情により訪問調査できなかったものには▲印を付した。それぞれの聖堂についての参考文献・資料などの参照情報は、各聖堂ごとに記したが（WebsiteはWSと略記）、全体を通してのビブリオグラフィーは最後にまとめてある。写真画像は筆者の撮影による。誌面の都合ですべての聖堂の写真画像をここに掲載することはできない。それらは筆者開設のウェブページ (<http://nn-provence.com>) で閲覧可能である。

30.5.1a サン=ポール=ラ=コスト／サン=ポール教会 (Église Saint-Paul, Saint-Paul-la-Coste)

サン=ポール=ラ=コストのサン=ポール教会へは、アレスからいったん北へ向かい、サンドラス (Cendras) から県道 D160 を西へ約7キロである（アレスからは12キロ）。サン=ポール=ラ=コストの現在の村役場からは3キロほど手前（東）のアモー・ドゥ・レグリーズ (Hameau de l'Église) 地区にある。アレス方面から D160 でこのアモーに入ると、左に向けて大きくカーブしてすぐ右側に小さな墓地がある。それを過ぎてさらに100メートルほど進むと、県道から左側に分かれて集落に入る細い道がある。その分岐には«EGLISE»という標識も掲げられている。

サン=ポール教会が建設されたのは12世紀前半頃のことと、その名が史料において最初に現

れるのは、1156年に教皇ハドリアヌス4世（在位1154-1159年）がその所有をサンドラス修道院に認めた勅書においてである。宗教戦争がナントの勅令によって一区切り付けられた後も、ラングドックではプロテスタント（ユグノー）のカトリックに対する抵抗・反乱は続き、サン=ポール教会も1621年にプロテスタント勢力によって攻撃を受け、ヴォールトが崩落するなどした（修復は1674年）。

1685年にナントの勅令が廃止されると、サン=ポール=ラ=コストでもカトリック神父デカン（Descamps）がプロテスタントに対する過酷な態度を取り続けたこともあり、1702年にプロテスタントによるカミザール戦争（カミザールの乱／セヴェヌ戦争）が始まると、早々にサン=ポール教会や隣接する神父の住居などがカミザールたちによって荒らされた（9月）。彼らは7月24日にポン・ドゥ・モンベール（Pont de Monvert／現ロゼール県）のシェイラ（Chayla／Chaïla）神父を襲撃して殺害しているが、その部隊を率いていたリーダーの1人ジェデオン（ゲデオン）・ラポルト（Gédéon Laporte）はここサン=ポール=ラ=コストの生まれである。彼は同年10月22日に、サント=クロワ=ヴァレ=フランセーズ（Sainte-Croix-Vallée-Française／現ロゼール県）において国王軍との戦いで殺され、その首はその他12人のカミザールの首とともに、アンデューズの橋の上にさらされた。カミザールの乱の間、サン=ポール=ラ=コストのサン=ポール教会を兵舎として駐留していた国王軍の部隊は、1713年になって撤収していた。

大革命の後、サン=ポール=ラ=コストの司祭は聖職者民事基本法に則り村長の前で宣誓を行った。それ以降、荒れ果てていたサン=ポール教会の修復も進められた。特に1862年には大々的な修理工事が行われ、聖堂内部の聖具・調度類なども整備された。20世紀には屋根、ステンドグラス、鐘塔が修復された。2010年には「サン=ポール教会友の会」が設立され、その後「サン=ポール=ラ=コスト歴史遺産記憶会」（L'Association Mémoire & Patrimoine Saint-Paul-la-Coste）と改名し、現在も聖堂の保全、維持、管理などに携わっている。



30.5.1a Saint-Paul-la-Coste, abside



30.5.1a Saint-Paul-la-Coste, nef

サン=ポール教会の西側には中世の城塔が接続している。方形の厳めしいもので、もともとはサンドラスのル・ピュエッシュ (Tour du Puech [Cendras/30.4.13]) の塔と同じ高さがあったとされるが、現在その頭頂部は聖堂の屋根に合わせて斜めに切り詰められている。塔の西面には下部に大きなアーチ (中はニッチ)、上部には外部に向けて隅切りされた半円頭形の開口部が見られる。この塔がサン=ポール教会よりも古いものなのかどうかについては議論があるが、サン=ポール内部の身廊西壁上部に、現在は埋められているが古い窓が残されており、それがかつては採光の役割を果たしていたのだとすると、この方形の塔はサン=ポールの後に建てられたものであると考えられる。頂部が三角形の小さな鐘楼 (19 世紀以降) が立つのは、身廊の西端ではなく塔の東端の位置である。

サン=ポール教会に出入りするための扉口は、聖堂南側に開いている。扉口の向かって左側には方形の塔に付けられた大きな扶壁があり、右側にはゴシック期以降に増築された礼拝室がある。扉の左右には方形の側柱が立ち、その上に 2 重のアーキヴォルトが架かる。アーキヴォルトおよびその内側のタンパンは無装飾である。アーキヴォルトの起拱部の左右にはコーニスが水平に延びている。扉口のすぐ上には大きな丸窓が開けられているが、この窓もゴシック期以降のものである。丸窓の斜め右上と礼拝室の上の 2 カ所に小さな窓が開けられている。身廊北側には窓はない。後陣は半円形で、中央には外側に向けて隅切りされた大きな半円頭形の窓が開けられている。この後陣の南側には住宅が直接建てられている。

聖堂内部は 2 ベイからなる单身廊形式で、凱旋アーチの東に内陣のベイ、そして東端に半円形の後陣が続く。身廊の南北長は 5.2 メートル、身廊西端から後陣東端までは 15.8 メートルである。身廊の天井は半円筒形トンネル・ヴォールトであるが、身廊を区切る横断アーチはない。身廊の南北には、各ベイに半円形の壁アーチが付けられている。ベイの間にはヴォールトの起拱点に水平に延びるコーニスまで立ち上がる壁付きの半円柱が付けられている。北側の半円柱に付けられた柱頭彫刻は簡素な植物文様である。第 2 ベイの南側には先にも触れた礼拝室がある。その天井部分は半円筒形ヴォールトで、南側には内部に向けて隅切りされた長方形の大きな窓が開けられている。

凱旋アーチは、南北両側で大きな壁付き半円柱が受け止めている。それらの半円柱は基壇の上に立つのであるが、その基壇の形が南北で異なっているのは珍しい。北側が円筒形、南側が方形である。凱旋アーチの北側の下には、木製の説教壇が設けられている。

後陣は半円形で、水平のコーニス (絵で描かれたもの) の上に半ドームが架かる。中央には隅切りされた大きな半円頭形の窓が開けられ、ペトロとパウロの 2 人が並ぶステンドグラスがはめられている。後陣の北側には聖具室が作られている。一方、身廊の西端には北側と南側のそれぞれに、大きな三角形の木製ポーチの下に洗礼盤と聖水盤が置かれている。このようなポーチが聖堂内に備え付けられているのもまた非常に珍しい。

聖堂内の、とりわけ凱旋アーチ、内陣、そして後陣は、ネオ・ロマネスク風のフレスコ画 (幾何学文様、唐草、組紐、植物、星、建築的モチーフなど) で装飾されている。1860 年代に描かれたものである。後陣中央の窓の左右には、ステンドグラスと同じくペトロとパウロの立ち姿が描かれている。これらのフレスコ画や聖堂内のその他の壁面などはかなり傷みが進み、半ば

荒れ果てた状態のままであったが、「サン=ポール=ラ=コスト歴史遺産記憶会」やコミュニンなどが 2018 年に共同で大々的な修復作業を行ったことで、現在は非常にきれいな状態になっている。

Bibliographie :

Anton et Gravi (1970) pp.171-183; Germer-Durand (1868) p.222; Goiffon (1881) p.332; Goiffon (1916) pp.166-174; RIP.

WS :

« Site de La Fondation La Sauvegarde de l'Art Français : Église de Saint-Paul-la-Coste »

« Site officiel de la mairie de Saint-Paul-la-Coste »

30.5.1b サン=ポール=ラ=コスト／マンダジョルの旧城塞礼拝堂

(Chapelle castrale de Mandajors, Saint-Paul-la-Coste)

アレスからだと、サン=ポール=ラ=コストのサン=ポール教会 [30.5.1a] があるアモー・ドゥ・レグリーズ地区の約 2 キロ手前（東）で D172 に入り、山間部の細い道をおよそ 8 キロ西へ向かう（少しだけロゼール県を通る）。マンダジョルの集落の手前およそ 500 メートルのところでサランドル川 (La Salandre) に架かる小さな橋を渡るとすぐ目の前の小丘の上に、ノートル=ダムに捧げられたという小さな礼拝堂が建っている。橋を渡ってさらに 140 メートルほど行くと、東に入る小道があるのでそれを 70 メートルほど歩いて礼拝堂に至る（途中から岩場の上をたどる小径となる）。

この礼拝堂は、もとはここにあったマンダジョル城の城塞礼拝堂であった。城はこの地マンダジョルの領主によって 12 世紀に建設された。1684 年 9 月に最後の領主ピエール・デ・ズール (Pierre des Ours) が 80 歳で亡くなり、この礼拝堂に埋葬されると、城はその後はアレスのバロンが所有したが、もはやここに住むことはなかった。カミザール戦争の際には国王軍の部隊（特にドラゴンあるいはドラゴナードと呼ばれる国王の竜騎兵など）が城に駐屯した。城自体は 1703 年 1 月に行われたカミザールたちとの戦闘の過程で彼らによって破壊され消滅したが、唯一この礼拝堂だけが残された。現在はプロテスタントの教会堂 (temple) となっている。プロテスタントの教会堂としてはフランスで最も小さなものであるという (29 m²)。1990 年代後半までは、内部などが荒れ放題であったが、1999 年と 2006 年に修復工事が行われ、現在はきれいな状態になっている。

この旧礼拝堂は、サランドル川を見下ろす岩場の上に建っている。城と同じくもともとは 12 世紀の建設である。三角形の切妻形の西ファサードはきわめてシンプルなもので、セグメンタ



30.5.1b Chapelle de Mandajors

ルアーチの架かる方形の扉口が開く。そのアーチには「1727」という年号が刻まれた石が組み込まれている。中に入ると、身廊の床面まで 8 段の石段を下りようになっている。身廊には、2 人がけの椅子が左右に 4 つずつ並んでおり、座れるのはおよそ 16 人という小さな礼拝堂である。したがって複数のベイには区切られていない。身廊南側には内部に向けて隅切りされた方形の窓が開けられている。身廊の天井は半円筒形トンネル・ヴォールトである。

凱旋アーチの東側は小さな半円形の内陣（後陣）で、中央には内部に向けて大きく隅切りされた長方形の小さな窓が開けられている。向かって右側には、中央のものよりは大きな窓（隅切りされている）が開けられて採光の役割を果たしている。後陣の上には半ドームが架かる。聖堂内は最近の修復によって白い漆喰に上塗りされ、きれいな状態に保たれている。プロテスタントの教会堂ということもあって、内部には装飾の類いはほとんど見られない。

Bibliographie :

Germer-Durand (1868) p.122; Goiffon (1881) pp.159-160; Laurent (1996) pp.453-454; RIP.
WS : « Site officiel de la mairie de Saint-Paul-la-Coste »

30.5.2 サン=ジャン=デュ=パン／レグリゼット旧教会

(L'Églisette, Saint-Jean-du-Pin) 私有

サン=ジャン=デュ=パンはアレスのすぐ西側に位置するコミューンで、レグリゼット旧教会は、アレスからガルドン川を渡って県道 D30 を西へ約 1.4 キロである。D30 の北側に、個人の住宅に接続する形で残っている。もとは 12 世紀前半頃に、プリウレの付属聖堂として建設され、洗礼者ヨハネ（サン=ジャン=バティスト）に捧げられた。このプリウレを創建したのはサン=ジル修道院の修道士たちであったとも言われる。近隣から（そしてしばしば遠方からも）この聖人を崇敬する巡礼たちがこの地にやって来たというが、その後の歴史はよく分からない。20 世紀初めになって 3 階建てに改造され、引退したセヴェンヌの石炭労働者のための住居として使用されたようであるが、今は人が住む様子もなく、荒れた物置のような状態で放置されている。

建物は 3 ベイからなる単身廊形式で、東端に半円形の後陣が付く。身廊の外壁にはベイを区切る高さのある扶壁が付けられている。身廊部には無残にも 20 世紀になって開けられた住居用の窓がいくつも開けられているが、その壁面自体は黄色がかった石灰岩の切り整えられた中石材がきっちりと積まれたものとなっている。半円形の後陣も同様である。後陣には東端に開口部があるが、やはり 20 世紀になって建てられた小さな建物によって隠されているためによく見えない。個人所有のため内部にはアクセスで



30.5.2 St-Jean-du-Pin, Eglisette

きない。

Bibliographie :

Clément (1993) p.296.

30.5.3 サン=セバスティアン=デグルフィユ／サン=セバスティアン=ドゥ=マランク教会

(*Église Saint-Sébastien-de-Malenque, Saint-Sébastien-d'Aigrefeuille*) 遺構・私有▲

サン=セバスティアン=ドゥ=マランク教会の遺構は、アレスの西およそ 11 キロの山中にある。アレスから県道 D50 で西へ向かい、ラ・フリグール (La Frigoule) の集落から D450 に入ってからさらに 1.8 キロほど北へ進んだところで« Chemin de la Vieille Église »の標識に従って細い登り道に入り、500 メートルである。

この地には、ソーヴのサン=ピエール修道院 (Abbaye Saint-pierre de Sauve) に付属するベネディクト派のブリウレがあった。サン=ピエール修道院自体が、サン=ギレーム=ル=デゼール (ジェローム) 修道院 (Abbaye de Saint-Guilhem-le-Désert / Abbaye de Gellone) の傘下にあった。サン=セバスティアンの建設はブリウレと同じく 12 世紀半ばである。1561 年には住民のほとんどがプロテスタントとなったために放棄された。「アレスの和議」が結ばれた 1629 年にはカトリックの祭儀が復活し、聖堂も修復が進められたが、1702 年 12 月にカミザールの襲撃を受けて破壊され、その後廃墟化した。その遺構は、現在はフェンスで囲まれた私有地の中にあって直接アクセスすることはできない。

建物は 3 ベイからなる単身廊形式である。がっしりとした西ファサードは部分的に崩れてはいるが、中石材がきっちりと積まれたものである。身廊の側壁には太い扶壁が残されている。聖堂東端には半円形の後陣が付けられている。その上部には半円形の小アーチが連続するいわゆるロンバルディア帯が巡らされている。後陣の内外の壁面も、中石材がきれいに積まれたもので、その様子はいかにもロマネスク的なものとなっている。後陣中央には 2 重のアーチで枠組みされた半円頭形の小さな窓が開けられている。身廊部東端の第 3 ベイの南側には天井にセグメンタル・ヴォールトが架けられた礼拝室が作られている。

Bibliographie :

Clément (1993) pp.63-64.

WS : « Cevennes-Tourisme, La Gleisasse »

30.5.4 バガール／サン=サテュルナン教会 (*Église Saint-Saturnin, Bagard*)

バガールは、アレスから県道 D6110 と D910A でアンデューズ方面へ約 7 キロである。逆にアンデューズからだとも D910A をアレス方面に約 6 キロで、この 2 つの街のおおよそ中間に位置する。より現地の発音に近い表記なら「バギャール」かも知れない。サン=サテュルナン教会は、現在の村役場から西へ 300 メートルほど行って、県道 D910A から« Eglise Romane XII Siècle »という標識にしたがって北へ 70 メートルほど入ったところにある。

この地は、古くからアレスからアンデューズやソーヴへ向かう道と、アレスからソミエールなどを経て地中海方面に向かう道が分岐する交通の要所でもあった。古代ローマ時代にはこの地で陶器製造が盛んであったという。12 世紀以降、アレスのテンプル騎士団によって城塞が築かれていた。この騎士団が壊滅した後は、聖ヨハネ騎士団（マルタ騎士団）がその城塞を所有した。またサン=サテュルナン教会から西へおよそ 1.5 キロのル・モナック（Le Monac）と呼ばれる場所に、やはりもとはテンプル騎士団のものであった大きな建物が残されている。そこは 13 世紀にはハンセン病患者の療養院となり、18 世紀には女子修道院として使用された。現在は農家の所有となっている。

バガールは、16 世紀半ばには住民のほとんどがプロテスタントとなっていた。そのため騎士団の城に付属する城塞教会でもあったサン=サテュルナン教会は、半ば廃墟化したまま放置されていたが、1686 年になって修復工事が行われた。カミザール戦争が始まると、1702 年 10 月にカミザールたちの襲撃を受けて焼かれた。しかし翌 1703 年 4 月には、サン=サテュルナン教会の南東およそ 1 キロにあった「ビヨの塔」（Tour de Billot）と呼ばれる城塞での戦いで、今度はカミザール側が大敗を喫している。4 月 29 日の夜、その城塞で一時的に休息していたジャン・カヴァリエ（Jean Cavalier）率いる 1200 名とも言われるカミザールたちが、モンルヴェル元帥（maréchal de Montrevel）の派遣した歩兵 800 と竜騎兵 200 からなる国王軍（部隊指揮官はブランク將軍）の急襲を受け、数百ものカミザール兵士が死んだ。

サン=サテュルナン教会は、カミザール戦争の後に修復工事が行われたが、古い墓地の墓石を再利用するなど、全体的にあまりていねいな修復にはなっていない。聖堂の東側（後陣）は、身廊部に比べてひときわ大きく高さもある方形（四角形）の厳めしい外観である。まるで要塞化された城塔のようであるが、これは建設当初からこのような構造をしていたもので、先にも触れたようにこの地が交通の要所であったことから監視塔の役割も果たしていたようである。聖堂の東端は方形（平面形の後陣）であるが、内部の内陣は半円形である。聖堂建築において後陣外側が平面形の場合、内側の内陣部もやはり平面形であるのが一般的であるが、内部と外部で形がこのように異なる例は、低ラングドックでは、モンペルーにある 17 世紀のサン=テティエンヌ=ドゥ=レルム礼拝堂（Chapelle Saint-Etienne-de-l'Herms, Montpeyroux）、メズにある 10 世紀後半～12 世紀初め頃のノートル=ダム=ドゥ=パラス教会（Église Notre-Dame-de-Pallas, Mèze）などわずかししか知られていない。共に現エロー県にあるが、モンペルーのものは近代の建設であるし、メズのものは時代は古いが現在は廃墟化した遺構が残るのみである。

サン=サテュルナンの側壁には、南北共に、屋根まで立ち上がる扶壁が付けられている。壁面は色の異なる小石材が多く積まれているが、とりわけ南側の第 2 ベイの上部には、異なる色の石材が交互に並べられているのが見える。身廊南側の各ベイに 1 つずつ、外側に向けて隅切りされた細長いロマネスク様式の半円頭形の窓が開けられている。南北に張り出た塔のような後陣部には南側にそれよりも大きな窓があるが、ゴシック期以降に一度開けられた窓を埋めて、その横にずらせる形でさらに後の時代に開けられたもので、その様子はどちらかと言うと不格好である。身廊北側には第 1 ベイにやはり大きな半円頭形の窓が開けられているが、これも新しいものである。



30.5.4 Saint-Saturnin de Bagard

扉口は、現在もっぱら使用されているメインの出入口が身廊第1ペイの南にある。3段の石段を上る。方形の扉の上には三角形の切妻形の石組みが載せられているが保存状態は悪い。出入口は身廊北側の第1ペイと西ファサードにも開けられている。この2つは小さなもので、それぞれ半円形のアーキヴォルトが架けられている。身廊北側の第1ペイのアーキヴォルトは組石も大きくて立派なものとなっている。西ファサードの切妻の頂部には小さな鐘楼が立つ。そのすぐ下に小さな丸窓が開けられている。

聖堂内部は2ペイからなる単身廊形式で、その東側に半円形の後陣が続く。身廊外壁に見られたような色の異なる石組み模様が、凱旋アーチや後陣の半ドーム、そしてヴォールトの起拱部などに見られる。また身廊の壁アーチに付けられたインポストにはモールディング装飾が、さらに凱旋アーチ北側のインポストにはピルエットと歯車状の装飾が付けられている。聖堂内部は、近年の修復によって漆喰などが取り除かれて、より以前のロマネスク風の古い姿が復活している。

Bibliographie :

カヴァリエ (2012) 229-235 頁、495-497 頁; Bonnet (1905) pp.416-417; Bonnet (1938) p.35, p.41; Clément (1993) p.341, p.403; Germer-Durand (1868) p.18; Goiffon (1881) pp.35-36; Goiffon (1916) pp.162-166.

WS : « Site officiel de la mairie de Bagarde »

30.5.5 アンデューズ／サン＝エティエンヌ教会 (Église Saint-Étienne, Anduze)

アンデューズはアレスの南西およそ 15 キロにある小都市で、ガルドン川支流 (le Gardon d'Anduze) がセヴェンヌの山々からアレスの南に広がる平野部へと流れ出る溪谷の出口（言い換えればガルドン川がセヴェンヌの山々へと分け入る入口）に位置する。街はガルドン川西岸に沿って南北に広がり、その西側後背にはサン＝ジュリアンの岩山 (Rocher de Saint-Julien) が立ち上がる。川のすぐ反対側（東岸）には今度はペルマール (Peyremale) の岩山が迫り、

地理的にはここはまさしくセヴェンヌの山々と平野部の間にある関門 (la Porte des Cévennes) なのであって、実際に歴史的にも重要な戦略的拠点としての役割を果たしてきた。

この街は、最も古くはユゼス司教区に属したが (5 世紀)、6 世紀から 7 世紀に今のガール県西部に置かれたアリジトゥム司教区 (évêché d'Arisitum) に入れられ、さらに 8 世紀になってニーム司教区に編入された。1694 年から大革命まではアレス司教区に属した。

アンデューズには実はロマネスク聖堂はほとんど残っていない。旧市街にあるサン＝テティエンヌ教会が、建物全体は 17 世紀後半のものであるが、鐘塔の一部がかろうじてロマネスク期の 12 世紀のものであるに過ぎない (後述)。しかしアンデューズはこの地域では重要な役割を果たしてきた都市であるので、ここでその歴史を簡単に振り返っておきたい。

アンデューズの歴史の最初期にその領主として名前が現れるのは、A. Chastand (1965) によれば、9 世紀のダディラ (Dadila)、アデルブラード (Adelbrade/Aldebralde)、オーサンド (Aussinde/Auscinde/Austindane) の 3 人である。このうちアデルブラード (またはアルデブラード) は、この地にあった女子修道院の院長 (abbesse) であったオーサンドにアンデューズの城から遠くないところにある« Berthomates »なる土地を譲渡 (売却) したのだが、810 年頃にオーサンドはこの村をさらにアニアーヌ修道院に寄贈した。それを示すアニアーヌ修道院のカルチュレールがアンデューズに関する最も古い文書とされる。なお 10 世紀後半のニーム司教ベルナル (Bernard/在位 947-986 年) はアンデューズ家出身で、アデルブラードの息子の 1 人とされることもある。

中世の 13 世紀までの間、この地を所有・支配したアンデューズ家 (maison d'Anduze) は南フランスにおける屈指の有力領主のひとつであった。しばしばベルモン＝ダンデューズ (Bermond d'Anduze) 家とも呼ばれ、13 世紀に至るまで上級領主であるトゥールーズ伯に従い、ラングドックを中心に、婚姻関係などによって勢力を拡大した。本拠地アンデューズの他、主要拠点はソーヴ (Sauve)、アレス (Alès)、ソミエール (Sommières)、ラ・ヴルト (La Voulte-sur-Rhône) などであり、中でもアレスはプレ家とともに共同領主として強力な支配を続けた。また一族からはラングドック (ニーム、ナルボンヌ) のみならずプロヴァンス (マルセイユ、トゥーロン) やローヌ (ヴィヴィエ、ヴァランス、ディー)、オーヴェルニュ (ル・ピュイ) などの司教、またマルセイユのサン＝ヴィクトールやマザンの修道院長などを輩出している。

しかしアンデューズ家の最初の歴史は実際にはよく分からないことが多い。アレスにおいて 12 世紀に共同領主となったプレ家とは同根のようであり、トゥールーズ伯家とのもとの血縁関係も指摘されたりする。アンデューズ家として最初に権勢を確立するのはベルナル・プレ (Bernard Pelet, v.950/970-1029) である。A. Chastand は、このベルナル・プレが、先に触れたアデルブラードの孫であるとしているが、確実なことではない。その後もベルナルやベルモンといった同名の後継が頻出することもあって、正確な継承関係を同定するのは容易ではない。12 世紀のベルトラン 5 世 (Bertrand V, v.1115/1130-v.1170) は、ロクフィユのアデレード (Adélaïde de Roquefeuil) と結婚し、アンデューズ本領やソーヴとともにロクフィユの領主ともなっている。ロクフィユは現在のアヴェロン県サン＝ジャン＝デュ＝ブリュエル (Saint-Jean-du-Bruel) である。

ラングドックでは 12 世紀以降、異端カタリ派が勢力を拡大し、それに対して 1209 年からいわゆるアルビジョワ十字軍が南フランスに侵攻した。その時代のアンデューズ家当主はピエール・ベルモン 7 世 (v.1204-1254) で、ヴァランティノワ伯エマール 2 世の娘ジョスランドを妻としていた。彼はカタリ派に親和的であったトゥールーズ伯側に与して十字軍と戦った。結果的にトゥールーズ伯側の敗退によって本拠地アンデューズやアレスの領地を失い（それらは 1229 年のパリ条約の後、王領に編入）、アンデューズ本家は歴史の表舞台から消えていくこととなった（アレスにおけるアンデューズ家については、「アレス [30.4.12a]」を参照のこと）。アンデューズには同家の城が築かれていたが、アルビジョワ十字軍の後の 1254 年に国王ルイ 9 世（サン＝ルイ）がその破壊を命じ、1256 年に実行されている。

アンデューズは 16 世紀には南フランスにおけるプロテスタントの重要な拠点の 1 つとなった。1598 年のアンリ 4 世によるナントの勅令以降もプロテスタント勢力はフランス各地でしばしば反乱を起こしており、1628 年 10 月 28 日にリシュリユーがラ・ロッシュェルを陥落させた後も、南フランスではプロテスタントのロアン公アンリ（Henri II de Rohan, 1579-1638）が反乱を継続していた。これを鎮圧すべくルイ 13 世とリシュリユーはセヴェンヌへと軍を進め、プリヴァヤやアレスなどプロテスタントの拠点都市を次々と陥落させた。ロアン公はアレス陥落の時にはアンデューズに立て籠もっており、1629 年 6 月 17 日にアレスが国王の軍門に降った際に結ばれた「アレスの和議」（Paix d'Alès）では、2 千数百名を数えたアレスのプロテスタントたちは二度と王に反抗しないことを誓い、街を国王に明け渡してアンデューズに向かった（この間の経緯については「アレス [30.4.12a]」を参照のこと）。

反乱の首謀者ロアン公アンリは家族とともにイタリアのヴェネツィアに亡命したが、国王とリシュリユーはアンデューズにも圧力を加え、この街の城と周壁の取り壊しを命じた。その際、1320 年に建設された円形の城塔（Tour-Ronde）の 1 つは日時計の付けられた時計塔（Tour de l'Horloge）として住民たちの生活に資していたために取り壊しを免れた。この 22 メートルの円塔は 18 世紀に小さな鐘楼が頂部に据え付けられて、今もアンデューズの街のシンボルとなっている。エグ＝モルト（Aigues-Mortes）の城壁にあるコンスタンスの塔（Tour de Constance）と、その外観が似ていることでも知られる（ただしエグ＝モルトのものには日時計は付けられていない）。

16 世紀終わり頃から、アンデューズでは都市周壁の南側部分に組み込まれる形で、エルボドゥーズ（Airebaudouze）家によって新しく城館が建設された（Château Neuf）。現在では旧市街の南側を通るメインストリート（Plan de Brie）の時計塔の西の位置に、その城館の南側の建物が 2 つの円塔とともに残されている（ただし私有）。その通りの南側にはプロテスタント



30.5.5 Anduze, Tour de l'Horloge

の教会堂 (temple) が建っている。1820-1823 年に兵舎の跡地に古代の神殿を思わせる新古典様式で建設されたもので、フランスでも最も大きなプロテスタント教会堂の 1 つである。なお、18 世紀初めにセヴェンヌで繰り広げられたカミザール戦争においてプロテスタント (ユグノー) 側のリーダーであったジャン・カヴァリエ (Jean Cavalier, 1681-1740) は、二十歳の時にいったんジュネーヴに逃亡する前は、ここアンデューズのパン屋で働いていた。

アンデューズにおける最も古いキリスト教聖堂は、街のすぐ西側に立ち上がる岩山の上にあったサン=ジュリアン礼拝堂 (Chapelle Saint-Julien) である。350 年頃の初期キリスト教時代に建てられた。聖ジュリアン (ブリウドの聖ユリアヌス) は、ディオクレティアヌス帝治下の 304 年にオーヴェルニュのブリウドで迫害によって殉教した聖人である。アンデューズのこの礼拝堂は、宗教改革期までは存続していたようであるが、その後破壊された。A. Chastand によれば、その遺構は、20 世紀半ばの時点で、岩山の上にまだわずかに残されていたという。

アンデューズには、6-7 世紀になると本格的にキリスト教が浸透する。9 世紀になるとアンデューズの女領主オーサンド (Auscinde/Aussinde) が女子修道院を創建し、その院長になったとされる。この女子修道院は、アニアヌ修道院の傘下に入ったとも言われる。この修道院以外にもアンデューズにはノートル=ダム=デュ=ブル教会 (Église Notre-Dame-du-Bourg) やサン=ティレール教会 (Église Saint-Hilaire) が作られた。ただしこれらはすべて現存しない。

アンデューズの現在のサン=ティエヌ教会は旧市街の西寄りの場所に建っている。この聖堂の最も古い記録は 927 年であるとされる。宗教戦争が始まってほどなく 1567 年に取り壊されてプロテスタントの教会堂が建てられた。現在の建物は、1685 年のフォンテーヌブローの勅令 (ルイ 14 世によるナントの勅令廃止) によってアンデューズのプロテスタントたちが街を追われてセヴェンヌの山の中へと逃れていった後に、再びカトリックの聖堂として建て替えられたものである。1688 年 4 月にアレス司教によって献堂式が執り行われている。身廊の側壁に並ぶ大きな扶壁とその間に開けられた半円頭形の窓、内部が半円形となった後陣、身廊内部にあって半円形アーチの中に作られた礼拝室の列など、一見したところそれらはロマネスク様式のように見えるが、身廊と後陣の聖堂本体が実際に建設されたのは今も触れたように 17 世紀後半のことである。唯一身廊の北側に立ち上がる方形の鐘塔の下半分にあたる土台部分だけが 12 世紀のロマネスク期にさかのぼるものである。17 世紀まではカトリックの聖堂の鐘塔で、プロテスタントの教会堂に建て替えられた際にも破壊は免れた。しかしこの塔は、もともとはここにあったアンデューズの領主の古い城のものであって、初めからロマネスク聖堂の鐘塔として作られたものではない。

旧市街から 200 メートルほど南に行くとコルドゥリエ公園 (Parc des Cordeliers) がある。その公園の一角に、クララ・ダンデューズ (Clara d'Anduze, v.1195-v.1257/



30.5.5 Anduze, Saint-Étienne

v.1216-1275) の胸像が置かれている。この女性の存在は必ずしも確実なものではないとする見方もあるが、おそらくはアレス共同領主であったアンデューズ家のベルナル 7 世 (Bernard VII d'Anduze) の娘で、さらに同じアレスの共同領主であったプレ家のレーモン・プレ 2 世 (または 3 世 / Raymond II ou III Pelet) の妻となったシビル (Sybille) と同一人物であったのではないかとされる (クララについては「アレス [30.4.12a]」も参照のこと)。彼女はアンデューズ家出身の貴族の女性であったが、同時にこの時代活躍したトルバドゥール (吟遊詩人) の一人でもあった。オック語では女性のトルバドゥールは「トロバイリッツ」(trobairitz) と言う。

クララは夫とは別に、同じトルバドゥールのウク・ドゥ・サン・シルク (Huc ou Uc de Saint-Circ) に対する熱烈な愛を歌った恋愛詩を残し、彼もまたクララを讃える歌を作った。同じトルバドゥールのポン・ドゥ・キャブドゥイユ (Pons de Capdeuil) もまた彼女を讃えている。このエピソードは、やはり女性トルバドゥールであったディー女伯ベアトリスの恋愛物語を思い起こさせるもので [Die / 26.3.19a]、13 世紀に花開いた南フランスの文化の歴史を彩る一幕である。なおアンデューズのコルドゥリエ公園にあるクララの胸像は、最初に作られたのは 1895 年のことで、もとは銅像であった。しかし第二次大戦におけるドイツ占領中の 1942 年に溶かされてしまい、1954 年になって石像で再建されたのであった。

Bibliographie :

Chastand (1965) pp.8-18; Fréminville (2008) pp.95-110, pp.143-171; Germer-Durand (1868) p.8; Goiffon (1881) pp.16-18; Laurent (1996) pp.428-434; Malbos (1980) pp.202-229; Moreau (1997) pp.25-26; Paulet (1847) pp.22-24, pp.33-68; Viguier, A.-L.-G. (1823/1987) pp.33-58; RIP.

30.5.6a ボワセ=エ=ゴジャック / ノートル=ダム=デュ=コロンビエ教会

(Église Notre-Dame-du-Colombier, Boisset-et-Gaujac) 私有

ボワセ=エ=ゴジャックは、アンデューズの東に隣接するコミューンである。現在のコミューンは、大革命の後の 1790 年になってボワセとゴジャックの 2 つの村が合併したもので、ノートル=ダム=デュ=コロンビエ教会は、このコミューンのほぼ中央西寄りのゴジャック地区にある。アンデューズからは県道 D366 で南東へ約 4.5 キロに位置し、300 メートルほど南にはガルドン川が流れる。この場所はかつてはアレスとソーヴを結ぶ古い街道沿いでもあった。

1060 年のニーム大聖堂のカルチュレールの中に、ガニアクム (Ganiacum) という名が現れる。1156 年のカルチュレールではガウヤクム (Gaujacum) で、教皇ハドリアヌス 4 世 (在位 1154-1159 年) が同年の勅書において、ゴジャックのウィラとそこにあるプリウレおよびそれに付属する聖母マリアに捧げられた聖堂 (ecclesia Sanctœ-Marie de Gaujaco cum villa) がニーム司教の所有であることを認めている。大革命まではアンデューズのヴィカリウス管区にあって、最初はニーム司教区に、後に大革命までアレス司教区に属した。

ゴジャックにベネディクト派のブリウレ（小修道院）が創建されたのは 12 世紀半ばのことである。「コロンビエ」の名は、もともとはユダヤ人の遺骨安置所（colombarium juif）に由来するとも言われる。宗教戦争期に破壊され、1670 年にはいったん再建されるが、1703 年にカミザールたちの襲撃を受けて焼かれた。その後もう一度再建されるものの、大革命の後に国有財産として売却され、農家が所有した。その後は何人もの所有者が入れ替わって今日に至る。



30.5.6a Notre-Dame-du-Colombier

聖堂はラテン十字形の平面プランで建てられている。ここから約 2 キロ南西の、ガルドン川対岸にあるラ・マドレーヌの石切り場から運ばれた石灰岩を主体として建設されている。聖堂の北側と南西側にはかつてのブリウレの建物が接続し、西ファサードはその 2 つの建物に挟まれている。扉口は半円頭形で、その半円頭アーチの約 2 メートル上に、さらに大きな半円形の壁アーチが架けられている。切妻の下には半円頭形の窓が開けられている（隅切りはされていない）。西ファサードの北角には扶壁が残されている。身廊北側は旧ブリウレの建物があつて見るができない。北から南へと土地が傾斜しているので、身廊南側は土台を積み上げてその上に建てられている。その壁面には扶壁が 2 つ並び、東側のベイにはわずかに隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。また西側のベイには、近代になって農家によって開けられた方形の出入口があるが、現在は埋められている。身廊の東側に続く後陣の南北両側には、大きな方形の礼拝室が建てられている。共に上部が切妻形で丸窓が開けられている。北側の礼拝室のやはり北側の壁面には、小さな十字形の開口部が見られる。P.A.Clément によれば、十字形の開口部がこの位置にあるのは非常に珍しいという。

東を向いた半円形の後陣は、修復されていることもあるが、壁面や石積みなどがきれいに整えられており、ロマネスク期の雰囲気は今によく伝えるものとなっている。中央（東端）にはロマネスク様式の窓が開けられている。半円頭形で縦に細長い窓は、2 重のアーチに縁取られてその中に開く。後陣の左右には礼拝室が並ぶが、それぞれ東面に、隅切りされた半円頭形の小さな窓が 1 つずつ開けられている。

聖堂内部は、近年の修復によってきれいな状態が保存されている。2 ベイからなる身廊、トランセプト様に南北に付けられた礼拝室と交差部（または内陣）、そして半円形の後陣から構成されている。身廊から後陣までの全長は約 18 メートル、身廊の南北幅は 6 メートルである。天井は水平のコーニスの上に架けられた半円筒形のトンネル・ヴォールトである。身廊の各ベイの側壁には半円形の壁アーチが並ぶ。第 2 ベイ南側にはかつては半円頭形の大きな出入口が開けられていたが、現在は埋められている。第 1 ベイと第 2 ベイを区切るのは壁付きの太い半円柱で、ヴォールトの起拱点まで立ち上がり、その柱頭彫刻は図形的な大葉である。第 2 ベイと第 3 ベイを区切るのは方形のピラストルと、やはりそこに付けられた太い半円柱である。こ

の半円柱の柱頭彫刻も図形的な大葉である。ピラストルと半円柱は 2 重になった半円形の凱旋アーチを受け止める。これらの半円柱は基壇の上に、円形のトルスを介して立ち上がる。

内陣の側壁に付けられた水平のコーニス、身廊のそれよりも少し低い位置にある。そのコーニスの下に半円アーチが架けられ、そのアーチを介して南北の礼拝室が続く。礼拝室にはそれぞれ東側に半円形の小後陣が作られている。中央に半円頭形の小さな窓が開けられ、水平のコーニスの上に半ドームが架けられている。後陣の中央には 2 重のアーチに縁取られた細長い半円頭形の窓が開けられている。コーニスの上には半ドームが架かるが、この半ドームの起拱点に巡るコーニスは、内陣のそれよりもさらに低い位置に付けられている。以上のようなゴジャックのノートル＝ダム＝デュ＝コロンビエ教会内部の様子は、トルナックのサン＝ボディル教会 [30.5.7b] とよく似ていると言える。

ゴジャックのこのプリウレは、以前は付属するノートル＝ダム＝デュ＝コロンビエ教会とともに私有地の中にあってアクセスできなかった（筆者が訪れた 2014 年にも入れなかった）。しかしごく最近になって滞在型の高級ホテルとなったようである。

Bibliographie :

Clément (1993) pp.207-208; Germer-Durand (1868) pp.97-98; Goiffon (1881) pp.133-134, WS : « Site officiel de la commune de Boisset-et-Gaujac »

30.5.6b ボワセ＝エ＝ゴジャック／ボワセのサン＝サテュルナン教会

(Église Saint-Saturnin, Boisset-et-Gaujac) 遺構・私有

ボワセ＝エ＝ゴジャックのボワセ地区には、サン＝サテュルナン教会の遺構化した建物が農家の敷地の中に残されている。アンデューズからは県道 D910A と D106 を東へ 4 キロ、同じボワセ＝エ＝ゴジャックのゴジャックにあるノートル＝ダム＝デュ＝コロンビエ教会からは北へ 1.2 キロである。

サン＝サテュルナン教会は、この地に創建されたプリウレの付属聖堂で、トルナックのサン＝ボディル教会 [30.5.7b] とほぼ同時期の 12 世紀に建設された。トルナックのサン＝テティエンヌ修道院に付属し、と言うことはトルナックが属するクリュニー修道会の傘下にあり、同じクリュニーのサン＝タンドレ＝ドウ＝クリュジエール (Saint-André-de-Cruzières／アルデッシュ県) と建築の仕様や装飾などが似ている。

聖堂の建物は、農家の敷地の中にあってアクセスできない。しかも倉庫や住居などに取り囲まれており、全体をよく見ることはできない。倉庫として使用されているために建物の保存状態は決して良いとは言えない。外から最もよく見えるのは、西ファサードの切妻部分に残され



30.5.6b Saint-Saturnin de Goujac

ている装飾的な壁アーチの列である。中央のアーチが一番高い位置にあり最も大きい。その左右両側に段々に高さが低くなる形でアーチが4つ並べられている。アーチの数は、本当は中央のものの左右に2つずつで合わせて5つなのであるが、最も北側のものは、農家の建物が直接建てられていて見えない（あるいは取り去られたか）。中央のアーチの下には外に向けて隅切りされた半円頭形のロマネスク様式の窓が開けられている。この中央のアーチの石組みと窓のアーチ（ヴシュール）の組石は部分的に亀裂が入って壊れてしまっている。それ以外の小アーチはニッチで、タンパン部分は無装飾のモノリスである。それぞれのアーチは斜めに切られた方形のモディオンが受け止めている。

西ファサード上部のアーチ列以外にからうじて外から見えるのは、同じ西ファサードの下に付けられた尖頭形の扉口、身廊南側上部に巡らされたコーニス、半円形の後陣の一部などである。

Bibliographie :

Clément (1993) pp.208-209; Germer-Durand (1868) p.29; Goiffon (1881) p.55; Goiffon (1916) p.208.

30.5.7a トルナック／旧サン＝テティエンヌ修道院

(Ancienne abbaye de Saint-Étienne, Tornac) 私有

トルナックは、アンデューズのすぐ南に隣接するコミューンである。現在の村役場 (mairie) へは、アンデューズから県道 D907 と D982 で南へ約 5 キロである。アンデューズから約 3 キロのラ・マドレーヌ地区で D982 が D907 から南へ分岐するが、その場所を西側から見下ろす山の上（標高 191 メートル）にはトルナックの城 (Château de Tornac) が残っている。11 世紀から 12 世紀にかけて建設されたもので、中世にあってもアンデューズから南へ向かういくつかの街道が分岐する地点にあって、交通の要衝を押さえる重要な場所であると同時にアンデューズ防衛のための軍事拠点でもあった。実際、11 世紀から 12 世紀にかけてこの城を建造したのはベルモン＝ダンデューズ (Bermond d'Anduze) 家であった。16 世紀以降に城主となったラ・ジョンキエール族はアレス伯に臣従している。城はさらにラ・ファール家のものとなり大革命を迎える。1792 年に火災に遭い、その後は分割のうえ売却された。城の敷地はおおよそ三角形で、東側が 28 メートルと南北に長いルネサンス様式の居館で、居館の北端には「サンドラン塔」(Tour Sandeyran) として知られる円塔が、また居館の西には城の城門である方形の塔が建てられている。

しばしば単に「トルナックの僧院」(Monastère de Tornac) と呼ばれる旧サン＝テティエンヌ修道院 (またはプリウレ) は、村役場から、途中サン＝ボディル教会をへて、およそ 1 キロ西へ行ったところにある。今触れたトルナックの城からは直線距離にして南へおよそ 2 キロである。周りをブドウ畑に囲まれている。現在は私有のためにその敷地の中に入ることはできないため、敷地の外から建物を見るしかない。しかし今日まで残されたその外観を見ただけでも、最盛期の偉容・繁栄ぶりを容易にうかがい知ることができる。

この場所にはもともと古代のウィラと墓地があった。7世紀になるとこの地にベネディクト派の修道院が創建された。ラングドックでは最も古い修道院の1つで、最初はサン＝エティエンヌ (Saint-Étienne) の名を冠していたが、その後サン＝ソヴール (Saint-Sauveur) がそこに付け加えられた。8世紀になると、南フランスに進出してきたイスラーム勢力によって破壊され半ば廃墟化した。808年、シャルルマーニュ (カール大帝) は、ニーム大聖堂やサン＝ピエール＝ドゥ＝ラ＝ヴァレ＝フラヴィエンヌ修道院 (Abbaye de Saint-Pierre-de-la-Vallée-Flavienne/後のサン＝ジル修道院) とともにトルナックを保護下に置き、その修復を進めた。トルナックがシャルルマーニュの保護下に置かれたことは、814年、神聖ローマ帝国皇帝ルートヴィヒ1世 (在位813-840年、フランス国王としてはルイ1世) がそれを再確認している。なお Goiffon (1916) によれば、817年にアーヒェンで作成された帝国の修道院所有リストにはトルナックの名はなく、これはトルナックがイスラームに破壊されたまま、いまだ廃墟状態を脱していなかったからではないかとしている。

814年以降、トルナックの修道院はニーム司教の所有のもとに置かれた。860年頃には、教皇ニコラウス1世 (在位858-867年) が、トルナックの修道院をニーム司教イズナルドゥス (Isnardus/Isanrd/在位858-860) の管理下に置くことを認めている。それ以降、9世紀から12世紀までの幾人もの教皇が勅書の中でこのことを確認している。Clément (1993) は、再建されたトルナックの修道院が「セヴェンヌのジュミエージュ」 (Jumièges de Cévennes) と呼ばれるほどの大きくて見事なものであったとしている (ジュミエージュはノルマンディーの有名な大修道院)。

1066年、ニーム司教はトルナックの修道院を、その近くにあったサン＝ボディル教会 (カロリング期の古い聖堂) とともにクリュニー修道会に譲渡した (譲渡の年は1080年とも)。これ以降、トルナックの修道院は« abbaye »の格付けを失い、プリウレ (prieuré/小修道院) となった。この時にサンドラス修道院もクリュニーの傘下に入っているが、サンドラスはその後も« abbaye »と呼ばれ続ける。1118年12月8日、教皇グラシウス2世 (在位1118年1月-1119年1月、クリュニーで死去) が、とりあえず工事が完成したトルナックの「プリウレ」のサン＝エティエンヌ付属教会の献堂式を執り行っている。さらに1156年、教皇ハドリアヌス4世 (在位v.1100-1159年) が、あたためて「トルナックの僧院」 (Tornacense monasterium) をニーム司教の所有とし、1157年には国王ルイ7世がこれを確認している。1174 (1175) 年、アンデューズの領主ベルナール2世 (Bernard II d'Anduze) がニーム司教アダルベール (Adalbert d'Uzès) に臣従したため、トルナックの僧院も、ベルナール2世の保護を受けることができた。

トルナックの僧院には、院長 (prieur)、聖具管理監 (sacristain)、看護監 (infirmier)、侍従 (camérier) といった役職者がいて、組織としてもしっかりしたものであったようで、さらにまた政治的にも経済的にもかなりの安定を享受した。その繁栄ぶりは、傘下の修道院をいくつも所有していたことからもうかがえる。例えばサン＝ナゼール＝デ＝ガルディエ (Saint-Nazaires-des-Gardies)、ボワセ＝エ＝ゴジャック (Saint-Saturnin et Colombier de Boisset-et-Gaujac)、ヴァブル (Saint-André, Vabres)、ソカ (Soca、ただしそれが具体的にどこなのかは

不明) など。1180 年 (または 1181 年) には、債権に苦しむブサルモディ修道院 [30.3.7b] をその経済的危機から救っている。その見返りにトルナック院長ベルトラン (Bertrand) は、ブサルモディからいくつもの土地を獲得したのであった。

16 世紀半ばから始まるフランス宗教戦争によってトルナックの僧院の輝かしい歴史には終止符が打たれることとなった。トルナックはこの地方におけるクリュニーの豪奢さのシンボルであり、かつその封建的・経済的な支配力のゆえに、容易にプロテスタントの攻撃の対象となった。建物は防御のために要塞化されたりするが、修道士の居館 (ドルトワール他)、聖堂、クロワトル、修道院長の館などが破壊され、結局は半ば廃墟化してしまった。それらが再建されることはなく、1702 年 12 月に今度はカミザールたちに焼かれた。

大革命の後、国有財産として競売にかけられた際には、聖堂は西ファサードや後陣がかろうじて残っていたものの、そのヴォールトは崩落していた。この僧院を手に入れた農家は、ロマネスク芸術などには全く無理解で、建物はほとんど放ったらかし状態となり、柱頭や柱などは次々と売り払われてしまった。1883 年の時点で、聖堂北壁、西ファサード、後陣だけが残ри、ヴォールト、屋根、南側の側廊の壁などは全て失われている (Charvet, 1883)。1970 年代には、残された聖堂北壁に接する形で新たに住居とテラスが建設され、西ファサードの内側には石段が巡らされた。また 1985 年には西ファサードのすぐ前に大きなプールが作られた。P.A.Clément は、私有であることを盾に取ったこうした増改築行為を、貴重な歴史遺産に対する「蛮行」(vandalisme) だと非難している。G. Charvet は 1883 年の時点で、その時の所有者は建物の価値を認めてそれをよく保存しようとしていると書いているので、おそらくは 20 世紀に入ってさらに所有者が変わり、残念ながらそうした「蛮行」はその後の新しい所有者によるものではないかと推察される。

現在まで遺構となつて残る建物は、11 世紀終わりから 12 世紀初め頃に建設されたものである。石材はラ・マドレーヌの石切り場から採られた石灰岩の中石材が主体であるが、後陣にはウルヌ川の南から運ばれた石材も見られる。

扉口は西ファサードに開き、その上に架けられたアーキヴォルトには 3 つの半円形ヴシュールが重ねられている。一番外側のヴシュールは細い円筒形のモールディングと歯車形のフリーズ (三角形の歯形の連続) で縁取られる。内側の 2 つのヴシュールは、それぞれがさらに無装飾のクラヴォーの列と円筒形のモールディング (トーラス) からなっている。かつて扉口の左右には柱頭彫刻付きの円柱が 2 本ずつあって 2 つのヴシュールを受け止めていたが、取り去られてしまって今はない。所有者によって売り払われたようである。扉口自体も埋められてしまっている。アーキヴォルトの内側にあるタンパンはない。



30.5.7a Monastère de Tornac

西ファサードの中ほどの高さのところに水平

の歯車状の帯が付けられ、その上に半円頭形のロマネスク様式の大きな窓が開けられている。この窓のアーチ部分は3重のヴシュールで縁取られる。ここでも窓の頭部のヴシュールを左右で柱頭彫刻付きの小円柱が受け止めていたが、やはり取り去られて今はない。これは窓の外側と内側の両方で同様である。

西ファサードの北側（つまり身廊の北側）には、側廊の上に18世紀になって建物が作られた。要塞化されたような方形の塔が2つ付けられている。

聖堂東側には後陣部分が残る。この後陣の南北両側は、近代になってから農家の建物が直接建てられて部分的に失われた。残された後陣壁には、歯車状のフリーズの下に、ロンバルディア帯のようにして小アーチが連なる。これらのアーチは小さなヴシュールが2つ重なるもので、外側のヴシュールは3つのクラヴォーから組まれている。内側のヴシュールとさらにその内側の小さな半円形のタンパンはモノリスである。小アーチの連なりは、3つ1組となって1つのベイを形作る。このベイは後陣壁に3つ残されている。それぞれのベイの間は、後陣の下まで続く細長くて出張りが少なく平たい装飾的な扶壁（ピラストル）で区切られる。このような扶壁は「レゼーヌ」（lésène／英語ではピラスター・ストリップ）と呼ばれ、ロマネスク初期の聖堂壁面（とりわけ後陣壁面）にしばしば見られるものである。後陣の各ベイの中（3つの小アーチの下）には隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。窓のアーチはクラヴォーによってきれいに組まれている。

トルナックの僧院の後陣は、小アーチ列の上に歯車の帯が巡るところも含めて、この近くではサン＝フェリックス＝ドゥ＝パリエール（Saint-Félix-de-Pallières [30.5.13a]）のものとよく似ている。また少し離れるがソミエールの近くのサリネルにあるサン＝ジュリアン＝ドゥ＝モン＝トゥルドン（Saint-Julien-de-Montredon, Salinelles [30.3.13]）の後陣も同様である。ただしサン＝フェリックスやサリネルの場合には窓は東端（後陣中央）に1つだけである。トルナックから約5キロ南のサン＝マルタン＝ドゥ＝ソスナック（Saint-Martin-de-Sossenac [30.5.12a]）も後陣の仕様がやはりトルナックのものに類似しているが、サン＝マルタン＝ドゥ＝ソスナックの小アーチの数は3つではなく2つとなっている。また少し離れると、ここから南へ約60キロの有名なサン＝ギレーム＝ル＝デゼール（Saint-Guilhem-le-Désert）の小後陣が、3つの小アーチと歯車形の帯という点でよく似ている。

トルナックのサン＝ティエンヌ修道院教会の内部は、かつては4ベイからなる主身廊と、その南北に付けられた側廊、さらに主身廊東端の後陣から構成されていた。主身廊の各ベイの東西長は4.5メートルで、身廊部分の東西長は20.4メートル、後陣も含めた建物全体の東西の長さは27メートルである。主身廊の南北幅は6.34メートル、その高さは13.5メートルで、後陣と側廊はそれよりも少し低い。主身廊は、壁付き半円柱とその上に架かる横断アーチで区切られていた。現在残されている主身廊北壁には横断アーチを受け止め、4つのベイを区切っていた壁付き半円柱が3つ認められる。ただしそのうち中央のものは下半分のみが残る。その他の2つの半円柱の柱頭彫刻は、シンプルで図形的な大葉文様である。ヴォールトの起拱点にはコーニスが水平に巡らされている。その下には、身廊と側廊の間に架けられたアーケードが見える。そのアーケードを形作るアーチは2重になった大きな半円形で、その両側は3つの方形

ピアとなって地上まで下りる。側廊の横幅（南北幅）は主身廊の約半分程度の 3.23 メートルである。

後陣内部は、荷車などが置かれる倉庫として使用されていた。現在も農家の倉庫兼住居が建てられていて中は全く見えない。G. Charvet によれば、後陣内側はニッチとなった 7 つのアーチがアーケードとなって並んでいる。それぞれのアーチの横幅は 70 センチ、高さ 2.1 メートルで、かつては小円柱が受け止めていたが、それらの小円柱は、1883 年の時点ですでに失われていたようである。アカンサスの柱頭彫刻は 2〜3 つ残っていたようであるが、現在もまだあるかどうかは分からない。

聖堂の南側にあったクロワトルは、現在は農家の駐車場を兼ねた中庭となっている。その中庭の東側の建物の 1 階部分にかつての参事会室 (salle capitulaire) が、3 つの入口とともに残されている。ただし中を見ることは全くできない。

Bibliographie :

CAG, 30/3, pp.700-701; Charvet (1883) pp. 287-308; Clément (1989) p.45, p.258, pp.263-268; Clément (1993) pp.201-205; Germer-Durand (1868) p.245; Goiffon (1881) pp.376-377; Goiffon (1916) pp.208-215; *HGL* (tome 5, 1875) col. 1209-1210; Moreau (1997) pp.241-242.

30.5.7b トルナック／サン＝ボディル教会 (Église Saint-Baudile, Tornac)

現在のトルナックの村役場から県道 D982 南へ 300 メートル進み、右折してさらに 300 メートルほど西へ行くと村の墓地がある。サン＝ボディル教会は、その墓地の西側に建っており、周囲にはぶどう畑が広がり、南側にある古い墓地には糸杉が聖堂に寄り添うようにして並んでいる。南フランスの田園風景と調和した美しいロマネスクの、まことに素朴で味わい深い姿を目にすることができるのである。すぐ近く（西へ 280 メートルほど）には、サン＝テティエンヌ修道院 [30.5.7a] の建物が見える。

トルナックは、9 世紀にはトルナグス (Tornagus) と呼ばれていた。ここにはすでにカロリング期にニームのサン＝ボディル修道院の修道士たちによって建てられた聖堂があったが、現在のサン＝ボディル教会は、その古い聖堂の跡に 12 世紀初め頃に再建されたものである。P.A.Clément は、それが近くにあるサン＝テティエンヌ修道院創建のおよそ 20 年ほど後のことであるとしている。1118 年には教皇ゲラシウス 2 世 (在位 1118-1119 年) によって献堂されている。

もともとはニームのサン＝ボディル修道院の傘下にあったが、後にサン＝テティエンヌ修道院



30.5.7b Saint-Baudile de Tornac

の付属聖堂となったようである。大革命以前は、トルナックのサン＝テティエンヌ修道院長が任ずる助祭（終身）がこの小聖堂を管理した。16世紀の宗教戦争によって破壊され、1660年頃に修復・再建されている。しかし1675年、聖堂の状態は良かったが、墓地は囲いもなく荒れ、隣接するプリウレには修道士が2～3人しかいなかったという。その後ニーム大聖堂参事会などの働きで墓地の整備、新しい鐘の鋳造などが進められた。しかし1702年12月に、今度はカミザールたちによって焼かれた。大革命の後、幸いにも売却されることはなく、その後もカトリックの祭儀が行われた。最後の司祭はメダール・ペクル（Médard Pécoul）で、革命の後、聖職者民事基本法に則り宣誓聖職者となったが、その後ほどなくして69歳で亡くなった。19世紀になって、アンデューズの製造企業の支援などもあって、聖堂は維持された。1911年に歴史的建造物（Monument historique）に指定された。近年では1999年に大々的な修復工事が行われている。

トルナックのサン＝ボディル教会は、現在も非常に美しい状態で保存されている。建物はサン＝テティエンヌ修道院と同じく、ラ・マドレーヌの石切り場から運ばれた石材によって建てられている。壁面の土台部分（西ファサードから身廊部北壁、北側礼拝室から後陣にかけて）は、あまり整形されていない小石材がラフに積まれている。カロリング期の古い聖堂の土台であろうか。その上は切り整えられた中小石材がきっちりと積まれている。それはいかにもロマネスク的な壁面であると言える。

西ファサードの左右両端には、出張りは少ないが横幅のある強力な扶壁が付けられている。中央下部に半円頭形の扉口が開く。そのアーキヴォルトは2重のヴシュール（アーチ）からなる。その2つのヴシュールの間にはシンプルであるが太い円筒形トラスが付けられている。そのトラスを左右で受け止めていたと思われる円柱は、柱頭に付けられていた冠板部分だけを残してその柱身は失われている。扉口の上には、外側に向けて大きく隅切りされた半円頭形の窓が開けられ、さらに切妻頂部には鐘を吊すベイが1つだけの小さな鐘楼が載せられている。

建物は単身廊形式で、出張りの少ない側室が第2ペイの東側の南北にトランセプトのように付けられているので、平面プランとしてはラテン十字形である。2つの側室は12世紀初めの建設当時のものである。東端には半円形の後陣が付く。身廊の南北両側の外壁には西ファサードと同じく出張りはいくつかが横幅のある扶壁が、身廊部の2つのペイの間に付けられている。それらの扶壁は屋根部分の約70センチ下まで立ち上がる（屋根には達していない）。身廊南側には、中央の扶壁の左右（つまり各ペイの中央）上部に、外側に向けて隅切りされた半円頭形で縦長のロマネスク様式の窓がそれぞれ1つずつ開けられている。身廊北側には開口部は見られない。

トランセプト様に付けられた南北の側室は、それぞれ出張り（南北長）は少ない。共に東側にのみ外側に向けて隅切りされた小さめのロマネスク様式の窓が開けられている。北側の側室は礼拝室で、南側の側室は聖具室である。

半円形の後陣上部には、いわゆるロンバルディア帯（小アーチの連なり）が巡る。それらの小アーチはシンプルで図形的なモディオンが受け止めている。ロンバルディア帯の上には歯車文様の帯が巡る。これは近くにあるサン＝テティエンヌ修道院の西ファサードおよび後陣の装

飾帯と同じである。後陣には中央（東端）および南側にロマネスク様式の窓が 2 つ開けられている。中央のものは 2 重のアーチに縁取りされた半円頭形の縦に細長いもので、南側のものは外側に大きく隅切りされた美しい窓である。G. Charvet は、後陣には南北両側に対になって窓が 2 つ（中央のものを含めると合わせて 3 つ）開けられているとしているが、筆者には北側のものは確認できなかった。19 世紀後半の時点では開けられていたが、後に埋められたのかも知れない。



30.5.7b Saint-Baudile de Tornac

聖堂内部は単身廊形式で、内陣も含めて内部の東西長は 16.72 メートル、南北幅は 5.25 メートルである。身廊は 2 ペイからなる。水平のコーニスの上は半円筒形トンネルヴォールトで、半円形の横断アーチが架けられ、身廊側壁に付けられた方形のピラストルがそれを受け止める。このピラストルは外壁に付けられた扶壁に対応している。各ペイの側壁には半円形の壁アーチが付けられている。南側の 2 つの壁アーチの中央上部には、内側に向けて隅切りされたロマネスク様式の窓が開く。第 2 ペイの南北の壁アーチの下部東端には、それぞれ側室につながる出入口が開けられている。その形は縦長で横幅は狭い。半円頭形で、アーチの起拱部にはコンソールが付けられている。

上下幅のある凱旋アーチの東は、段々に南北幅が短くなってゆくようにして短い内陣のペイ、そして半円形の後陣が続く。水平に巡るコーニスの上には半ドームが架かる。後陣中央と南側には内部にも向けて隅切りされた半円頭形の窓が開けられているが、南側の窓の隅切り頭部の向かって右側は、後陣の半ドームのアーチを受け止めるシンプルなモディオンともなっている。1999 年の修復工事もあって、聖堂内部はきれいな状態が保たれている。壁面の石積みなどもそのまま保存されており、ロマネスク的な雰囲気を今によく伝えるものとなっている。

サン=ボディルすなわち聖ボディル (saint Baudile/Baudilus) は、3 世紀後半にニームで布教活動を行った聖人である。オルレアン出身と言われる。異教の儀式を拒んだことで 287 年頃に殉教した。伝説によれば、処刑の際に切り落とされた彼の頭は 3 度地面の上をはね、そこに泉が 3 つ湧いたという。ニームの街の北にあったこの 3 つの泉 (les Trois Fontaines) には 15 世紀に聖ボディルのオラトワール (小礼拝堂) が作られた。大革命の時に破壊されたが、1872 年に再建されて今に至る。なお 1913-1914 年に行われた発掘調査では、このオラトワールの近くで、5 世紀の古いサン=ボディル修道院教会の遺構が見つかっている (ニーム [30.3.1a] を参照のこと)。トルナックのサン=ボディル教会を建設したのは、ニームのこの修道院の修道士たちであった。

Bibliographie :

CAG, 30/3, p.700; Charvet (1883) pp.287-308; Clément (1989) p.205; Germer-Durand (1868) p.245; Goiffon (1881) p.377; Goiffon (1916) pp.212-214.

WS : « Base Mérimée (Église Saint-Baudile) »

30.5.7c トルナック／旧サン=ピエール=ドウ=セヴィニャック教会

(Ancienne église Saint-Pierre-de-Sevignac, Tornac) 私有

現在のトルナックの村役場から県道 D982 を南へ 300 メートル進み、右折するとサン=ボデイル教会であるが、そこを左折して狭い道を東へ向かう。120 メートルでプロテスタントの教会堂 (temple) があり、それを過ぎてさらに道なりにおよそ 500 メートルで、現在は農家の建物となっている旧サン=ピエール=ドウ=セヴィニャック教会に至る。

この聖堂の歴史について知られることはあまり多くはない。建設は 12 世紀である。建設当初はトルナックのサン=ティエンヌ修道院に属するものではなかったが、15 世紀頃にはその傘下に入っていたようである。大革命以前は、同じトルナックのサン=ボデイルと同じく、アンデューズの主任司祭管轄区を構成する小教区であったが、聖堂の祭儀を取り仕切ったのは、アレス司教が任ずる助祭 (終身) であった。大革命の後、農家の所有となり、家畜小屋や農機具・飼料などの倉庫として使用された。20 世紀終わり頃には無人化して放置されていたが、最近になって再び農家が所有し、聖堂の南側に直接つながる建物は現在の所有者の住居となっている。

旧サン=ピエール=ドウ=セヴィニャック教会は、ここから 2 キロほど東に行ったオルトゥー (Orthoux) から運ばれた整形された中小石材によって建てられている。その南側には、今も触れたように所有者の住居が、北側には農家の倉庫が直接建てられており、身廊部分を外側から見ることはできない。西ファサードも南北両側をその農家の建物に挟まれている。ファサードの中ほどの高さのところには、かつての扉口の上に農家によって大きな方形の出入口が開けられ、そこに上るための石段が付けられている。西ファサードの三角形の切妻のすぐ下には、外側に向けて大きく隅切りされた、半円頭形で縦に細長い窓が残されている。その隅切り頭部に組まれたクラヴォーの列はいかにもロマネスク的なものであって、その下に開けられた近代の醜悪な出入口と好対照である。

後陣は半円形である。その中央 (東端部) には外側に向けて大きく隅切りされた、まるで銃眼のような半円頭形の縦に細長い窓が開けられている。同様の窓は後陣南側にも (中央のものよりも少しだけ高い位置に) 開けられている。後陣の北側は私有地の敷地内のため確認できない。屋根のすぐ下には後陣全体にコーニスが巡る。なお中央の窓の下には、家畜小屋のために 19 世紀以降になって開けられたと思われる方形の開口部 (窓) があり、残念なことにこの後陣のロマネスク的な姿を台無しにするものとなっている。

聖堂内部はシンプルな単身廊形式である。G. Charvet によれば、その大きさは東西 12.25 メ



30.5.7c Saint-Pierre-de-Sevignac

ートル、南北 6.15 メートルで、東端の半円形後陣は直径 5.25 メートルである。身廊側壁の厚さは 1.5 メートルとされる。後陣内部には半ドームが架かる。身廊は 2 ベイからなる。天井は水平のコーニスの上に半円筒形ヴォールトが架けられる。ベイを区切る横断アーチは、ピラストルが受け止める。

Bibliographie :

Charvet (1883) pp.296-297; Clément (1989) p.205; Goiffon (1916) pp.214-215.

30.5.8 レザン／サン＝ピエール教会 (Église Saint-Pierre, Lézan)

レザンはアンデューズから県道 D907 と D983 で南東へ 8.5 キロ、アレスからだ と D6110 と D24 で南へ 15 キロである。1 キロほど北にはガルドン川が流れる。サン＝ピエール教会（現在はプロテスタントの教会堂）はレザンの旧市街のほぼ中ほどに建っている。

この地は 13 世紀にはレザヌム (Lezanum) と呼ばれていた。サン＝ピエール教会は 14 世紀後半には« Sanctus-Petrus de Lezano »として史料に現れる。この聖堂が附属していたプリウレ (prieuré Saint-Pierre-ès-liens) は 15 世紀にはソーヴ修道院の管理下にあった。レザンはニーム司教区の中であって、すぐ南にあるサン＝ジャン＝ドゥ＝セール (Saint-Jean-de-Serres) の小教区に属していたが、宗教改革期にはプロテスタント都市となり、ニームのプロテスタント宗務局から牧師が送られていた。カトリックはごくわずかで、サン＝ピエール教会は荒廃し、かつての司祭館がプロテスタントの礼拝に使用された。

17 世紀初めにはカトリックの祭儀が復活し、1685 年のナントの勅令廃止後にはサン＝ピエール教会の再建が始まった。工事は翌 1686 年にはひとまず終わるが、しかしほどなく 1702 年 12 月に今度はカミザールたちに焼かれている。1704 年 5 月 14 日にはカミザールの首領ジャン・カヴァリエがレザンに現れ、住民たちから熱狂的に歓迎されている。カミザール戦争終結後はカトリックが復活するが、住民のプロテスタント的傾向はなくなり、大革命を迎えた。1804 年、サン＝ピエール教会はプロテスタントに譲られた。カトリックのためには、そこから約 250 メートルほど南（旧市街の外側）に、1862 年からサン＝ピエール＝エ＝サン＝ポール教会の建設が始まり、1864 年に献堂された。

旧サン＝ピエール教会は、3 ベイからなる身廊が東西 23 メートルと長い。またその東端に方形（平面形）の後陣が付くという比較的珍しい形をしている。最初の建設は 10 世紀終わり頃で、当初から後陣は方形であった。方形（平面形）の後陣はプレ・ロマnesc、つまりカロリング期の聖堂建築に多く見られるものである。その後 12 世紀中頃に改築されたが、この後陣の形はそのまま受け継がれた。ただしこの後陣は、身廊部の東西軸からはわずかに南にずれている。後陣壁の石組みの一番下の数段は中・小石材が端正に積まれているが、この部分が最も古いもので、その上に 12 世紀の石積みが続く。ここは色の異なる石灰岩の大・中石材が、これもまた非常にきれいに積まれている。高さのある後陣東壁の一番上の三角形の切妻の中央には、外側に向けて隅切りされた半円頭形の細長い窓が開けられている。その頭部のアーチのクラヴォーの組まれ方は、いかにもロマnesc的で美しい。また後陣南側の壁の向かって右上には縦

に細長い銃眼の様な開口部が付けられている。しかもそれは南東方向に向けて斜めに開けられているのが特徴的である。

身廊の南北には、それぞれ 4 つずつ太い扶壁が並ぶ。身廊南側は、壁面の石積みや扶壁の形などの長年にわたる破壊や再建の跡が色濃く、北側のもよりは統一性に欠ける。南側では各ベイに外側に向けて隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。第 1 ベイのものは小さめで、第 2 ベイと第 3 ベイのものはそれよりも大きい。この 2 つのベ



30.5.8 Saint-Pierre-de-Lézan

イには水平のコーニスが残されている。第 3 ベイの下には石段を数段上ったところに方形の出入口が開けられている。その上にはクラヴォーがきれいに組まれた半円形のヴシュールが残されている。身廊の北側には窓などはない。第 1 ベイの西寄りの少し高い位置に小さな出入口がある。クラヴォーの組まれた半円形のヴシュールがその上に架けられている。ただしこの出入口は現在は塞がれている。

西ファサードは南北両側に太い扶壁が付けられていることもあって、横に長い安定した外観である。中央には縦長の扉口が付けられ、そのすぐ上には半円頭形の窓が 2 つ並ぶ。2 つともかつては大きな窓であったが、それぞれ下半分が埋められて小さなものとなっている。ファサードの壁面は、不整形の小石材がラフに積まれたものである。向かって左側（北側）は整形された四角い中石材がきっちりと積まれており、石の色もその部分だけ異なる。

聖堂内部は、現在はプロテスタントの教会堂であるために、非常にシンプルである。身廊の南北幅はおよそ 8.5 メートルである。天井は半円筒形ヴォールトで、3 つのベイは側壁に付けられたピラストルとそれが受け止める半円形の横断アーチで区切られる。壁面は石積みがそのまま現れており、漆喰などで上塗りはされていない。後陣の高い位置に、内部に向けて隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。隅切りの頭部は、天井のヴォールトの頂部に接するほど高い位置にある。

Bibliographie :

Clément (1993) pp.62-63; Germer-Durand (1868) p.115; Goiffon (1881) pp.152-153; Goiffon (1916) pp.250-255.

30.5.9 サン=ナゼール=デ=ガルディエ／旧サン=ナゼール教会

(Ancienne église Saint-Nazaires, Saint-Nazaires-des-Gardies) ▲

アンデューズから県道 D907 と D35 で南へおよそ 10 キロである。旧サン=ナゼール教会は、現在のサン=ナゼール=デ=ガルディエの村役場から北東へ 1 キロのところに建っている。

この土地の名前は1384年のセネシャル文書に現れる(*locus de Sancto-Nazario de Gardiis*)。しかし1345年には教区として知られる(*Parrochia Sancti-Nazarii de Gardis*)。16世紀にはプロテスタント住民が大勢を占めた。サン=ナゼール教会は、トルナックのサン=テティエンヌ修道院(クリュニー修道会)傘下のプリウレの付属聖堂であった。*J.Bourguet*によれば、早くも808年のシャルルマーニュの勅書にその名が見えるという。16世紀の宗教戦争の際に被害を受けた後、1686年に修復・再建されるが、この地方のほかの多くの聖堂と同じく、18世紀初めのカミザール戦争の際に再び焼かれてしまった。1729年にいったんはカトリックの祭儀が復活するが大革命によって中断し、19世紀以降はプロテスタントの教会堂として使用されている(筆者が訪れた2014年にはアクセスできなかった)。

西ファサード北側(左側)には、扶壁のようにして大きな方形の塔が付けられている。その頭部は、西ファサードの切妻の傾斜に合わせて斜めに切られている。この塔は14世紀頃のもので、聖堂の要塞化の名残である。西ファサードには、方形のシンプルな扉口の上に、2つのロマネスク様式の窓が横に並べて開けられている。外側に向けて大きく隅切りされた半円頭形の窓である。西ファサードにこのようにして窓が2つ並べられているのは珍しい。2つの窓の上には足場を組むための小穴が横一列に並び、さらにその上の切妻の頂部には小さな鐘楼が載せられている。

身廊北側には、東寄りのところに西ファサードのものよりもさらに大きな方形の塔が、やはり扶壁のようにして作られている。北側に向けて大きく張り出しており、これもまた14世紀の要塞化の名残である。この塔の東側には、通常の扶壁が2つ付けられているが、中央の大きな塔と比べると、いかにも小さなものに見える。

聖堂の東側には、身廊部の高さよりもかなり低い半円形の後陣が続く。後陣の上のいわゆる凱旋アーチ部分(身廊の東端の壁)には、大きな丸窓が開けられている。後陣にも、その中央東端に半円頭形で外に向けて隅切りされたロマネスク様式の窓が開く。

聖堂の内部は、2013年に大々的な修復工事が行われてきれいな状態になっている。身廊は3ベイからなる。天井は半円筒形トンネルヴォールトで、横断アーチとそれを受ける方形のピラストルがベイを区切っている。各ベイの側壁には半円形の壁アーチが並ぶ。身廊東側には壁が作られていて後陣には直接は開かれていない。そこにはプロテスタントのシンプルな祭壇(説教壇)が置かれ、その後ろに、後陣に入るための小さな方形の出入口が作られている。

Bibliographie :

Bourguet (1993) p.32, pp.45-64, pp.70-89; Clément (1993) p.207; Germer-Durand (1868) p.221; Goiffon (1881) p.330.

WS : « Midi Libre, 2013.12.07 »

30.5.10 サン=ジャン=ドウ=クリウロン/旧サン=ジャン小修道院教会

(*Mas d'église, ancien prieuré de Saint-Jean, Saint-Jean-de-Crieulon*) 私有▲

サン=ジャン=ドウ=クリウロンは、アンデューズとキサック(Quissac)の間にあるコミュニ

ンで、その村役場はアンデューズから県道 D907 と D35 で南へおよそ 11 キロである。旧サン＝ジャン小修道院教会は、南北に延びる約 5.6 平方キロのコミュニオン域の南寄りのところにある。村役場から D35 を南へ約 1.5 キロ行ったところにあるワイナリー（ドメヌ）の敷地の中にあり、そのワイナリーの現在の名前はまさしく「旧プリウレ・ワイナリー」（Domaine de l'Ancien Prieuré）である。地名は「マ・ドゥ・レグリーズ」（Mas de l'Église）という。

サン＝ジャン＝ドゥ＝クリウロンの中心は村役場のあるヴィルセック（Villesèque）地区で、古くは 1292 年のプサルモディ修道院のカルチュレールにその名（Villa Sicca）が現れる。プリウレの名前であるサン＝ジャンが記録に現れるのは E. Germer-Durand によれば、16 世紀末のことであるという（E. Goiffon は 15 世紀末としている）。大革命まではニーム司教区（1694-1790 年はアレス司教区）に属した。プリウレの土地と建物は大革命の後に売却され、農家の所有となった。現在残された聖堂は、今も触れたようにワイナリーの大きな建物の一番奥に接続する形になっており、通常はアクセスできない。

建設は 12 世紀である。身廊は 2 ベイからなる。側壁外部には屋根まで達する扶壁が付けられている。身廊南側はワイナリーの建物が直接建てられていて第 1 ベイは見えない。第 2 ベイには 19 世紀になって開けられた方形の大きな出入口があり、2 階部分にも窓を兼ねた資材の搬入口がある。この搬入口のすぐ右隣に古いロマネスク様式の窓が残されている。外側に向けて大きく隅切りされた半円頭形の窓で、隅切り頭部のアーチの組石（クラヴォー）が見事である。

後陣は半円形であるが、14 世紀に身廊と同じ高さまでかさ上げされた。そのかさ上げ部分は多角形となっている。12 世紀の後陣部分の上部にはロンバルディア帯が巡り、それを構成していた小アーチの痕跡が連なっている。小アーチは 3 つ 1 組であるが、装飾的ピラストル（レゼーヌ）は見られない。この後陣の東端中央には、もともとはロマネスク様式の窓が開けられていたが、方形の出入口に替えられた。後陣の南側にも小さなロマネスク様式の窓が残されている。

西ファサードはワイナリーの建物によって完全に塞がれていて目にすることはできない。かつてその上に載せられていた鐘楼は、やはり農家によって方形の塔状の構造物が屋根の上に作られたために失われてしまった。

サン＝ジャン＝ドゥ＝クリウロンには、もとはロマネスク期のものと思われる聖堂がもう 1 つ残されている。村役場から D35 を南へ 300 メートルほど行ったところにあるヴィルセックのサン＝ジャン＝バティスト教会である。しかしこれは今は完全に民家になっていて、壁面なども漆喰とペンキで塗り直されており、私有地の敷地の外から見て、かろうじてその形が單身廊・半円形後陣らしきものであると分かる程度に過ぎない。

Bibliographie :

Clément (1993) pp.407-408; Germer-Durand (1868) p.211, p.265; Goiffon (1881) p.302.

30.5.11 プエシュルドン／サン＝タンドレ＝ドゥ＝プエシュフラヴァール礼拝堂

(Chapelle Saint-André-de-Puechflavard, Puechredon) 遺構・私有▲

プエシュルドンは、アンデューズから県道 D907、D982、D24、そして D188 を通って南へおよそ 17 キロである。サン＝タンドレ＝ドゥ＝プエシュフラヴァール礼拝堂の遺構は、このコミュニティのほぼ中央に位置するマ・ドゥ・パパレル (Mas de Paparel) と呼ばれる大きな農家の東およそ 800 メートルの丘の上に残っている。ただしその丘一帯は、マ・ドゥ・パパレルの農家が所有する広大な私有地で、アクセスすることはできない。D188 から森の中に建つ廃墟化したその建物の小さな姿を遠望するしかない。

この地はもともとは古くからプエシュフラヴァールと呼ばれていた。礼拝堂の名が史料に現れるのは、E. Germer-Durand によれば 1156 年のニーム大聖堂のカルチュレールにおいてである (Ecclesia de Podiis)。ただし E. Goiffon はそれを同年の教皇ハドリアヌス 4 世の勅書においてであるとしている。サン＝タンドレ礼拝堂はブリウレの付属聖堂であった。1174 年には教区の名前が史料に現れる (Parrochia Sancti-Andree de Podiis-Flavardis)。13 世紀になるとマザン修道院 (Abbaye de Mazan／現アルデッシュ県) がこの土地を獲得している。大革命までは、政治的にはソミエールのヴィカリウス管区内にあり、教区としてはニーム司教区 (1694・1790 年はアレス司教区) に属した。

16 世紀半ば以降、この地もプロテスタンティズムの波に洗われ、礼拝堂はブリウレとともに被害を受けた。1664 年にここを訪れたニーム司教コーオン (Anthyme-Denis Cohon) の使者は、サン＝タンドレ礼拝堂をいまだ素晴らしい聖堂であると評しているが、それも 18 世紀初めのカミザール戦争が始まるまでで、その後は放棄された。身廊のヴォールトは崩落し、内陣や後陣も失われて廃墟化が進んだ。現在県道 D188 から遠くに見ることができるのは西ファサードのみで、ヴォールトは崩れ落ち、壁には無残にも大きな亀裂が縦に走っている。壁面の上半分は整形された石材が積まれているが、下半分は漆喰で塗り固められている。その下半分の中央には半円頭形の扉口が開けられている。そのアーキヴォルトは亀裂によってかなり破損して失われているが、2 重のヴォシュールの痕跡が残されている。

プエシュルドンには、コミュニティの北端に位置するマ・ドゥ・プエシュルドン (Mas de Puechredon) と呼ばれるやはり大きな農家 (現在は高級ホテルも兼ねる) のある地区の奥に、プエシュルドン教会 (Église de Puechredon) がある。ごく小さな聖堂で、2 ベイからなる身廊に半円形の後陣が続く。身廊の外壁には扶壁が付けられている。西ファサードの切妻には小鐘楼が載せられ、その下に丸窓とシンプルな扉口が開けられている。一見してロマネスク的な雰囲気を持つ聖堂であるが、実際に建設されたのは 1686 年のことである。私有地の中にあるために、アクセスすることはできない。



30.5.11 Saint-André-de-Puechflavard

Bibliographie :

Clément (1989) pp.291-292; Germer-Durand (1868) p.175 ; Goiffon (1881) p.220.

30.5.12a デュルフォール=エ=サン=マルタン=ドゥ=ソスナック／

ソスナックのサン=マルタン教会

(Église Saint-Martin de Sossenac, Durfort-et-Saint-Martin-de-Sossenac)

ソスナックのサン=マルタン教会は、アンデューズから県道 D907 と D982 を通って南へ約 10 キロである。途中、トルナックを経由する。トルナックの南で小さなウルヌ川 (L'Ourne) を渡るが、そこから D982 を約 3.5 キロ行ったところで、北へ向かう細い道に入り (右折)、1 キロでサン=マルタン教会に至る。サン=マルタン=ドゥ=ソスナックの集落に入るすぐ手前の、D285 沿いにある農家の敷地の中に建っている。

この地は、969 年のニーム大聖堂のカルチュレールにその名が現れる (villa Somniaco)。1037 年には小教区として知られていた (Parochia Sancti-Martini)。デュルフォールとともにニーム司教区に属し、その後 1694 年に新設されたアレス司教区に移管され、大革命を迎えた。サン=マルタン=ドゥ=ソスナックは、1862 年にデュルフォールと合併し、現在はそのコミューン域の北端に位置する。

サン=マルタン教会の建設は 11 世紀のことである。後陣の外壁装飾などが似ていることから、ここから北へ約 6 キロのサン=フェリックス=ドゥ=パリエール [30.5.13a] のものと同じ時期に建てられたと考えられる。宗教戦争の際 (1562 年) にいったん破壊され、1685 年のナントの勅令廃止後に再建されるも、カミザール戦争の際 (1703 年) に、プロテスタントによって再び破壊された。その後、多少修復が進められるが、大革命の後に国有財債として売却され、これを所有した農家が倉庫として使用し、現在に至る。私有地であるので、敷地の外から建物の南側を目にすることができただけで、直接のアクセスはできない。

聖堂の建物は、比較的整形された小石材を中心にして壁面が組まれている。16 世紀以降に繰り返された破壊と修復、そして大革命後の農家のぞんざいな使用のために、全体的に端正な石積みが保存されているとは言い難い。2 ベイからなる身廊とその東側に内陣のベイと半円形の後陣が続く。身廊は、屋根まで立ち上がる方形の扶壁によって 2 つのベイに分けられている。それぞれのベイにはロマネスク様式の隅切りされた半円頭形の窓が 1 つずつ開けられている。それらの窓の上には、足場を組むための小穴 (trou de boulin) がいくつか開けられている。第 2 ベイでは窓の下にも小穴が並ぶ。

後陣は上部にはロンバルディア帯が巡る。小アーチが 2 つ 1 組となっており、その 2 つの小アーチごとに、地上まで下りるレゼーヌ (lésène／張り出しの少ない装飾的なピラストル) が付けられている。ただしこのピラストルは、破損が進んでいて壁面にいくつかの石のブロックが残されているだけである。ただしこのようなレゼーヌの破損にもかかわらず、それとロンバルディア帯の様子が、不思議なことに、この後陣においてロマネスク様式の一種の味わいある趣を醸し出しているとも言えるのである。後陣においてレゼーヌの付いたロンバルディア帯の

例は、この近くだけでも、トルナックの旧サン＝テティエンヌ修道院 [30.5.7a]、サン＝フェリックス＝ドゥ＝パリエールのサン＝フェリックス教会 [30.5.13a] などを挙げることができる。ただし、ここサン＝マルタン＝ドゥ＝ソスナックでは、その上に巡る歯車状の帯装飾は見られない。ロンバルディア帯の 2 つの小アーチの間にはシンプルで図形的なモディオンが付けられている。後陣中央（東端）には方形で縦長の窓が見られるが、これはロマネスク期のものではなく、近代になってここを所有する農家によって開けられたものである。



30.5.12a Saint-Martin de Sossenac

身廊南側外壁においては、西端の第 1 ベイに扉口が開く。形は方形で、その上に半円アーチの石組みが残されている。この第 1 ベイの最上部（屋根のすぐ下）には小穴が 5 つ並べられているが、これは足場を組むためのものというよりも多分に装飾的なものである。第 2 ベイの東側に続く内陣のベイは、その東に付けられた後陣と同じ高さで、東西の長さは身廊の 1 つのベイの半分程度と短い。ここにもロマネスク様式の窓が開けられているが、その位置は身廊のものよりも低いところである。内陣のベイの最上部（屋根のすぐ下）にもやはり装飾的な小穴が 4 つ並ぶ。

西ファサードには所有者である農家によって開けられた方形の大きな出入口と、その上にやはり方形の小さめの窓が開けられている。壁面の状態は悪く、ファサードの南寄りのところに縦に大きな亀裂が走っている。この部分の崩壊は時間の問題なのかも知れない。

建物が完全に農家の倉庫となっているために、残念ながら聖堂内部を見ることはできない。しかし外側の様子から、平面プランは 2 ベイからなる单身廊形式で、短い内陣と半円形の後陣がその東側に続くものであることは明らかである。確認はできないが、身廊部には半円筒形ヴォールトが架かり、ベイを区切る横断アーチとそれを受け止めるピラストルが付けられ、各ベイの側壁には半円形の壁アーチが並んでいるものと思われる。

現在のデュルフォール＝エ＝サン＝マルタン＝ドゥ＝ソスナックのコミューンの村役場は、デュルフォール地区の古い旧集落の南の D982 沿いにある。ソスナックのサン＝マルタン教会からは、D982 と D285 で南へ約 2 キロである。かつては城壁で囲まれていたこのデュルフォールの旧集落の形は、今でもほぼ円形をとどめている。その中心には 12-13 世紀頃にトゥールーズ伯に従っていたベルモン・ドゥ・ソーヴ（Bermond de Sauve）家によって建設された城があった。大革命の時に打ち壊され、今日その城の一部であった方形の塔だけが残されている。

その旧集落の東端のすぐ外側には、サン＝トマス教会がある。ナントの勅令の廃止後、1686 年から 1687 年にかけて建設された。古いロマネスク聖堂 [30.5.12b] の石材を利用して建てられたものとも言われ、西ファサードはまったく新しいが、身廊側壁は、出張りが大きな扶壁が並び、特に東側の壁には、扶壁の間に外側に向けて隅切りされた半円頭形の窓が合わせて 4 つ

開けられている。その様子はロマネスク的であるとも言える。後陣は平面形である。旧集落の反対側（西側）には、プロテスタントの教会堂が建っている。

なお 1869 年に、デュルフォール旧集落の東 1 キロの D982 沿いで、全長 6 メートル、高さ 4 メートルの巨大なマンモス（Mammouth de Durfort／Mammuthus meridionalis）の骨格がほぼ完全な形で発掘された。70-100 万年前のものとされ、現在はパリの国立自然史博物館（Muséum national d'histoire naturelle）の古生物学部門に、堂々とした姿で展示されている。

Bibliographie :

Clément (1989) pp.404-405; Germer-Durand (1868) pp.75-76; p.219; Goiffon (1881) p.115-116, pp.324-325.

30.5.12b デュルフォール＝エ＝サン＝マルタン＝ドゥ＝ソスナック／

デュルフォールのサン＝トマ＝ドゥ＝ラ＝スッシュ教会

(Église Saint-Thomas de la Souche, Durfort-et-Saint-Martin-de-Sossenac) 遺構▲

デュルフォールの旧集落から南へ約 1 キロの「ラ・グレイザス」(La Gleissasse) と呼ばれる場所の、ぶどう畑のただ中に、サン＝トマ＝ドゥ＝ラ＝スッシュ教会のものとされる遺構が残っている。12 世紀に建設され、デュルフォールの教区教会 (Sanctus-Thomas de Duro-Forti) であったが、16 世紀の宗教戦争の際にプロテスタントたちによって破壊された。それ以上の詳しい歴史的な情報は見つからない。しかも私有地の畑の中にあるために、遺構に直接アクセスすることもできない。

方形の塔のような建物と、その西側に後から建てられたと思われる農家の小ぶりの建物が見られる。塔のようなその建物は、聖堂のどの部分に相当するのかが今ひとつ不分明である。かなり破壊された窓がその東側の壁面に開けられている。またその北側にはアーチの起拱部がわずかながら残されている。

Bibliographie :

Germer-Durand (1868) p.75; Goiffon (1881) p.115.

WS : « Site officiel de la commune de Durfort-et-Saint-Martin-de-Sossenac »

30.5.13a サン＝フェリックス＝ドゥ＝パリエール／サン＝フェリックス教会

(Église Saint-Félix, Saint-Félix-de-Pallières)

サン＝フェリックス＝ドゥ＝パリエールは、アンデューズから県道 D133 を西へ約 8 キロである。サン＝フェリックス教会は、D133 から集落の中を東へ 70 メートルほど入ったところ、すなわち現在の村役場 (mairie) のすぐ裏側（南側）に建っている。

この地は、959 年のニーム大聖堂のカルチュレールにその名が現れる (villa Patellaco)。その後は 1384 年のセネシャル文書においてである (Sanctus-Félix-de-Paleria)。大革命以前はソミエールのヴィカリウス管区にあって、教区としてはニーム司教区（後にアレス司教区）に

属した。サン＝フェリックス教会には城が隣接する。サン＝フェリックス教会はもともとはこの城の付属礼拝堂であった。城は 13 世紀頃まではアルノー (Arnaud) 家が、その後はクラレ (Claret) 家が所有した。16 世紀になると村はプロテスタンティズムの波に洗われ、住民のほとんどが改革派となった。サン＝フェリックス教会も 17 世紀初め頃にはかなり破壊されて半ば廃墟化し、カトリックの祭儀は隣接する城に設けられた礼拝堂で行われた。城主とその家族だけはカトリックであり続けたのである。サン＝フェリックス教会は 17 世紀半ばに再建されるものの、1703 年 1 月 26 日に、今度はカミザールたちに城とともに焼き討ちされた。1797 年には再建されてカトリックの祭儀が再開されている。現在はコミュニオンが所有する。近年では 1970 年代になって聖堂内部の修復保存工事が行われている。大革命の際に破壊された城もその後再建され、現在はシャトー・ホテルとなっている。

サン＝フェリックス教会の建設は、内陣と後陣部分が 11 世紀終わり頃、西側の身廊部分がその後 12 世紀初め頃である。トルナックのラ・マドレーヌの石切り場から運ばれた石材で建てられている。東西の外寸は 21 メートル半、南北はトランセプト部分で約 10 メートルである。側壁の扶壁は強力な印象を受けるが、横幅の割に出張りは少ない。最も東側のものは扶壁であると同時に、内陣の南北に付けられたトランセプトの外壁でもある。南北ともに、それぞれ低い位置に開口部が見られるが、北側のそれは縦に細長い銃眼のような窓である。

左右を強力な扶壁にはさまれた西ファサードには扉口が開く。その上には 3 重のヴシュールからなるアーキヴォルトが架けられ、その中央のヴシュールは左右両側で大きな逆台形の冠板と図形的でシンプルな柱頭彫刻を持つ小円柱が受け止める（その柱身自体はさほど古いものではない）。タンパンは無装飾である。アーキヴォルトのすぐ下のリンテルは大きなものではあるがこれもまた無装飾である。西ファサードの上部は、おそらくは宗教戦争期以降に高さが加えられて、半ば要塞化されている（積み石の様子が異なる）。もともとのファサードの切妻部分の三角形のコーニスが壁面に残されている。その中央にはロマネスク様式の窓が開けられている。外側に向けて隅切りされた半円頭形の窓である。一番上には方形の鐘楼が立つ。頂部は切妻形で、鐘を吊す半円頭形のベイは大きなものである。この鐘楼の後ろ側にはやはり増築された構造物が接続するが、これは西ファサード全体の外観のバランスを損なうものとなっている。

身廊北側には開口部は見られない。一方南側では 2 つのベイにそれぞれロマネスク様式の窓が開けられている。また身廊東側の第 2 ベイにはかつては城との行き来のための出入口が開けられていたが、現在は埋められている。

後陣は半円形である。上部には、水平のコーニスと歯車形 (dents d'engrenage) の装飾帯が巡る。そのすぐ下には小アーチが連なるロンバルディア帯が付けられている。その小アーチは 3 つ 1 組となって、出張りの少ない（平たい）装飾的なピラストルであるレゼーヌ (lésène / lesenne) が地上まで下りる。その姿は、近くではトルナックのサン＝テティエンヌ修道院 [30.5.7a] やサン＝ボディル教会 [30.5.7b]、またサン＝マルタン＝ドゥ＝ソスナック ([30.5.12a]) のものが似ている（ただしサン＝マルタン＝ドゥ＝ソスナックの小アーチの数は 3 つではなく 2 つ）。またここから南へ約 55 キロの有名なサン＝ギレーム＝ル＝デゼール (Saint-Guilhem-le-Désert) の小後陣も 3 つの小アーチが連なるロンバルディア帯と歯車形の帯という点が同じで

ある。後陣の中央（東端）には、中ほどの高さのところにロマネスク様式の窓が開けられている。外側に向けて大きく隅切りされた縦に長い半円頭形の窓である。

聖堂内部は、2 ベイからなる身廊（12 世紀）と、その東側の内陣・後陣（11 世紀）から構成される。身廊第 1 ベイには 2 階席（トリビューン）が作られている。身廊の 2 つのベイにはそれぞれ南北にニッチの壁アーチが並ぶ。天井は半円筒形ヴォールトで、ベイを区切るのはそのヴォールトに架けられた横断アーチとそれを受け止める壁付き半円柱である。身廊と内陣を分ける凱旋アーチも太い半円柱が受け止める。この半円柱には台形の柱頭彫刻が付けられている。上に向けて左右に広がる茎とヴォリュートというシンプルなものである。内陣と最東端の後陣部分を区切る横断アーチも、やはり太い半円柱が受ける。

内陣の南北には小さな側室（礼拝室）が付けられて、いわば一種のトランセプトを構成しているので、内陣のベイはトランセプトの交差部であるとも言える。この交差部は身廊よりも高さが低い。トランセプト様の南北の側室は、外側は平面形であるが、内部は半円形である。やはり半円形である主後陣と合わせると、平面プランはいわゆる「三つ葉形」（plan tréflé）である。これら 2 つの半円形の側室は、見方によっては主後陣の左右に位置する小後陣とも言える。

「三つ葉形」の平面プランは、比較的近いところでは、サン＝マルタン＝ドゥ＝ロンドル（Saint-Martin-de-Londres / エロー県、ここから南へ約 40 キロ）、プレヴァンシェール（Prévenchères [48.4.2a] / ロゼール県、ここから北へ約 90 キロ）、アラン（Allenc [48.4.13] / ロゼール県、ここから北へ約 120 キロ）などがあるが、それらは「三つ葉」を構成する南北のトランセプトの大きさが主後陣とほぼ同じくらいあって、文字通りの左右対称的な「三つ葉」を形作っているのであるが、それに対してここサン＝フェリックス＝ドゥ＝パリエールによく似てトランセプトが小さいものでは、ラマルー＝レ＝バンにあるサン＝ピエール＝ドゥ＝レデ教会（Saint-Pierre-de-Rhèdes, Lamalou-les-Bains / エロー県、ここから南へ約 120 キロ）を挙げることができる。なおサン＝フェリックス＝ドゥ＝パリエールでは、ラマルー＝レ＝バンその他とは異なり、交差部の西辺（身廊側）よりも東辺（後陣側）の方が南北がわずかに短い台形となっている。

主後陣は半円形である。トランセプトの側室（礼拝室）は、それぞれ半ドームが架けられているが、主後陣においても水平のコーニス（ほとんど出張りが無いが、コーニス部分だけ色が白い）の上にはやはり半ドームが架けられている。そしてそのコーニスの近くの高い位置に 5 つの小アーチ（そのうち 4 つはニッチ）が連なるアーケードが巡る。それぞれの小アーチを受け止める壁付き半円柱は、アーケードが連なる高い位置から床まで延びる細長いものである。後陣の東端には、中央の小アーチの中に、ロマネスク様式の細長い半円頭形の窓が開けられている。



30.5.13a Saint-Félix-de-Pallières

交差部（内陣）のやや北寄りの床には、17 世紀のサン＝フェリックス城主フランソワーズ＝ドゥ＝クラレ（Françoise de Claret）の墓石が埋め込まれている。彼女はグレゴワール・デ・ガルディエ家のジャン（Jean de Grégoire des Gardies）と結婚し、1649 年（または 1659 年）に亡くなっている。この結婚によってサン＝フェリックスの城はグレゴワール・デ・ガルディエ家が継承してゆくことになった。

Bibliographie :

Bardy, et al. (1966) p.143; Clément (1989) pp.403-404; Colpart (1975) pp.124-125; Germer-Durand (1868) pp.205-206; Goiffon (1881) p.282; Goiffon (1900) pp.301-304; Nougaret et Saint-Jean (1975) p.42.

WS : « Base Mérimée (Église Saint-Félix) »; « Site officiel de la mairie de Saint-Félix-de-Pallières »

30.5.13b サン＝フェリックス＝ドゥ＝パリエール／ラル小修道院

(Le prieuré de Lale, Saint-Félix-de-Pallières) 遺構・私有▲

サン＝フェリックス＝ドゥ＝パリエールの現在の村役場から県道 D133 と D133B を北へおよそ 5 キロで、同コミューン域の北端に位置するラル地区に至る。D133B が D258 に行き当たってその D258 をさらに北へ 300 メートルである。

中世にここにあったブリウレの名残は、修道士居館あるいは付属聖堂に設けられていたと思われる出入口のアーチ（外側は尖頭形、内側が半円頭形）などが、わずかな遺構として、大きな農家の敷地の中に残されているだけである。かつてのクロワトル（内庭回廊）は農家の中庭となっていて、それを取り囲む農家の建物の壁にも、わずかに尖頭形となった出入口のアーチの石組みが残されているだけである。

このブリウレについての歴史的な情報はほとんどない。サン＝フェリックス＝ドゥ＝パリエールのサン＝フェリックス教会と同じく、ニーム司教の管理するベネディクト派の修道院であったのではないと思われるが、正確なところはよく分からない。遺構は私有地である農家の敷地内にあって、アクセスはできない。

Bibliographie :

WS : « Site officiel de la mairie de Saint-Félix-de-Pallières »

30.5.14 トワラス＝コルベス／サン＝ジャック教会 (Église Saint-Jacques, Thoiras-Corbès)

トワラスは、2025 年 1 月にコルベスと合併して新しいコミューンであるトワラス＝コルベスとなった。サン＝ジャック教会のあるトワラスは、アンデューズから県道 D907 と D57 で西へ約 8 キロである。現在の村役場（新しいコミューンでもトワラスが引き続き現在の所在地である）から D258 をさらに北へ 500 メートル行くと、その一番奥の突き当たりにサン＝ジャック教会が建っている。今はトワラスのプロテスタント教会堂（temple）となっている。

この地の名は、892年にニーム大聖堂のカルチュレールに「ウィラ・トリアス」(Villa Torias)として現れるのが最初である。教皇アレクサンデル3世(在位1159-1181年)は1162年の勅書において、トワラスのサン=ジャック教会がジェローヌ修道院(サン=ギレーム=ドゥ=デゼール/Saint-Guilhem-le-Désert)の所有であることを確認している。1601年にはブリウレが営まれていた。政治的にはアンデューズのヴィカリウス管区に、また教区としてはニーム司教区(後にアレス司教区)に属した。宗教戦争までは西に隣接するラザル(Lasalle/La Salle)の主任司祭の管理下に置かれていた。

1560年、ラングドックの国王軍司令官(lieutenant-général du roi)であったヴィラル伯オノラ2世(Honorat II de Savoie-Villars)が、モンペリエ司教の要請を受けてセヴェンヌにおけるプロテスタント制圧を行った。彼はサン=ジャン=デュ=ガール[30.5.15]の城や街を焼いたが、トワラスもその際にヴィラル伯の軍によって焼かれた。プロテスタント住民は周辺の山や森の中に逃亡したが、その後も彼らのほとんどがプロテスタントにとどまり、トワラスのサン=ジャック教会は、1561年には早くもプロテスタントの教会堂(temple)となっている。

1685年、ルイ14世によってナントの勅令が廃止されると(フォンテーヌブローの勅令)、翌年から聖堂の修復・再建が進められ、1689年にはカトリックの祭儀が復活した。しかしその後もプロテスタントはやはり周辺の山や森の中で集会を開いた。トワラスの周辺にはその際にプロテスタントが隠れ場所として使ったとされる洞窟があちこちに残されている。

1702年から1704年、カミザール戦争による騒乱が吹き荒れた。カミザール勢力圏のただ中にあったトワラスは、1702年12月にカミザールたちの襲撃を受け、サン=ジャック教会も破壊され、聖具なども焼かれた。カミザール戦争の後もプロテスタント信者の数は減ることはなく、サン=ジャック教会は1755年に再びプロテスタントの教会堂となった。さらに大革命をへて、1802年にはコミュンの所有となり、あらためてプロテスタントの教会堂とされた。最近では2004年に修復工事が行われている。

最初にこの聖堂の建設が始まったのは11世紀終わり頃で、もともとは2ベイからなる単身廊に半円形の後陣が付くだけのシンプルなものであった。小石材からなるその古い石積みは、後陣や身廊北壁の基壇部分に見て取れる。12世紀後半に、身廊南側に礼拝室が付けられた。この礼拝室の壁面は、聖堂の他の部分よりも整形された中小石材がきれいに積まれたものとなっている。

長方形の扉口が付けられた西ファサードは1689年に再建されたもので、切妻の頂部には小さな鐘楼が載る。身廊北壁の上部と、身廊南側に付けられた大きな方形の礼拝室の南壁に、それぞれ隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。身廊北側には西寄りのところに同様の窓が開けられている。また東寄りの下に半円アーチが架けられた小さな出入口が開けられてい



30.5.14 Saint-Jacques de Thoiras

る。半円形の後陣には、北側に隅切りされた半円頭形の窓が開けられているが、南側には細長い狭間のような開口部が見られるのみである。後陣の中央（東端）下部には、近代になって開けられた方形の出入口がある。

聖堂内部の構成は、2 ベイの身廊と半円形の後陣、そして身廊南側に付けられた方形の礼拝室である。外壁には扶壁が見られなかったが、同様に内部にもピラストル（付け柱）はない。かつては天井は木造であったと思われる。現在はプロテスタントの教会堂であるので、その内部はいたってシンプルである。

サン=ジャック教会のすぐ北側の斜面に隣接する形で一見小さな聖堂のような建物がある。規模はサン=ジャックの半分程度の小さなものであるが、短い身廊に小さな半円形の後陣が付き、身廊と後陣の間の凱旋アーチ壁の上に、これもまた小さな半円頭形の鐘楼が載せられている。この建物については既存の文献や資料には全く言及がなく、詳細は不明である。

サン=ジャック教会の南東の、直線距離にして約 300 メートルのところにトワラスの城（Château de Thoiras）がある。もともとの建設は 10 世紀以前であると思われるが、史料にその名が現れるのは 1334 年のことである。最初の城主はゴフリディ=ドゥ=サン=ボネ（Gauffridi de Saint-Bonnet）家で、その後、長い間サン=ボネ=ドゥ=トワラス家が城主であった。城は居館に円塔と方形塔が付く形で中庭を囲んでいる。現在に至るまで城は私有で、残念ながら中は公開されていない。

Bibliographie :

Clément (1993) p.64; Germer-Durand (1868) pp.244-245; Goiffon (1881) p.376; Moreau (1997) pp.238-240; RIP.

30.5.15 サン=ジャン=デュ=ガール／旧サン=ジャン=バティスト教会

(Ancienne Église Saint-Jean-Baptiste, Saint-Jean-du-Gard) 遺構

サン=ジャン=デュ=ガールは、アンデューズから県道 D907 を北へ約 14 キロである。アンデューズとの間には、県道の他にガルドン・ドゥ・サン=ジャン川（Le Gardon-de-Saint-Jean）に沿って、セヴェンヌ観光鉄道が作られている。この鉄道はもともとは 1881 年にセヴェンヌ地方の旅客や絹産業などの貨物輸送のためにレザン（Lézan、アンデューズの東約 8 キロ）とサン=ジャン=デュ=ガールの間のおよそ 22 キロを結ぶものとして建設されたが、1970 年代に旅客数の減少などを受けて廃止された。その後、1982 年にアンデューズとサン=ジャン=デュ=ガールの間でセヴェンヌ観光鉄道（Train à vapeur des Cévennes）として復活したのであった。現在では、観光客は蒸気機関車が牽引する客車に乗ってセヴェンヌの山々や溪谷の自然を満喫しながらこの 2 つの街を往復することができる（冬期は運休）。

サン=ジャン=デュ=ガールは、セヴェンヌ南部にある人口約 2500 の小都市である。街の中心はセヴェンヌ観光鉄道の駅からガルドン川をはさんで川の北側に位置する。県道 D907 が通る前の古い旧街道であるグラン・リュ（Grand Rue）が街を東西に横切っている。古代には街の東にあるスエレスの山（colline de Sueilhes）の上にガロ=ローマ時代のオッピドゥム（要塞

集落)があった。またローマ時代を通じてジャヴォル(Javols/Gabalum、現ロゼール県)と地中海方面のニームを結ぶ街道の中継地の1つであった。11世紀終わり頃~12世紀初め頃にサン=ジル修道院によってこの地にベネディクト派の修道院が創建された(後述)。

13世紀後半の国王フィリップ4世の時代に、城館が建設された(現在の町役場のすぐ近く)。16世紀半ばにはトワラス(Toiras/Thoiras)の領主であったケラル・ドゥ・サン=ボネ(Caylar de Saint-Bonnet)家がサン=ジャン=デュ=ガールの城と領地の領主として知られる。その時代、この街においてもプロテスタントの数が激増し、サン=ジャン=デュ=ガールもこの地方の多くの街や村と同様にカトリックとプロテスタントの争いの場となった。本格的な宗教戦争に入る前の1560年、城は街と共にカトリック側のヴィラルー伯オノラ2世(Honorat II de Savoie-Villars)によって焼かれたが、1565年にルネサンス様式で再建された。1598年のナントの勅令以降も南仏ではカトリックとプロテスタントの争いが続いたが、プロテスタントのリーダーであったロアン公(duc Henri Rohan)がしばしばこの城に滞在している。1685年にルイ14世によってナントの勅令が廃止されると、城には王国の守備隊が駐屯し、捕らえたプロテスタントを閉じ込める牢獄としても使用された。その後は所有者が次々と入れ替わり、大革命後も個人所有のまま現在に至る。

近代になるとサン=ジャン=デュ=ガールの街は絹産業が盛んとなる。先に触れたように、アンデューズやレザンとの間に旅客・資材輸送のための鉄道が引かれたのもその繁栄のゆえであった。1878年、『宝島』などの作品で知られるスコットランドの作家ロバート・ルイス・ステューブンソン(Robert Louis Stevenson, 1850-1894)が、28歳の時に「モデスティヌ」と名付けた1匹の雌のロバと共にセヴェンヌの徒歩旅行を行ったが、12日間のその旅行の終着点はこのサン=ジャン=デュ=ガールであった(彼はこの街でロバを売り払ってアレスまでは駅馬車に乗った)。その旅行記は翌年に出版されている(『旅はロバをつれて』Travels with a Donkey in the Cévennes, 1879)。またサン=ジャン=デュ=ガールの城のトワラス元帥通り(rue de Maréchal de Thoiras/D44)に面した壁の下には、彼を記念する「ステューブンソンの泉」(Fontaine de Stevenson)が作られている。

サン=ジャン=デュ=ガールのロマネスク聖堂であるサン=ジャン=バティスト教会は、身廊の一部が、高さ約15メートルの方形の鐘塔とともに、旧市街のマルシェ広場(place du Marché)の一角に残されている。11世紀終わり頃あるいは12世紀初め頃に、サン=ジル修道院によってこの地に創建されたベネディクト派のプリウレ(小修道院)附属聖堂である。洗礼者ヨハネ(サン=ジャン=バティスト)に捧げられたもので、1119年のサン=ジルに関する教皇勅書(bullaire)にその名が現れる(Sanctus-Johannes de Gardonenca)。聖堂は教区教会としての役割も果たした。先に述べたように1560年にサン=ジャン=デュ=ガールの城と街がカトリック側のヴィラルー伯オノラ2世によって焼かれ、その際プロテスタントが多く虐殺されたことに対する報復として破壊され、鐘塔と身廊側壁の一部だけが残された。鐘塔は16世紀末からナントの勅令廃止(1685年)までの間、プロテスタントが彼らの礼拝の時を告知するために使用した。破壊された聖堂自体は以後再建されることはなく、新しいカトリックの教区教

会が別の場所（現在の町役場の南）に建設された。

サン＝ジャン＝バティスト教会の遺構は、身廊北側の内部の側壁の一部で、ベイ 1 つ分（約 9 メートル）が、そこに付けられた半円形の壁アーチとともに残されている。このベイはおそらくは第 2 ベイで、その壁アーチの向かって左側には、ヴォールトに架かる横断アーチを受けていたと思われる壁付き半円柱も残っている。この半円柱は方形の中石材 1 つからなる基壇の上に立ち、柱頭彫刻は角部に大葉が配された図形的でシンプルな植物文様である。この半円柱をはさんで、さらに向かって左側には隣接する第 1 ベイの壁アーチのごく一部だけが残されている。第 2 ベイの壁アーチの上には水平のコーニスが延び、その上に半円筒形ヴォールトの起拱部分が見られる（高さ 50 センチ程度）。



30.5.15 Saint-Jean-du-Gard

この身廊側壁の北側にはすらりとした方形の鐘塔が約 15 メートルの高さまで立ち上がる。上下二段構えとなっていて、この下段部分（鐘塔の下 3 分の 1 にあたる）は 12 世紀後半から 13 世紀前半頃のものとされる。ほぼ正方形の各面は横幅約 3 メートルである。東面はボサージュによる石積みとなっている。この東面の下部には方形の小さな出入り口が開けられている。この下段部分の上に各面が下段部分よりも 10-15 センチ程度小さくなった、やはりほぼ正方形の上段が載る。14 世紀に作られたものである。西面と東面には上部に開口ベイが 2 つずつ、また北面と南面には 1 つずつ開けられている。南面にはその開口ベイの下に小さな方形の開口部（窓か）も認められる。各面の中ほどの高さのところには、縦に細長い矢狭間が見られる（わずかに十字形となっている）。西面と東面の最上部には 20 世紀の丸い時計がはめられている。鐘塔の頭頂部は水平で、鐘を吊した鉄製のカンパニールが載せられている。

先に触れた身廊北側の壁アーチの中に、この鐘塔に上るために開けられた半円頭形の入口が残されている。その半円アーチの起拱部には半円筒形モールディングが付けられている。この入口内部には、入ってすぐ左側に聖具などを置くためのニッチのアーチがある。その奥にある扉は鐘塔外部に出るためのものなので、反対の右側上部が鐘塔に上がるための通路で、かつては階段でその中に上がったものと思われる。現在、その階段は失われている。

Bibliographie :

CAG (30/3) p.631; 中川 (2016) 1-20 頁; Germer-Durand (1868) p.212; Goiffon (1881) pp.306-307; Laurent (1996) pp.443-449; Moreau (1997) pp.192-193; Viguiier (1823/1987) pp.105-106; RIP.

30.5.16 サント=クロワ=ドゥ=カデルル／サント=クロワ=ドゥ=カデルル教会

(Église de Sainte-Croix-de-Caderle, Sainte-Croix-de-Caderle)

サント=クロワ=ドゥ=カデルルは、サン=ジャン=デュ=ガールから県道 D153 を南へ 12 キロ、アンデューズからだ D57 を西へ 23 キロである。聖堂はかつては防御が施されていた標高 550 メートルの小さな集落の東端にあり、そこからはロゼール山塊に連なる山々からセヴェンヌ東部の山々まで続く広々としたパノラマが広がっている。晴れた日にはヴォークリューズのヴァントゥー山 (Mont Ventoux) まで遠望できる。

カデルルの名は「ウィラ・カデリラ」(Villa Caderila) として、892 年ニームのノートル=ダム大聖堂のカルチュレールの中に現れる。同じ 9 世紀に、このウィラあるいはカデルルの集落に、最初のブレ・ロマネスクの聖堂が建てられた。この聖堂は、12 世紀になってより大きなロマネスク聖堂として再建された。身廊の南北に礼拝室が作られたのもこの時のことであると思われる。聖堂の名は 1384 年に史料に現れる (Sancta-Crux de Caderlio)。1464 年、この地の領主であったギゴン・ドゥ・モンバイヤン (Guigon de Montvaillant) が、サント=クロワ教会のそばで相続に関する宣誓を行っている。このモンバイヤン一族は、何世代にもわたってこの地の墓地に埋葬されている。

14-15 世紀に、理由はよく分からないが、ロマネスク期の聖堂に対する最初の大規模な拡張・再建工事が行われた。現在の建物の大部分はこの時に再建されたものである。15 世紀にはブリウレが作られていた。16 世紀になると、この地方の他の場所と同じく、サント=クロワ=ドゥ=カデルルでもカトリックとプロテスタントがその争奪を繰り広げた。最初はプロテスタントが優勢であったが、1580 年 3 月、カトリック側が村を奪回した。1580-1592 年、ジャン・アステイエ (Jean Astier) という名のブリウレ司祭が聖堂の南西側に居を構えた。しかしプロテスタントの住民の数は増え続け、17 世紀初め頃には 60 ものプロテスタントの家があったが、カトリックは全くいなかったという。1611 年、司祭ロベール・プチ (Robert Petit) はついにこの地でのカトリックの祭儀を放棄している。1645 年、プロテスタントはこの村に残っていた司祭の家を襲い、サント=クロワ教会も大きく破壊された。身廊南側に作られていた礼拝室なども屋根が落ち、壁も崩れて聖堂全体が半ば廃墟状態となった。

1598 年、アンリ 4 世のナントの勅令によって、とりあえずプロテスタント (ユグノー) には信仰の自由が認められたが、1610 年にそのアンリ 4 世が暗殺されると政情は再び不安定化し、とりわけ南フランスではプロテスタントのリーダーであるロアン公アンリが反乱を継続した。それに対してルイ 13 世 (在位 1610-1643 年) とリシュリュー枢機卿が鎮圧に乗り出し、1629 年のいわゆる「アレスの和議」(Paix d'Alès) によってロアン公は降伏し、プロテスタントの騒乱はいったんは収まった (アレス [30.4.12a] を参照のこと)。

サント=クロワ=ドゥ=カデルルでも 1653-1663 年に聖堂の再建が進められ、鐘楼が据えられ、司祭館も修復された。再建された聖堂ではカトリックの祭儀が復活したが、その後もプロテスタントは近隣の山間部で集会・礼拝を行っていた。1702 年から 1703 年にかけて、サント=クロワ教会は今度はカミザールたちの襲撃を受けて再び破壊された。彼らの反乱が収束した後も、1711 年までの間、王国の竜騎兵が村に駐留し、プロテスタントの強制改宗を行った。カミザー

ルたちに破壊されたサント=クロワ教会に対しては二度目の大規模な修復・再建工事が行われた。扉口の前のポーチや南側礼拝室の上と身廊の上に屋根裏部屋が作られたのはこの時のことである。その際、鐘塔が取り壊されるとともに、身廊の屋根も作り替えられたが、屋根の東西の尾根軸（棟）が身廊の軸線から南側にずらされた。

大革命の後の 1802 年、聖堂はコミュニンの所有となる。住民の大部分は相変わらずプロテスタントであったため、その後はプロテスタントの教会堂（temple）となり、彼らの礼拝が行われるようになった。近年では 2004 年から考古学的調査と修復工事が進められた。考古学的調査は 3 度にわたって行われ、調査と修復は 2010 年に終わった。

サント=クロワ=ドゥ=カデルル教会（現在はプロテスタントの教会堂）の現在の建物は、大部分は 17 世紀以降に再建されたものである。短い身廊と半円形の後陣、そして身廊の南北に作られた礼拝室から構成される。建物の南側から見ると、東西の短い身廊の東側に半円形の後陣が付くというシンプルなものに思えるが、身廊のように見える南側壁面は、扉口の外側に付けられたポーチおよびそれに並んで建つ礼拝室のものである。南側の礼拝室の南東には、宗教戦争期に作られた防御壁が長さが約 7 メートルにわたって残されている。そこには銃眼がいくつか残されている。後陣は大きな半円形で高さもある。中央の上の方に、小さな窓が 1 つ開けられているだけで、装飾的要素はまったく見られない。

後陣の東側と南側には村の墓地があるが、東側はプロテスタント、南側はカトリックのものである。後陣壁のすぐ南側では 2004 年からの考古学調査によって、12 世紀から 14 世紀にかけての古い墓地が見つかった（最も古いものは 9 世紀にさかのぼる）。遺体の中には副葬品としてアヴィニヨンの教皇クレメンス 6 世（在位 1342-1352 年）の時代の硬貨が見つかったものもあった。また別の一体は 10-15 歳くらいの若者のもの、さらにもう一体は 40 歳くらいの女性のもので、S. Aspard-Mercier によると、彼女は歯の数が少なく、しかも残されたものにも虫歯があって、生前は歯痛に苦しんでいたらしい。

聖堂の北側には住宅が直接建てられ、また西ファサードは私有地の中にあるので、これらを直接見ることはできない。

扉口は身廊部南側に作られたポーチの中に開かれている。このポーチにはかつては木製の扉が付けられていたと思われる。このポーチ内部の向かって左側には小さな扉とその中に階段があり、身廊の上に作られた屋根裏部屋に上ることができるようになっている。

身廊は 1 ベイからなる単身廊形式である。天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトで、現在はヴォールト部分は白いモルタルで上塗りされている。身廊東側の南北それぞれに、ロマネスク期に作られたと思われるほぼ正方形の礼拝室があって、トランセプトのような形になっている。北側の礼拝室の方が少し大きい。聖堂の平面プランはいわゆるラテン十字形であるが、身廊の東西長とトランセプト様の南北の礼拝室の南北長が同じくらいなので、ギリシア十字形のようにも見える。

北側の礼拝室と身廊の間には半円アーチが架かる。礼拝室の天井は交差ヴォールトである。14-15 世紀の最初の大規模な修復・再建工事の際には交差リブ・ヴォールトであったが、カミザール戦争後の修復・再建工事の際にリブが失われた。東側の壁には内外に向けて隅切りされ

た半円頭形の窓が開く。この北の礼拝室では、2004 年から行われた考古学的調査の際に、床の下から硬貨が何枚も見つかっている。この部屋は 17 世紀後半から 18 世紀前半頃まで一時的に聖具室として使われており、その期間、司祭たちがここに教会の収入である硬貨を隠して保管していたらしい。一方、南の礼拝室は尖頭アーチによって身廊と区切られている。天井は 4 分交差リブ・ヴォールトである。南側の壁に、内外に向けて隅切りされた半円頭形の窓が開く。



30.5.16 Sainte-Croix-de-Caderle

内陣（後陣内部）では、2004 年からの考古学調査によって、ロマネスク期以前の古い聖堂の後陣の土台の遺構が見つかっている。その平面プランは、一辺が 2 メートル以上ある四角形で、不整形の砂岩の小石材からなっている。つまり平面形後陣の遺構であって、ラングドックではプレ・ロマネスクであるカロリング期の聖堂の後陣によく見られるものである。先に触れた 9 世紀（892 年）の「ウィラ・カデリラ」の時代のものではないかと思われる。この古い聖堂は南北に礼拝室は付かないシンプルで、その規模はおおよそ東西の長さ 8.2 メートル、南北の幅 2.45 メートル程度の小さなものであったらしい。その後 12 世紀にこの古い聖堂は取り壊されて、より大きなロマネスク期の聖堂が建てられた。後陣は古いプレ・ロマネスク期の後陣壁を利用し、そのすぐ外側に接する形で、奥行き約 1.5 メートルの半円形のものが作られた。現在、この 9 世紀の古い内陣部分の遺構は、ガラス製の床を介してその様子を見ることができるようになっている。かつて祭壇が置かれていたのではないかと思われる土台石も見えて取れる。

内陣中央の床下 30 センチ下からは 6-7 歳くらいの子供の遺骸が見つかっているが、これは 17-18 世紀のものである。また北の礼拝室の南側（身廊との境の近く）には木製の棺に入れられた 60-70 歳くらいの老人の遺骸も見つかっており、その右手には十字架が握られていた。史料によると、4 人の司祭と 1 人の貴族が聖堂内部に埋葬されたというので、その老人は 17-18 世紀の司祭であったと思われる。

現在の後陣は、内陣のベイのすぐ東側に接続し、ロマネスク期の後陣とほぼ同じ位置に作られている。半円形で半ドームが架かるが、水平のコーニスなどは見られない。中央からわずかに北側にずれたところに内部に向けて隅切りされた半円頭形の小さな窓が開けられている。窓は内陣のベイの南側にも開けられていて、これは後陣中央のものよりも大きい。なお聖堂内部にあっては内陣のベイと後陣は、凱旋アーチや横断アーチ、そしてそれらを受ける側柱によって区別できるが、外部から見ると大きな半円形の後陣が身廊に接続しているだけのように見えて、区別はできない。

Bibliographie :

Aspord-Mercier (2004) pp.105-107; Aspord-Mercier (2005) pp.91-92; Aspord-Mercier (2006) pp.35-41; Germer-Durand (1868) p.202; Goiffon (1881) pp.273-274; Laurent (1996) pp.441-

442: Valette (2005) pp.19-20; RIP.

WS : « Site officiel de la commune de Sainte-Croix-de-Caderle »

30.5.17 ヴァブル／サン＝タンドレ教会 (Église Saint-André, Vabres)

ヴァブルは、アンデューズから県道 D133 と D21 で西へ約 12 キロで、サン＝タンドレ教会はヴァブルの村役場から南へ約 1.5 キロの D21 沿いに建っている。ヴァブルの名 (Sanctus-Andreas de Vabris) は 1099 年のプサルモディ修道院のカルチュレールの中に現れるが、その後はトルナックのサン＝ティエンヌ修道院 [30.5.7a] に付属した。大革命まではアンデューズのヴィカリウス管区にあり、教区としてはニーム司教区 (後にアレス司教区) に属した。また宗教戦争まではラザル (Lasalle/La Salle) の主任司祭の管理下に置かれていた。セヴェンヌの他の村と同じく、16 世紀には住民のほとんどがプロテスタントとなっていた。宗教戦争によってサン＝タンドレ教会は荒れ果て、廃墟化した。1650 年頃に再建されるも、1702 年にはカミザールたちの襲撃を受けて再び焼かれた。大革命の後に国有財産として売却され、農家の所有となった。19 世紀に入って建物は 6 メートルもかさ上げされ、かつてのヴォールトの位置に床が作られ、内部を 2 階建て構造にしたうえで、下は厩舎として、上は養蚕所として使用された。近年では 2009 年に修復工事が行われ、現在はその床は取り払われている。

聖堂のもともとの建設は 11 世紀とされるが、その後改修と再建が繰り返され、現在の建物の大部分は 14 世紀および 17 世紀のものである。聖堂の身廊北側には農家の建物が直接建てられている。身廊南側の西端には壁面の中程の高さまで太い扶壁が付けられている。またやはり身廊南側の東半分には礼拝室 (14 世紀) が張り出している。扶壁と礼拝室の間、そして礼拝室の南壁には、わずかに隅切りされた半円頭形の細長い窓が開けられている。半円形の後陣は (身廊とともに)、19 世紀のかさ上げによって非常に高く見える。その南東と北東の位置および南端部分にそれぞれ扶壁が付けられている。北端部の扶壁は農家の建物によって失われている (あるいは農家の建物の内部に組み込まれていて見えなくなっている)。それらの扶壁の高さは壁面の中程までであるが、19 世紀のかさ上げ以前には屋根すぐの下の手送りまで達するものであった。後陣の南側壁面には、外側に向けて隅切りされた半円頭形の窓が残されている。この窓は、それを縁取るアーチ (ヴシュール) や側壁の組石がロマネスク様式の美しい作りのものである。後陣には中央 (東端) にもやはり方形で縦長の、まるで銃眼のような窓が開けられている。この窓は、少なくとも外側はあまり造作のないもので、おそらくは近代になってからの改修の際にこのような仕様になったのであろう。西ファサードは下部中央に、尖頭形の扉口が付けられている。その上には 19 世紀に農家によって開



30.5.17 Saint-André de Vabres

けられた方形の窓が 4 つ開けられている。

内部は 2 ベイからなる身廊に、半円形の後陣が続く。二階部分を作るためのかつての床は取り払われている。身廊側壁にはロマネスク期の半円形の壁アーチが残されている。その厚さ（出張り）は少なくて繊細なものである。身廊や後陣のあちこちに農家によって開けられた方形の窓が並ぶ。後陣中央の窓は、外側は銃眼のような仕様であるが、内側に向けては大きく隅切りされている。身廊および後陣の壁の土台部分には、古い石積みが残されている。あまり整形されていない小石材が、それでも水平列を整える形で積まれている。身廊南側には 14 世紀に建てられた礼拝室がある。方形プランで、身廊とは尖頭アーチによって隔てられている。その天井は太い 4 分交差しリブ・ヴォールトである。

Bibliographie :

Clément (1993) p.211; Germer-Durand (1868) pp.251-252; Goiffon (1881) p.390.

30.5.18a コンクラック／サン＝タンダレ礼拝堂 (Chapelle Saint-André, Conqueyrac)

コンクラックは、セヴェンヌの小都市であるサン＝イポリット＝デュ＝フォール (Saint-Hippolyte-du-Fort) から県道 D999 で東へ約 5 キロである。その D999 をさらに東へ向かうと、キサックまで 10 キロ、ニームまでだと約 42 キロである。D999 にある大きなロータリー（ロン・ポワン）のところにあるコンクラックの村役場から D181 を北へ 650 メートルほど行って西に折れ、さらに 150 メートル進むとサン＝タンダレ礼拝堂に至る。

この地にあった聖アンデレの名を冠したプリウレとその付属聖堂の名は、13 世紀半ば 1256 年には史料に現れる。大革命までニーム大聖堂参事会が所有した。16 世紀の宗教戦争の際に何度か被害を受け、その都度再建された。最近では 1970 年前後に建物全体の修復作業が行われている。

聖堂の北側と東側は墓地となっている。特に北側の墓地は古い。南側は農家の大きな建物が直接建てられており、身廊南側にあった 2 つの出入口と窓はその農家の建物によって塞がれていて見えない。

建設は 12 世紀である。ここから 8 キロ南のポンピニャン (Pompignan) から運ばれた石材で建てられている。非常に堅い石で加工が難しく、そのためにサン＝タンダレ礼拝堂には外部にも内部にも彫刻装飾がほとんど見られない。西ファサードには左右両端に扶壁が付けられている。ファサード中央の下には方形の扉口が付けられている。扉口の上の高い位置にロマネスク様式の窓が開けられ、さらにその上に水平のコーニスが延び、一番上は大きくて厳めしい鐘楼壁となっている。この鐘楼壁はロマネスク期よりはかなり後の時期に作られたものである。ただし鐘楼壁の向かって右側（南側）は、西ファサードのコーニスより下の石積みの様子と同じである。

内陣と後陣は身廊よりも南北幅が広い。これは通常のロマネスク聖堂とは逆で、非常に珍しいと言える。内陣外部の南北幅は 7.7 メートル、それに対して身廊外部の南北幅は 6.7 メートルである。建物全体がほぼ同じ時期に建設されたのであるが、内陣・後陣部分よりも身廊の建設

時期が少しだけ遅いと推測することも可能である。内陣は身廊と高さは同じである。半円形の後陣は、身廊や西ファサードの下半分と同じく、整形された切石がきっちりと積まれていて、いかにもロマネスク的で美しい。この後陣の上は、切妻形の内陣の壁であるが、後陣部の屋根部分のすぐ上にも三角形の切妻形のコーニスが見られる。2 つの三角形が縦に並んでいるように見えるのがユニークである。



30.5.18a Saint-André de Conqueyrac

聖堂内部は単身廊形式で、身廊は 2 ベイからなる。天井は半円筒形トンネルヴォールトで、ベイを区切る半円形の横断アーチが架かる。この横断アーチは、無装飾の柱頭（逆台形）を持った壁付き半円柱が受け止める。身廊側壁には南北ともに半円形の壁アーチが付けられている。2 つの壁アーチの間には、太くて高さのある壁付き半円柱が立ち上がり、ヴォールトに架けられた横断アーチを受け止めている。第 1 ベイの壁アーチは、西ファサード側（西側）において、細くて高さの低い壁付き半円柱となって床まで下りている。第 2 ベイ南側には、内外に隅切りされた（double ébrasement）半円頭形のロマネスク様式の窓が開けられている。西ファサードに開けられた窓は様式的にはロマネスクではあるが、後の時代に作り直されたものである。

2 重になった凱旋アーチの東側に開く後陣は、身廊・内陣よりも高さが低い。半円形で水平のコーニスの上に半ドームが架かる。内陣のベイは東西長 4.36 メートルで、南北の幅が身廊部よりも少し長い。後陣中央には内外に向けて隅切りされた半円頭形のロマネスク様式の窓が開けられている。

Bibliographie :

Clément (1993) p.292; Germer-Durand (1868) p.65; Goiffon (1881) pp.103-104.

WS : « Base Mérimée (Église paroissiale Saint-André) ».

30.5.18b コンクラック／サン＝ジル＝ドゥ＝セラック教会

(Église Saint-Gilles-de-Ceyrac, Conqueyrac) 私有

コンクラックの村役場のある県道 D999 の大きなロータリー（ロン・ボワン）から、D181 をサン＝タンダレ礼拝堂とは反対の南へ約 3 キロ進む。そこから東へ折れて 1.2 キロで今度は南へ向かうダートの細い道に入る（標識などはない）。約 300 メートルで、セラックの頂（pic de Ceyrac）と呼ばれる小丘の東端にあつて糸杉と松に寄り添われたサン＝ジル＝ドゥ＝セラック教会に至る。ただし聖堂は個人所有の民家の敷地内にある。その敷地の入口（聖堂の南 70 メートルのところ）には「ここより私有地のため立ち入り禁止」の看板も掲げられていて、直接アクセスすることはできない。

セラックの名は、1384 年のセネシャル文書に現れる。ソミエールのヴィカリウス管区内にあ

り、教区としてはニーム司教区（後にアレス司教区）に属した。この地にあったプリウレとその付属聖堂はラングドックでも名高い聖人であったサン=ジルの名を冠したのであるが、サン=ジル修道院の所有ではなく、同じコンクラックのサン=タンドレ [30.5.18a] とともに、ニーム大聖堂参事会の管理下に置かれていた。宗教戦争の際に被害を受け、1703 年にはカミザールたちに襲撃されて焼かれた。サン=ジル=ドゥ=セラック教会の最後の司祭はルイ・ガルデス（Louis Gardès）で、セラックには 1787 年に



30.5.18b Saint-Gilles-de-Ceyrac

着任したが、2 年後に大革命が起こると追放され、聖職者民事基本法による宣誓を拒否したため、1794 年にプリヴァにおいて、やはり宣誓を拒否した何人かの聖職者とともに処刑された。聖堂は国有財産として売却され、個人の所有となった。セラックは 1809 年にコンクラックのコミューンに編入された。

サン=ジル=ドゥ=セラック教会の建設は 12 世紀である。西ファサード、身廊、後陣ともに、整形されたポンピニャン（ここから南へ約 5 キロ）の石材が端正に積まれている。西ファサードには扉口が開けられている。その扉自体は半円頭形でシンプルなものであるが、3 重のヴシュールからなるアーキヴォルトが架かる。ヴシュールはそのまま扉口の側壁を縁取って地面まで下りる。扉口の上には西ファサード壁面の高い位置にロマネスク様式の窓が開けられ、さらに切妻の上には近代になって小さな鐘楼が載せられた。西ファサードの左右（南北）端には扶壁が付けられている。

身廊は 2 ベイからなる。全体的に小ぶりの聖堂なので、身廊のベイの東西の長さも短いのであるが、南北に 2 つずつ付けられ横幅が 1 メートル近くある扶壁は、身廊のベイの短さに比較して非常に大きなものに見える。身廊第 2 ベイの南側にはロマネスク様式の窓が開けられている。外側に向けて隅切りされ、半円頭形の開口部自体は縦に細長く、あたかも銃眼のようである。身廊よりも一段低い内陣のベイは、東西も短い。内陣部にもそのベイとほぼ同じ幅の扶壁が付けられている。したがって内陣のベイには開口部はない。内陣の南北幅は身廊と同じである。

半円形の後陣は、内陣部からさらに高さが低い。中央（東端）には、2 重のアーチ枠に縁取られたロマネスク様式の窓が開けられている。内外に向けて隅切りされた半円頭形の細長いものである。後陣の北側に付けられた礼拝室は近代になってから作られたものである。

聖堂内部は、P.A. Clément によれば、コンクラックのサン=タンドレ [30.5.18a] のように南北の側壁に壁付き半円柱付が付けられているが、これはベイを区切る横断アーチを受けるのではなく、身廊と内陣の間の凱旋アーチを受け止めるものであるという。

Bibliographie :

Abbal (2019) pp.11-18; Clément (1993) p.293; Germer-Durand (1868) p.53; Girault (2002)

pp. 438-439; Goiffon (1881) pp.87-88.

30.5.18c コンクラック／アグザンのサン＝マルタン教会

(Église Saint-Martin-d'Aguzan, Conqueyrac) 私有

アグザンの小集落は、コンクラックの村役場から県道 D181 を南へ約 1.5 キロである。サン＝マルタン教会は D181 から西へ 100 メートル入ったアグザンの小集落の北寄りのところに建っている。

E. Germer-Durand によれば、アグザンの名の史料における初出は 1384 年である (Locus de Agusano)。1384 年のセネシャル文書にも現れる (Aguzanum)。16 世紀終わり頃にはアレスのバロンが所有した。大革命後の 1809 年にコンクラックに統合された。

サン＝マルタン教会はアグザンにあったブリウレの付属聖堂であったが、大革命の後にはこれを所有した農家が改造して倉庫として使用していた。1997 年になって新たにアドリアン・アスペール (Adrian Asper) によって大々的に再建され、12 世紀のロマネスク聖堂の姿がきれいに蘇った。しかし再建工事が大規模であったため、12 世紀のもともとの部分は少ない。新しく再建されたのは身廊部側壁の上 3 分の 1 と扶壁、西ファサードの切妻とそこに開けられた窓、3 重のヴシュールが架かる扉口、内部では身廊のヴォールト、そこに架かる横断アーチとそれを受ける 2 本の半円柱、後陣の半ドームなどである。身廊と後陣に開けられた窓も新しく作り直されたものと思われる。ロマネスク期の古い部分は、外部では身廊側壁および半円形後陣の下 3 分の 2 の石積み (緩やかに整形された中小石材による)、内部では身廊部と後陣の接続部分などである。アグザンのサン＝マルタン教会は、現在はその所有者の地所の中にあるので直接アクセスすることはできない。



30.5.18c Saint-Martin-d'Aguzan

Bibliographie :

Clément (2007) pp.22-28; Germer-Durand (1868) p.2; Goiffon (1881) pp.1-2.

30.5.19 ポンピニャン／サン＝ジャン礼拝堂 (Chapelle Saint-Jean, Pompignan) 遺構▲

ポンピニャンは、サン＝イポリット＝デュ＝フォールから県道 D25 を南へ約 9 キロのところに村役場があるコミューンで、そこからさらに南に 3 キロ行くとエロー県との県境に至る。モンペリエ (Montpellier) からだと、北へ約 40 キロに位置する。

ポンピニャンの名は 1384 年のセネシャル文書に現れる (Sanctus-Saturninus Vallis Pompinianœ)。ソミエールのヴィカリウス管区内にあり、教区としてはニーム司教区 (後にア

レス司教区)に属した。D25 と D181 が交わるポンピニャンの村の中心には、現在も村役場の向かいにサン=サテュルナン教会 (Église Saint-Saturnin) がある。これは古くからの教区教会で、もともとはソーヴ修道院に属するプリウレの付属聖堂であったが、その後 1267 年に教皇クレメンス 4 世が、サン=ギレーム=ル=デゼール修道院に与えた。宗教戦争やカミザール戦争、そして大革命によって部分的に被害を受けるが、1864 年にネオ・ロマネスク様式で完全に再建された。高さのあるすらりとした鐘塔が美しい建物である。なおポンピニャンの石切り場から採取される石材はロマネスク期から周辺地域の聖堂建築などにも利用されたことで知られる。ただし硬度が高く、細かな彫刻装飾などには適していなかったようである。

ポンピニャンの村の東に、サン=ジャン山 (montagne Saint-Jean) がある。標高およそ 400 メートルで、東西 2 キロに長く連なる山である。その西端にはミラベル=ル=ヴューのカストルム (Castrum de Mirabel-le-Vieux) あるいはサン=ジャンの城 (Château Saint-Jean) と呼ばれる要塞化された城塞集落の遺構が残されている。このカストルムについては文書史料にはほとんど出てこないが、E. Germer-Durand によると、1237 年のニームのサン=ソヴール=ドゥ=ラ=フォン修道院 (Saint-Sauveur-de-la-Font, Nîmes/16 世紀に破壊され現存せず) のカルチュレールに「Castrum de Mirabel」が現れるという。おそらくは 13 世紀にトゥールーズ伯に従っていたソーヴとアンデューズの領主ベルモン=ダンドューズ (Bermond d'Anduze) 家によって建設されたのではないかとされるが、正確なところは分らない。城塞の東端に領主の居館と城塔があり、そこから西に向けて約 80 メートルにわたって小さくて四角い住居が連なる。13 世紀前半、すなわちアルビジョワ十字軍 (1209-1229 年) の際に (あるいはその直前に) 建設され、トゥールーズ伯とベルモン=ダンドューズ家の没落ととも比較的短期間で放棄されたようである。

このカストルムからサン=ジャン山の上を東へ約 1.5 キロのところに、この山の名前にもなったサン=ジャン礼拝堂の遺構が残る。サン=ジャン山の東端にあたり、そこからはソーヴにまで至るセヴェンヌの山々や平原を広く見渡すことができる (ただしサン=ジャン山とそこへの上り道はその一部が私有地となっていて、残念ながらアクセスはできない)。礼拝堂が建設されたのは 12 世紀後半であると思われるが、史料にもほとんど現れることなく、その歴史はよく分らない。最初はこの地の領主たちの狩猟の際の礼拝に使われたとも言われるがこれも定かではない。

建物は単身廊形式の長方形で、東西 12.3 メートル、南北 5.4 メートルの小ぶりなものである。東端には半円形の後陣が付く。この後陣は、外側は半ドーム部分と北側外壁が崩れており、内部の詰め石が露出している。それに対して身廊の壁面は整形された中小さまざまな大きさの切石がきれいに積まれた様子がよく保存されている。身廊南側に扉口がある。高さ 2 メートル、幅 1 メートルの方形の出入口の上辺には水平のリンテル、さらにその上にクラヴォーがきっちり組まれたヴァシュールが架かる。半円形のタンパンは無装飾である。この扉口の向かって斜め右上には、内外に向けて隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。さらに身廊西壁の上部にも内側に向けて大きく隅切りされた方形の窓が残されている。後陣にも中央に半円頭形のロマネスク様式の窓が開けられている。

礼拝堂内部は、天井に半円筒形ヴォールトが架けられていたが、現在は身廊側壁の南北に付けられた水平のコーニスの上にごく一部残るだけで、ほとんどすべて崩落している。後陣の内部は、凱旋アーチ部分よりも高さや横幅がわずかに狭くなった半ドームが水平のコーニスの上に架けられている。先にも触れた後陣中央に残る半円頭形の窓は、内側に向けて隅切りされたロマnesc様式で、頭のアーチ部分は3つの大きなクラヴォーが組まれたものである。後陣は外側よりも内側の方が石積みがよく残されている。しかしこれも身廊全体の側壁とともに、崩壊の危険性が高まっており、聖堂全体の早急な修復・保存工事が待たれるところである。

Bibliographie :

Boudin (1899) pp.363-370; Germer-Durand (1868) pp.166-167; Goiffon (1881) p.174, pp.216-218; Goiffon (1900) pp.160-161; Rédier (1889) pp.270-298; Ribaldone (2014) pp.10-15; Ribaldone (2017) pp.58-63; Vassal et Faucherre (2014) pp.17-23.

30.5.20 クロ／サン＝ヴァンサン教会 (Église Saint-Vincent, Cros)

クロ (あるいはル・クロス) のサン＝ヴァンサン教会は、サン＝イポリット＝デュ＝フォールから県道 D169 を北へ3キロ行き、D347 に入ってさらに北へ900メートル進むと小集落と墓地があり、その墓地の南側に建っている。クロはいくつもの集落が散らばって点在するが、サン＝ヴァンサン教会はそのうちの文字通り「レグリーズ・ドゥ・クロ」(L'église de Cros) と呼ばれる集落にあり、クロのコミューン域の中では南寄りに位置する。

クロの名は、1384年のセネシャル文書に記されている (Crossum)。サン＝ヴァンサン教会の名は、E. Germer-Durand によればそれよりも前の1314年のセネシャル文書に現れるという (Ecclesia de Sancto-Vincencio de Croso)。この地にあったプリウレの付属聖堂であった。コンクラックのサン＝タンドレ礼拝堂 [30.5.18a] やサン＝ジル＝ドゥ＝セラック教会 [30.5.18b] とともに、ニーム大聖堂参事会が所有した。クロ自体はソミエールのヴィカリウス管区 (後にはソーヴのバイイ管区) にあり、教区としてはニーム司教区 (1694年から1790年まではアレス司教区) に属した。16世紀の宗教戦争の際には住民はほとんどがプロテスタントとなり、サン＝ヴァンサン教会も被害を受けた。1687年に修復工事が行われたが、1702年12月に今度はカミザールたちによって焼かれた (22-23日)。18世紀中に再度修復が進められた。1740年にプリウレはアレスの神学校に合併されるが、大革命の後の1809年には国有財産として農家に売却された。現在もその建物は聖堂に隣接する庭とともに私有となっている。幸いにも売却を免れていたサン＝ヴァンサン教会では、1801年のコンコルダ (政教和約) の後にカトリックの祭儀が復活した。教区としてはサン＝イポリット＝デュ＝フォール教区の中に統合され今日に至っている。建物はコミューンの所有である。最近では2013-2014年に修復工事が行われた。

サン＝ヴァンサン教会の建設は11世紀終わり頃あるいは12世紀初め頃で、今触れたコンクラックの2つの聖堂よりも少しだけ古いとされる。全体的な様子はコンクラックのサン＝ジル＝ドゥ＝セラック教会 [30.5.18b] に似ている。特に西ファサードでは扉口を縁取って地面まで下りる3重のヴァシュール、その上の半円頭形の窓、切妻の頂部に載せられた小さな鐘楼などが

同じ仕様である（ただしこの鐘楼は 19 世紀のもの）。クロでは西ファサードの左右両端の扶壁が西側に少し張り出している。また身廊東西の全長はクロの方が長く（約 19 メートル）、身廊外壁に付けられた扶壁の東西幅もクロの方が長い。身廊南側のベイに開けられた窓の数と位置も異なる。そしてクロにおいては、何よりも内陣のベイがないのが特徴である。壁面は整形された地元の石灰岩による中小石材がきれいに積まれているが、16 世紀以降の修復部分との差異が、聖堂内外において比較的良好に分かる。聖堂全体の壁の厚さはおおよそ 1.35 メートルである。身廊部南側壁面には、19 世紀頃まで接続していた住居の痕跡が斜めの線となって残されている。

身廊は 2 ベイからなる単身廊形式で、身廊側壁には 3 つの扶壁が付けられている。これらの扶壁は最上部が斜めに切られている。身廊南側には 2 つのベイにそれぞれ、2 重の枠組みの中で隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。第 2 ベイのそれが第 1 ベイのものよりも少し大きい。この第 1 ベイのものはロマネスク期のオリジナルのもので、それより大きい第 2 ベイのものは 17 世紀以降に作り直されたものと思われる。第 2 ベイ北側には礼拝室が増築されている。身廊の西側には木製のトリビューン（二階席）が作られていたが、カミザールたちの襲撃の際に失われた。

身廊の東側には半円形の後陣が付けられている。その左右（南北）両端部には張り出しが 7 センチ、幅約 40 センチの小さな装飾的ピラストル（扶壁／レゼース）が付けられている。後陣の中央から北側にかけての部分は修復されたものである。後陣上部にはもともとは小アーチが連なるロンバルディア帯が付けられていたが、現在は後陣の南側にその小アーチが 3 つ（正確には 2 つ半）残されているだけである。後陣北側にはわずかにその痕跡である半円形のタンパン 1 つが見て取れる。このロンバルディア帯のすぐ上に巡らされていたコーニス、現在は消滅している。

聖堂内部は身廊が 2 ベイからなり、横幅のあるピラストルとその上に架けられた半円形の横断アーチがベイを区切る。各ベイの内寸は東西約 6 メートル、南北 5 メートルで、側壁には半円形の壁アーチが付けられている。それらの壁アーチは逆台形の柱頭を経てピラストルとなって床まで下りるが、第 2 ベイの壁アーチの後陣側（東側）だけは、途中でコンソールが受け止めており、床までは下りていない。第 2 ベイ南側には、かつてブリウレの修道士たちが使用していたと思われる出入口の名残が見られる。現在は埋められている。身廊部南側の 2 つのベイにはそれぞれ 1 つずつ隅切りされたロマネスク様式の窓が開けられている。天井は、水平に付けられたコーニスの上に半円筒形ヴォールト（高さ 10 メートル）が架かる。このヴォールトは 17 世紀終わり頃に再建されたものと思われる。身廊と後陣の間には 2 重の凱旋アーチが架けられ、その上の凱旋アーチ壁には丸窓が開け



30.5.20 Saint-Vincent de Cros

られている。聖堂内部には彫刻装飾の類いは見られない。

内陣はない。聖域である後陣は半円形で、水平の太いコーニスが巡り、その上に半ドーム（高さ 7 メートル）が架かる。この半ドームにも 17 世紀以降の修復の手が加えられている。後陣中央には開口部はない。おそらくは宗教戦争以降に修復された際に埋められたものと思われる。後陣の向かって右側には縦に長い大きな方形のニッチが作られている。

身廊第 2 ベイ北側には、17 世紀になって増築された聖具室（現在は礼拝室）に入るための小さな方形の出入口が付けられている。この礼拝室は半円筒形ヴォールトの架けられた小さな空間で、北側には半円頭形の窓が開けられ、東側の壁には小さなニッチが 2 つ並んでいる。聖具類を置くスペースであろう。

サン=ヴァンサン（聖ヴァンサン）は、スペインのサラゴサで布教活動を行い、ディオクレティアヌス帝時代の 304 年にバレンシアで迫害によって殉教した。サラゴサのヴィセンテ（ヴィンセント）と呼ばれる。殉教の際には鉄釘で拷問を受け、グリルで焼かれたという。クロのサン=ヴァンサン教会西ファサード扉口のタンパン部分には、この聖人が受けた苦難を想起させる槍や鋭い針などの拷問器具の鉄飾りがはめ込まれている。

Bibliographie :

Bardy et al. (1966) p.48; Clément (1993) pp.292-294; Germer-Durand (1868) pp.70-71; Goiffon (1881) pp.109-110; Goiffon (1900) pp.155-159; RIP.

WS : « Site de La Sauvegarde de l'Art Français : Cros, Église Saint-Vincent »

30.5.21a ラ・カディエール=エ=カンボ／サン=ミシェル教会

(Église Saint-Michel, La Cadière-et-Cambo)

ラ・カディエール=エ=カンボは、1969 年にラ・カディエールとその北に位置するカンボの集落が統合して作られたコミューンである。サン=ミシェル教会は、サン=イポリット=デュ=フォールから県道 D999 を西へ 4 キロ行き、D296 をさらに北へ 300 メートルのラ・カディエールの集落の中心に建っている。

言い伝えによればラ・カディエールは、古代には« Urbs Cathedra »と呼ばれ、サン=ミシェル教会はこの地にあった異教の神殿の跡に建てられたものとされる。確かに古代の陶器類やコインなどが見つまっているし、集落の南西角あたりには帝政後期の墓地も見つまっている。E. Germer-Durand によれば、ラ・カディエールの名の史料での初出は 1330 年である (Prioratus de Cathedra)。大革命までソミエールのヴィカリウス管区内にあり、教区としてはニーム司教区 (1694 年から 1790 年まではアレス司教区) に属した。サン=ミシェル教会は 16 世紀の宗教戦争によって被害を受け、17 世紀半ばにいったん修復されるも 1703 年 1 月にカミザールたちに再び焼かれた。

現在の聖堂にはそうした幾度もの破壊と再建を繰り返した名残が認められる。建物の南側がラ・カディエールの中心となる広場に面し、北側は墓地となっている。単身廊形式で、東端に半円形の後陣が付く。身廊は 2 ベイからなり南北ともに扶壁が 3 つ並ぶ。すなわち西ファサ-

ドの角、身廊中央部（細くて高さも低い）、そして身廊東端の後陣部との境である。この最初のもは屋根まで達する高さがあり、下半分はトロンプ状の切れ込みが付けられている。また最後のものは高さは身廊中央部のものと同じであるが、横幅が長く、また張り出しもあって強力なものである。この扶壁は内部においては内陣のベイの位置に相当する。この東端角の扶壁の上には、古い時代に身廊上部に巡らされていたコーニスの一部分と、そこから凱旋アーチ壁に延びる切妻形のコーニスの一部分が残っている。



30.5.21a Saint-Michel de La Cadière

身廊南側では、第 1 ベイに縦長の方形の扉口が開く。その上には一枚岩のリンテルが載せられ、さらにその上にクラヴォーがきれいに組まれた半円形のアーキヴォルトが架かる。タンパン部分は無装飾である。おそらくかつてはフレスコ画が描かれていたと思われる。この扉口の向かって斜め左上には細長い銃眼のような開口部が見られる。身廊第 2 ベイにも右下の隅に小さな扉口がある。縦に細長い方形のもので、上辺にはやはりモノリスのリンテルが置かれ、その上に半円形のアーキヴォルトが架かる。タンパンは無装飾である。この第 2 ベイの小さな扉口はブリウレの修道士たちのための出入口であったのかも知れない。第 2 ベイの中央には、隅切りされた縦に長い半円頭形の窓が開けられている。その長さは、斜め下の扉口と同じくらいである。

半円形の後陣は、よく整形された中石材が積まれている（上部は小石材）。中央のやや高い位置に、ロマネスク様式の窓が開けられている。半円頭形で、2 重のヴシュールに縁取りされている。外側のヴシュールはクラヴォーがきれいに組まれている。後陣から墓地に面した身廊の北側に回ると、南側と同じようにして扶壁が 3 つ並ぶ。しかし第 2 ベイの北側には 19 世紀に聖具室が増築されている。身廊の北側には窓は開けられていない。

西ファサードは切妻形で、中央上部に縦に長い半円頭形の窓が開けられている。隅切りはされていない。その窓の上の切妻頂部には 19 世紀に作られた鐘楼が立ち上がる。鐘を吊すベイと、その下に丸窓が縦に並んでいる。この鐘楼は通常よりも縦に長いもので、聖堂全体と比較してバランスを欠いていてロマネスク的ではない。

聖堂内部は 2 ベイからなる身廊とその東に、身廊よりも南北幅が少し狭く東西の長さも短い内陣のベイが続き、東端は半円形の後陣である。身廊には水平のコーニスが巡り、その上に半円筒形トンネルヴォールトが架かる。ベイを区切るのは半円形の横断アーチとそれを受け止める壁付きの半円柱である。身廊の各ベイの側壁には半円形の壁アーチが付けられている。第 2 ベイの壁アーチの東側は床まで下りずに、アーチの起拱点に付けられたモディオンが受け止めている。後陣中央には外部と同じ仕様の窓が開けられ、水平のコーニスの上に半ドームが架けられている。

Bibliographie :

CAG, 30/2, p.277; Clément (1993) pp.405-406; Germer-Durand (1868) p.41; Goiffon (1881) p.69.

30.5.21b ラ・カディエール=エ=カンボ／カンボの旧サン=ピエール教会

(Ancienne église Saint-Pierre de Cambo, La Cadière-et-Cambo)

ラ・カディエール=エ=カンボのコミューンのカンボ地区は、サン=ミシェル教会があるラ・カディエール地区の中心から県道 D296 を北へ 6 キロである。旧サン=ピエール教会は、カンボの集落の南端にあたる奥まった場所に位置する (D296 から 60 メートルほど南に入る)。標高は 574 メートルである。

カンボの名前は早くも 1060 年のニーム大聖堂のカルチュレールに現れる (Cambone)。セネシャル文書には 1384 年にその記載がある (Campus-bonus)。E.Goiffon によれば、サン=ピエール教会は古くからサン=ピエール=エス=リヤン (Saint-Pierre-ès-liens) という名で呼ばれ、セザス (Cézas [30.5.22]) のプリウレに属し、ニーム司教の管轄下にあった。宗教戦争の際に被害を受け、17 世紀後半に修復されたが、大革命の後に国有財産として売却された。コンコルダ (1801 年) の後、カンボはル・カディエールの教区に付属したが、その後サン=ピエール教会自体は農家が所有するなどして建物は荒廃した。筆者が訪れた 2014 年 3 月には住居兼倉庫として使用するための工事が進行中であった。

建物はカンボの集落の南側斜面に向けて建てられている。西ファサードの南北の長さが長いのは、その左右 (南北) 両側に扶壁が付けられているからである。扉口は方形であるが、かつてその上に架けられていたアーキヴォルトのアーチの痕跡が壁面に残されている。切妻中央部には隅切りされた小さな丸窓が開けられている。身廊の南北の側壁には扶壁が 3 つずつ並ぶ。ただし東側つまり身廊と後陣の間に付けられたものは土台部分しか残されていない。屋根 (かなり破損している) のすぐ下にはコーニスが巡る。後陣は半円形で、中央上部に 2 重のヴシュールに縁取りされた半円頭形の窓が開けられている。その石積みは整形された中小石材による。後陣の屋根は失われているが、そのすぐ下にはコーニスが身廊部同様に巡らされている。後陣のさらに東側には大きな壁が作られており、その土台部分が残されている。

建物の内部は、外部よりもロマネスク期の雰囲気而今によく伝えるものとなっている。2 ベイからなる単身廊形式で、身廊部の側壁は整形された中石材がきれいに積まれている。天井は半円筒形ヴォールトであるが、これはオリジナルのものではなく、かつてそこに架けられていた 2 つのベイの間の横断アーチも失われ、それを受け止めていた方形のピラストルだけが残されている。2 つのベイの間のこのピラストルは、身廊と後陣の間のそれよりも横幅が長い。ヴォールトの起拱点には太い円筒形 (より正確には 4 分の 1 円形) のコーニスが付けられている。ただしそのコーニスは第 1 ベイの部分の方が第 2 ベイのものよりも細くなっている。ピラストルの頭部は身廊部のコーニスに連続する。身廊南側には、第 1 ベイに内部に向けて隅切りされたロマネスク様式で半円頭形の小さな窓が開けられ、第 2 ベイには方形の窓が開けられている。それもまた内部に向けて隅切りされているが、形が方形なので、まるで城塞建築に見られる銃

眼のようである。身廊の北側には窓はないが、農家によって無残にも大きな出入口が開けられている。

内陣のベイはない。身廊と後陣の間の半円形の横断アーチ（いわば凱旋アーチ）が残されていて、その東側に後陣が接続する。この後陣は半円形で、ロマネスク期の端正な石積みであるが、上半分と下半分の石の色が異なる。これは石材の違いというよりも、農家の使用状況によるものであろうか。後陣中央には隅切りされたロマネスク様式の窓と、さらにその上に丸窓が開けられている。

その2つの窓の間には、身廊のコーニスよりも少し低い位置に細いコーニスが巡り、その上に半ドームが架かる。

Bibliographie :

Clément (1993) pp.406-407; Delplanque et Roux-Saget (2003) pp.25-39; Germer-Durand (1868) p.43; Goiffon (1881) p.73; Goiffon (1900) pp.174-175.



30.5.21b Saint-Pierre de Cambo

30.5.22 スメーヌ／セザスのサン＝マルタン小修道院

(Prieuré Saint-Martin de Cézas, Sumène)

セザス（現地では語尾の«s»を発音する）のサン＝マルタン小修道院は、スメーヌのコミューン域の西端に位置する。サン＝イポリット＝デュ＝フォールから県道 D999 を西へ4キロでラ・カディエール（ラ・カディエール＝エ＝カンボの村役場があるところ）となり、そこから D296 をカンボ方面へ向けて北へ1.5キロ進む。さらに県道 D317 に入って西へ約3.5キロ行くとサン＝マルタン小修道院へ向かう細いダートの道が分かれるので、それを300メートル行くとブリウレに至る（すぐに車両進入禁止となるのでここからは徒歩）。逆にスメーヌから D317 を東進し、標高605メートルのラック峠（Col du Lac）を越えて行くと11キロである（この道は、樹木も少ないかなり荒涼とした山岳ルートである）。サン＝イポリット＝デュ＝フォールからはトータルで約10キロ、エロー県のガンジュ（Ganges）からだとはやはり D999 を東に向かい、ラ・カディエールを経由して約15キロである。エロー県との県境までは直線距離にして1キロの位置にあたる。サン＝マルタン小修道院は、ラ・ファージュ山地（Montagne de la Fage）とカニャス山地（Montagne des Cagnasse）の間の標高567メートルの場所にある。セザスの集落から東へ1.5キロほど離れたラ・ファージュの森の中に、墓地に囲まれてひっそりと建っていて、人里離れた12世紀の孤高の祈りの場の雰囲気は今によく伝えるものとなっている。

セザスの名は、959年のニーム大聖堂のカルチュレールに現れる（Ezatis）。また1384年にはセネシャル文書に現れる（Cazacium）。しかしこのブリウレの創建に関してはよく分らない。ここを分院として創建した可能性があるのは、トルナックのサン＝ティエンヌ修道院

[30.5.7a]、アレスのサン=ジェルマン・ドゥ・モンテギュー修道院 [30.4.12d]、そしてソーヴのサン=ピエール修道院とされるが、どれも確実なものではない。創建の正確な年代も 12 世紀であろうということ以外はよく分からない。聖堂はセザスの教区教会でもあった。所有していたカンボのサン=ピエール教会 [30.5.21b] とともに、大革命まではニーム司教区（1694 年から 1790 年まではアレス司教区）に属した。

16 世紀の宗教戦争によって大きな被害を受け、半ば破壊されたまま放置された。1611-1613 年にいったん修復工事が行われ、教区教会としての役割も復活した。1693 年には身廊の西端部にトリビューンとそこに上るための階段が作られた（これらは 1999 年に撤去されている）。18 世紀に入るとすぐにカミザール戦争に巻き込まれ、1705 年 4 月にはプリウレは司祭館などとともに焼かれ、しばらくの間放置された。1720-1723 年に多少とも修復されたようであるが、それも大革命により終わりを告げた。プリウレの建物は国有財産として農家に売却されたが、珍しいことに聖堂は歴史遺産としてそのまま維持された。王政復古の後、1820 年からカトリックの祭儀が復活したが、1868 年には近接するセザスの集落に新たに教区教会が作られたことで、プリウレの聖堂の方は完全に放棄された。ただし墓地はこのプリウレのものが引き続き使用された。

プリウレはサン=マルタン附属教会、修道士居館・司祭館、墓地からなる。敷地の南西側からプリウレを取り囲む周壁に沿ってアクセスし、プリウレの居館の下をくぐって中庭に入る。この中庭の南側の建物には、修道士たちが使用していたと思われるパン焼き窯が残されている。

サン=マルタン教会は、身廊南側がこの中庭に面し、後陣の東側には墓地が広がっている。この後陣は整形された中石材によるロマネスク的なきっちりとした石積みであるが、使われている石材は白に近い灰色の石灰岩と褐色の砂岩という異なる色のものが混交している。身廊には南北ともに横幅（東西の長さ）のある扶壁が 3 つ並ぶ。そのうち東側のものは聖堂内部の内陣に対応する。この内陣外側の扶壁（最も東側のもの）は、よく見ると後陣側に向けてわずかに斜めに付けられている。身廊南側の第 2 ペイには、屋根に近い一番高いところに、18 世紀になって開けられた 2 つの窓が並んでいる。外側に向けて隅切りされているが、窓の頭部は半円形ではなくセグメンタルアーチである。身廊北側には開口部はない。



30.5.22 Saint-Martin de Cézas, nef



30.5.22 Saint-Martin de Cézas, abside

身廊南側第 1 ベイには 18 世紀に修復された扉口がある。この扉へは半円形の石段を 3 段上る。扉の上には無装飾のリンテルが載る。リンテルの上辺は、前方に張り出したモールディングとなっている。さらにその上には 11 のクラヴォーが組まれたアーキヴォルトが架けられている。タンパンは石積だけで装飾はない。西ファサードには、かつての古い縦長の扉口の痕跡が残されている。扉の上には横長のリンテルが残る。西ファサードの切妻中央には丸窓が開けられ、その上には鐘を吊すベイが 1 つだけの鐘楼が載る。現在、鐘は吊されていない。

聖堂内部は 2 ベイからなる単身廊形式である。ただし内部にはベイを区切る横断アーチやそれを受け止めるピラストルはない。普通は身廊側壁の各ベイに付けられる壁アーチもここでは見られない。天井には半円筒形ヴォールト（18 世紀）が架けられている。開口部は身廊西壁上部の隅切りされた大きな丸窓、近年の修復工事の際に開けられたものと思われる身廊のヴォールト西端の窓、そして身廊第 2 ベイ南側上部に並ぶ 2 つの隅切りされた窓（18 世紀）である。

身廊の東側には、だんだんと南北幅が狭くなる形で、内陣と後陣が続く。内陣のベイは東西が短く（約 1.2 メートル）、そのベイの側壁はピラストルでもあって、そのままヴォールトに架かる横断アーチとなる。凱旋アーチの東側は内陣よりもさらに南北幅が狭い半円形の後陣である。この後陣には開口部（窓）はない。水平のコーニスの上に半ドームが架かる。これもまた 18 世紀の修復・再建工事によるものである。先にも触れたように、身廊の西端には 1693 年にトリビューン（2 階席）とそこに上るための階段が作られたが、これらは 1999 年に撤去されている。

現在、プリウレはスメーヌのコミューンが所有し、国立森林事務所（ONF）が周辺の土地を管理している。また 1986 年にはプリウレとサン＝マルタン教会の修復・保存を目的として「アスフォデル・ル・プリウレ協会」（Association Asphodèle-le-Prieuré）が設立された。この協会はスメーヌのコミューンや国立森林事務所（ONF）とともに、プリウレの維持・管理を行ない、さらにコンサートや美術展などの各種文化イベントの開催にも力を入れている。

スメーヌの南西約 2.5 キロの標高 512 メートルの山頂には、レ・ジュモアのサン＝シプリアン礼拝堂（Chapelle Saint-Cyprien, les Jumaux）の遺構がある。最初の建設は 11 世紀ともされるが、正確なところはよく分からない。近年の修復保存の手がかなり加えられているようで、仮に最初の建設はロマネスク期だとしても、11 世紀の部分はほとんど残されていないのはいか。ほぼ正方形に近い身廊に半円形の後陣が付くだけのごく小さな聖堂で、身廊の西端には背の低い切妻形の壁が残され、その中央には隅切りされた半円頭形の細長い窓が開けられている。礼拝堂の南側には別の建物のこれもまた小さな遺構が直接続く。

Bibliographie :

Clément (1993) p.407; Germer-Durand (1868) p.53, p.241; Goiffon (1881) pp.88-89, pp.371-372; Kirmann (2004) pp.2-38; RIP.

WS : « Site de l'Association Asphodèle le Prieuré St-Martin de Cézas ».

30.5.23 サン=ジュリアン=ドゥ=ラ=ネフ／サン=ジュリアン=ドゥ=ラ=ネフ礼拝堂

(Chapelle de Saint-Julien-de-la-Nef, Saint-Julien-de-la-Nef) 私有

サン=ジュリアン=ドゥ=ラ=ネフ礼拝堂（または単にサン=ジュリアン礼拝堂）は、サン=イポリット=デュ=フォールから県道 D999 で西へ 21 キロ、またル・ヴィガンからはやはり県道 D999 で東へ 14 キロである。サン=ジュリアン=ドゥ=ラ=ネフのコミューン域はエロー県との県境に位置し、スメースからガンジュへと南北に連なるメジャン山 (Mont Méjan) を、エロー川 (l'Hérault) に沿って南北に長く延びる。サン=ジュリアン=ドゥ=ラ=ネフ礼拝堂は、そのコムューン域の中ほど少し南寄りに位置する。県道 D999 から D349A が南に分かれるので、それを約 1.5 キロ進むと、右手 (西側) にサン=ジュリアンの城 (Château Saint-Julien／Château d'Isis) が現れる。この城は 14 世紀頃に建設されたものであるが、現在はシャトーホテルとなっている。サン=ジュリアン礼拝堂は D349A をはさんでその城の反対側にある林の中に建っている。そのすぐ先にはキャンプ場の入口があるが、礼拝堂はキャンプ場の敷地の中ではないので、徒歩でアクセスが可能である。

サン=ジュリアン=ドゥ=ラ=ネフ礼拝堂の名は、1248 年のノートル=ダム=ドゥ=ボヌール小修道院 [30.5.26] のカルチュレールに現れる (Ecclesia Sancti-Juliani de Navi)。大革命まではニーム司教区 (1694-1790 年はアレス司教区) に属した。16 世紀の宗教戦争の際に被害を受けた。1688 年にいったん修復・再建されるも、1702 年にカミザールたちによって焼かれた。1740 年にカトリックの祭儀が復活するが、大革命の後は売却され、現在まで私有である。

もともとはイシス神に捧げられた異教の小神殿の跡に、西ゴート時代に小礼拝堂が建てられ、その後 1110 年頃にロマネスク様式の礼拝堂に建て替えられたものであるという。西ゴート時代の部分が今の建物の壁面に残るとも言われるが判別は難しい。2 ベイからなる小さな聖堂で、東端に半円形の後陣が付く。身廊・後陣ともに不整形の荒石が乱積みされている。後陣中央には方形の小さな窓が 1 つだけ開けられている。身廊南側の第 2 ベイにも半円形の窓が開けられているが、鉄製のブラインドがはめ込まれている。西ファサードには切妻形のポーチが作られており、扉口は 19 世紀頃に半円アーチと側柱から作られた。アーチの頭頂部のクラヴォー（要石）には大きくて丸い花卉彫刻が見られる。このファサードの上には切妻形の鐘楼が載せられている。



30.5.23 Saint-Julien-de-la-Nef

Bibliographie :

Germer-Durand (1868) pp.213-214; Goiffon (1881) p.310; Goiffon (1900) pp.349-351.

30.5.24 サン=タンドレ=ドゥ=ヴァルボルニュ／サン=タンドレ教会

(Église de Saint-André, Saint-André-de-Valborgne)

サン=タンドレ=ドゥ=ヴァルボルニュは、アンデューズから県道 D907 を西へ約 45 キロである。ガール県の北西端に位置し、D907 をそのまま西に向かうと 7 キロでロゼール県との県境となる。さらに北に向かうとフロラックを経て国道 N106 でイスパニヤックまでは 45 キロ、マンドまでだと 70 キロである。ガルドン=ドゥ=サン=ジャン川 (Le Gardon de Saint-Jean) に並んで走る県道 D907 沿いに家が並ぶ街道の村で、サン=タンドレ教会は村の中ほどやや西寄りの橋のたもとに建っている。

サン=タンドレ=ドゥ=ヴァルボルニュの名は、1275 年のノートル=ダム=デュ=ボヌール小修道院 (Notre-Dame-du-Bonheur [30.5.26]) のカルチュレールの中に現れる (Parrochia Sancti-Andreæ de Vallebornes)。アンデューズのヴィカリウス管区にあり、教区としてはニーム司教区 (大革命前はアレス司教区) に属した。12 世紀にこの地にプリウレを創建し、サン=タンドレ付属教会を建設したのは、現在のル・モナステイエ=シュル=ガゼーユ (Le Monastier-sur-Gazeille／オート=ロワール県) にあるベネディクト派のサン=シャフル=デュ=モナステイエ修道院 (abbaye de Saint-Chaffre-du-Monastier) からやって来た修道士たちであったと言われる。オーヴェルニュのサン=シャフル修道院は、この近くでは他にもサン=マルセル=ドゥ=フォンフィューズ小修道院 (Saint-Marcel-de-Fontfouillouse [30.5.25]) を創建したが、これらはその後、現在のロゼール県タルン溪谷にあるサン=テニミー修道院 (abbaye Saint-Enimie [48.7.11a]) に属した。サン=タンドレ=ドゥ=ヴァルボルニュは宗教戦争の際にカトリックとプロテスタントの争奪の場となり、プリウレも大きな被害を受けた。付属聖堂はその後 1633 年にプロテスタントの教会堂が新たに建てられるまでの間は彼らの礼拝のために使用された。18 世紀初めのカミザール戦争の際にもそれなりに被害は受けたが、建物が完全に焼かれて破壊されることは免れている。18 世紀を通じて修復の手が加えられるも、大革命によって聖堂は司祭館や墓地とともに荒れ果てた。19 世紀になって再び修復工事が進められた。

サン=タンドレ教会の平面プランは、もともとは 3 ベイからなる身廊と、その東側に東西の短い内陣のベイと半円形の後陣が続くというシンプルなものであるが、ゴシック期になって第 3 ベイの南北両側に大きな礼拝室が増築され、これがトランセプトとなって、現在はラテン十字形となっている。西ファサードはとりたてて特徴があるものではなく、19 世紀になって作られた新しい扉口が開き、その上にはやはり 19 世紀の大きな半円頭形の窓、そして切妻の頂部には鐘楼が載せられている。西ファサードと身廊の南北 (第 1 ベイと第 2 ベイの間) には扶壁が付けられている。身廊南側では第 1 ベイと第 2 ベイにそれぞれやはり 19 世紀になって半円頭形の窓が開けられた。身廊の北側は、住宅が直接建てられていて見ることができない。第 3 ベイの南北に付けられた礼拝室にはそれぞれ隅切りされた半円頭形の窓が開けられている (ただし北側は直接建てられた住宅のために見えない)。

後陣は半円形である。中央ならびに南北側に開口部 (窓) があるが、そのうち南側のものは外側に向けて大きく隅切りされた半円頭形で、そのアーチのすぐ外側はゴシック様式の非常に先の鋭い尖頭形モールディングによって美しく縁取られている。また窓の内側にはこれもまた

ゴシック様式のトレーサリーが付けられている。身廊東側に作られたトランセプト様の礼拝室と、後陣南側の大きな窓といった外観は、ここから県道 D10 と D61 を経て北へ約 10 キロのロゼール県ル・ポンピドゥーのサン＝フルール教会 (Église Saint-Flour, Le Pompidou [48.8.16]) のものによく似ている。ただしル・ポンピドゥーのものには、窓を縁取る尖頭形モールディングは見られない (また石材も異なる)。サン＝タンドレの後陣中央の半円頭形の窓は南側のものに比べると小さいが、時代はロマネスク期のものである。



30.5.24 Saint-André-de-Valborgne

聖堂内部は身廊が 3 ベイからなり、凱旋アーチの東側に短い内陣のベイと半円形の後陣が続く。天井には半円筒形ヴォールトが架けられ、ベイを区切るのは横幅の広い半円形の横断アーチとそれを受け止める方形のピラストルである。各ベイの側壁には半円形の壁アーチが付けられているが、第 3 ベイは南北にゴシック期の礼拝室があるので、半円形の壁アーチの内側 (礼拝室との間) に架けられているアーチも尖頭形である。

後陣は半円形で、内陣よりもさらに少し南北幅が狭い。水平に延びるコーニスの上に半ドームが架かる。後陣の南北両側の窓は、頭部のアーチがそのコーニスの上に位置する。後陣中央の窓は、大きな半円形アーチの内側に、さらに 2 重のヴシュールに縁取られた細長い半円頭形の窓が開く。これはロマネスク期のものである。

Bibliographie :

Darnas et Durand (2006) pp.30-45; Germer-Durand (1868) p.195; Goiffon (1881) pp.255-256; Goiffon (1900) pp.105-115; GV.

30.5.25 レ・プランティエ／サン＝マルセル＝ドゥ＝フォンフィューズ小修道院教会

(Église Saint-Marcel-de-Fontfouillouse, Les Plantiers) 遺構

アンデューズからサン＝ジャン＝デュ＝ガールを経由して県道 D907 を北へ 30 キロ進み、ソマーズを過ぎたら D20 に入って西に向かうと約 5 キロでボルニュ川沿いのレ・プランティエの集落に入る。サン＝マルセル＝ドゥ＝フォンフィューズ小修道院教会の遺構は、その村役場 (mairie) の前を通ってさらに西へ 800 メートル進む。そこからは細い山道となり、森の中を 3 キロほど登ることになる。そこは標高およそ 650 メートルのセヴェンヌの山中にあって、ジェヴォーダン (ロゼール県) のマンドやフロラックと、ラングドックのニームやモンペリエを結ぶ古くからの街道沿いにあたる。すぐ西には 946 メートルのボルニュの頂 (Pic de Borgne) がそびえている。

オーヴェルニュのサン＝シャフル＝デュ＝モナステイエ修道院 (Abbaye de Saint-Chaffre-du-Monastier) は 951 年にジェヴォーダンのタルン溪谷にサン＝テニミー修道院 (Abbaye Saint-

Enimie [48.7.11a]) を創建したが、12 世紀になってさらにラングドックとの中継地点として、サン=タンドレ=ドゥ=ヴァルボルニュ (Saint-André-de-Valborgne [30.5.24]) と、ここサン=マルセル=ドゥ=フォンフィユーズにそれぞれプリウレを建設した。1249 年のボンヌボー小修道院 [30.5.26] のカルチュレールにその名が現れる (Ecclesia Sancti-Marcelli-de-FonteForfoso)。1384 年にはニーム=ボーケールのセネシャル文書にその記載が見つかる (locus Sancti-Marcelli de Fonte-Foolioso)。プリウレは、大革命まではアンデューズのヴィカリウス管区に属し、サン=マルセル付属聖堂はレ・プランティエの教区教会でもあり、ニーム司教区 (大革命の前はアレス司教区) に属した。16 世紀になると宗教戦争によって大きな被害を受け、一時はプロテスタントの礼拝所として使用されたりもしたが、17 世紀初め頃には廃墟化が進んだ。17 世紀後半になって修復されるものの、18 世紀に入ってすぐの 1702 年 11 月には今度はカミザールたちに襲われて焼かれた。1725 年頃に再び修復工事が始められるが、それが完了する前に大革命を迎えた。1874 年、サン=マルセル=ドゥ=フォンフィユーズの村は、レ・プランティエのコミュンに組み入れられた。サン=マルセル教会はその後も放置・荒廃したままであったが、ようやく 1970 年代から「セヴェンヌ友の会」(L'association Les Amies des Cévennes) などが中心となって修復工事が行われるようになった。現在はレ・プランティエのコミュンの所有である。

聖堂はそのほとんどの部分がこの地の片岩によって建てられている。2 ベイからなる身廊は 12 世紀後半頃に建設されたが、その東に続く内陣と半円形の後陣はそれよりも古い 12 世紀初め頃に建てられた。身廊第 2 ベイと内陣部分の南側に付けられた大きな礼拝室 (南の礼拝室) は 13 世紀後半、身廊第 1 ベイ南側の方形の鐘塔は 15 世紀から 16 世紀頃にかけての建設である。

後陣は斜面に建てられているために外側から見ると高さがある。中央上部に大きく隅切りされた半円頭形ロマネスク様式の窓が開けられている。隅切りのアーチ部分も平たい片岩が組み合わせられている。また足場用の小穴がいくつか開けられている。彫刻装飾の類いはまったくない。後陣の上にある凱旋アーチ壁には丸窓が開けられている。後陣の南側に並べられるようにして建てられている大きな南の礼拝室は、東西に少し長い長方形で、東側の壁に長細い銃眼が開けられている。またこの礼拝室南側中央には、かつてのプリウレの建物 (現在は消滅) との間の行き来に使われていたと思われる、半円頭形で縦長の出入口が開けられている。その左右両側少し上の位置にもやはり細長い銃眼様の開口部がある。向かって右側のものはその位置が左側のものよりも少し低く、頭部 (アーチ部分) は半円形のモノリスである。この礼拝室の屋根は、南側から見ると大きな切妻形である。



30.5.25 Saint-Marcel-de-Fontfouillouse

この礼拝室の西側には、身廊第 1 ベイの南側

にあたる位置に高さ 17 メートルの方形の鐘塔が建つ。3 段構えとなっており、2 段目まで南東と南西の角に扶壁が付けられている。最も下の段は、塔の下から身廊内部に入るための大きな通路（ポーチ）となっており、その入口には 2 つのアーチ（ヴシュール）が重なる大きなアーキヴォルトが架けられている。外側のヴシュールは片岩であるが、内側のヴシュールおよびそれを左右で受け止める方形で太い側柱は斑岩である。その側柱には、それぞれアーキヴォルトを受け止めるインポストの上下両側と、さらに一番下の基壇部分に、ハートやチューリップ、あるいは縦長の糸巻きのような図形が彫刻されている。15 世紀から 16 世紀にかけてのものである。

この通路（ポーチ）から中に入ると身廊南側に作られた扉口となる。3 重のヴシュールからなるアーキヴォルトが架けられている。一番外側のヴシュールはアーチの起拱点で水平になり、モールディングの付けられた内側の 2 つのヴシュールはそのまま地上まで降りる。鐘塔最下段のポーチのすぐ上には水平にコーニスが付けられている。また鐘塔南東の扶壁の上の方（地上から約 5 メートルのところ）には丸い石の日時計と、四角い枠に囲まれた碑文のパネルが埋め込まれている。上下 2 行からなり、上の行は「IHS」、小さな十字架と太陽と月、「M」(Marie) で、下の行には「1503」という年号が刻まれている。その碑文を信ずるなら、この鐘塔の建設（あるいは改築）は 1503 年ということになる。

鐘塔の中段には、下段との境のコーニスのすぐ上に、縦に細長いゴシック様式の窓が開けられている。頭部は尖頭形で、トレサリーの一部が残っている。鐘塔の最上段には、各面にそれぞれ縦に長い半円頭形の開口ベイが 2 つずつ（ただし北面のみ 1 つ）開けられている。西ファサードは岩壁に接していて直接見るのは容易ではないが、三角形の切妻屋根の下に小さな方形の窓が開けられている。

身廊北側には天井まで届く扶壁が 3 つ並び、それを横切るようにして中ほどから少し高い位置に水平のコーニスが付けられている。第 2 ベイ南側にはかつては 16 世紀に建てられた礼拝室があったが、現在あるのはその土台部分だけである。身廊第 2 ベイには、北側礼拝室に向けて開いていた大きなアーチが残されている。2 つのヴシュールが重なるもので、そのうち斑岩で作られた内側のヴシュールとそれを受ける左右の側柱（基壇の上に立てられている）は 16 世紀のものと思われる。これらの側柱のインポスト

（あるいは逆台形型の冠板）のすぐ下には、左右それぞれにおいて、南北両角に人間の顔の彫刻が合わせて 4 つ組み込まれている。頭髪の様子から修道士たちであろう。とりわけ北西角のものが最も保存状態がよく、三角形の大きな鼻、見開かれた目とその上の眉、そして横一文字の口などが印象的である。この側柱の角部は、それらの人面彫刻からそのまま凹面モールディングとなって基壇まで下りるが、今度はその基壇のすぐ上の部分に、先に触れた鐘塔ポーチの側柱と同じように、



30.5.25 Saint-Marcel-de-Fontfouillouse



30.5.25 l'abside de Saint-Marcel



30.5.25 l'intérieur de Saint-Marcel

ハートやチューリップ、あるいは不思議な植物の彫刻が施されている。

後陣の北側には、かつては聖具室としても使用されたものと思われる 16 世紀の建物があったが、これもまた現在は側壁の土台の一部が残るのみである。内陣のベイの北側には、この建物との間を行き来するためのものであった半円頭形の出入口が開けられている。

聖堂内部は、身廊は東西長が約 15 メートル、南北幅が約 5 メートルである。身廊は 2 ベイからなり、その東側に内陣のベイと半円形の後陣が続く。水平のコーニスの上に架けられている天井は、ほとんど半円筒形ヴォールトのように見えるが、ベイを区切る横断アーチは尖頭形である。中央の横断アーチを受け止めるピラストルは途中までで終わり、床までは下りていない。第 1 ベイには木製の二階席が作られ、さらにそのベイの西壁の上には隅切りされた小さな窓が開けられている。この西壁の壁面には 18 世紀頃のものと思われるフレスコ画（石組みを描いたもの）がわずかに残っている。

身廊の各ベイは側壁にロマネスク期の半円形壁アーチが付けられているが、第 1 ベイ南側ではその壁アーチの内側に鐘塔ポーチへの出入口が、そして第 2 ベイ北側には先にも触れた北の礼拝室への出入口である大きなアーチが開けられている。

第 2 ベイの南側の壁アーチには隅切りされたロマネスク様式の窓が開けられているが、13 世紀後半頃になって、その壁アーチを半分取り壊す形で南の礼拝室が作られた。この礼拝室の天井は半円筒形ヴォールトで、現在はその崩落を防ぐためにコンクリート製の柱が作られている。南側にはかつてのプリウレヤ墓地との間を行き来するための半円頭形の出入口、そして内部に向けて大きく隅切りされた開口部が南側に 2 つ、東側に 1 つ開けられている。また南西の角には半円頭形のニッチが 3 つ作られている。聖具類を置くもので、かつてこの礼拝室が聖具室として使用されたことを示唆している。身廊とこの礼拝室を分けるアーチの下面には、身廊第 1 ベイ西壁に見られたのと同じ時期のものと思われるフレスコ画が残っている。花卉を内側に描いた四角い枠が並んでいる。

身廊と後陣の間には東西 2.3 メートルの短い内陣のベイがあり、その北側には半円頭形の出入口が開けられている。第 2 ベイ 東側の横断アーチに接する形で高さのある凱旋アーチが作られ、その上部には丸窓が開けられている。12 世紀初め頃のものと思われる後陣は半円形で、水平のコーニスの上に半ドームが架かる。後陣中央には隅切りされたロマネスク様式の小さな窓が開けられている。後陣の下には半円形の基壇が巡らされている。

Bibliographie :

Bardy et al. (1966) pp.126-127; *CSAF* (1995/8) pp.163-164; Clément (1993) pp.167-169; Darnas et Durand (2006) pp.46-63; Germer-Durand (1868) p.165, p.217; Goiffon (1881) pp.321-322; Goiffon (1881) pp.114-118; GV.

30.5.26 ヴァル=デグアル/レスペルーのノートル=ダム=ドゥ=ボヌール小修道院

(Prieuré Notre-Dame-de-Bonheur, L'Espérou, Val-d'Aigoual) 遺構▲

ヴァル=デグアルは、2019 年にヴァルローグ (Valleraugue) とノートル=ダム=ドゥ=ラ=ルヴィエール (Notre-Dame-de-la-Rouvière) が合併して新たに作られたコミューンである。ノートル=ダム=ドゥ=ボヌールのプリウレがあるレスペルー地区は、ル・ヴィガン (Le Vigans) から県道 D48 で北へ約 29 キロである。プリウレの遺構は、レスペルーの集落からさらに D986 を 3.5 キロ西へ向かうと森の中に分け入るハイキング用の小道があるので、それを北へ徒歩で 1 キロである。レスペルーから D986 を北へ 1.5 キロ行ったところにあるセヴェンヌ観光案内所の裏手から徒歩だとやはり 1.5 キロであるが、道が分かりにくく、途中で私有地なども複雑に入り組んでいる。サン=ソヴール=カンプリュー (Saint-Sauveur-Camprieu) を発ってボヌール川沿いに西側から向かうこともできるが、これもまた途中から徒歩となる。プリウレは、ロゼール県との県境となるエグアル山 (Mont Aigoual) の南に東西に連なる美しい渓谷、すなわちその名の通りボヌール渓谷に、遺構という形ではあるが、その孤高な姿を今にしっかりととどめている。

この地にプリウレが創建された正確な年代ははっきりとしない。最も早くて 11 世紀初めとされるが、恐らくは 12 世紀になってからのことであろう。N. Helmreich によれば、史料に最初にその名が現れるのは 1143 年、次いで 1228 年である。ニーム大聖堂参事会の管理下にあったようである。中世の間、サン=ジュリアン=ドゥ=ラ=ネフ [30.5.23] やサン=タンドレ=ドゥ=ヴァルボルニュ [30.5.24] など、自らの支院もいくつか所有した。15 世紀以降、百年戦争や宗教戦争などによって被害を受け、17 世紀にはニームの参事会員の姿ももはやあまり見られなくなった。1703 年 3 月にカミザールによって焼かれた後、多少とも修復されるが、大革命の後には完全に放棄され、農家が使用した。現在は聖堂部分のみがコミューンの所有で、その周囲のかつてのプリウレの土地や建物は私有である。

ノートル=ダム=ドゥ=ボヌールの平面プランは、2 ベイからなる身廊とその東にトランセプトと半円形の後陣が続くいわゆるラテン十字形である。扉口は西ファサードに開けられている。身廊部分のヴォールトはすべて失われており、側壁の土台部分が残るだけである。主後陣は半

円形で、中央やや南寄りのところに小さな開口部があり、南側に隅切りされた大きな窓が開けられている。水平のコーニスから上の半ドームは崩落している。トランセプト（翼廊）には、南北ともに東側に小後陣が作られている。それぞれに小さな方形の窓が開き、窓の上には半ドームが架けられている。

1996年に、西ファサードの前の地中から、かつてその扉口の上に据えられていた半円形のタンパンが、それを囲んでいたクラヴォーの列の一部とともに発見された。タンパンは一枚岩のモノリスで、中央には祝福する神の手が上に向けて延び、その向かって左側には円環の中に月、右側にはロザスで表された太陽などが彫刻されている。このタンパンが作成された年代については、それをロマネスク期のものとする見方から、もっと後の17-18世紀頃のものとする見方までさまざまである。

Bibliographie :

Caillat (2001) p.19; Clément (1993) pp.296-297; Delattre (1999) pp.88-89; Delattre (2000) pp.106-107; Helmreich (2004) pp.12-22, pp.45-58; RIP.

30.5.27 アルゾン／サン＝マルタン教会 (Église Saint-Martin, Alzon)

アルゾンは、ル・ヴィガンから県道 D999 を西へおよそ 20 キロに位置し、そのまま D999 をさらに西へ向かうとアヴェロン県との県境まで 7 キロである。サン＝マルタン教会は、県道から 100 メートル北に入ったアルゾンの村のほぼ中ほどの、村役場のある広場に面して建っている。

ここに最初にブリウレを創建したのは、マルセイユのサン＝ヴィクトール修道院の修道士たちであった。1113 年のサン＝ヴィクトールのカルチュレールにその名が現れる (Ecclesia parochialis sancti Martini de Alsone)。E. Germer-Durand によれば、1240 年にはレスペールのノートル＝ダム＝ドゥ＝ボヌール小修道院 [30.5.26] のカルチュレールにも記載が見られるという。宗教戦争で被害を受けたが、1646 年に拡張工事が行われ、天井のヴォールトもすべて架け替えられた。大革命をへてコミュニーの所有となった後も、19 世紀および 20 世紀に改修工事が重ねられている。そのようなわけで、サン＝マルタン教会の建物は、もともとは 12 世紀に建てられたものではあるが、全体的にあまり古さを感じさせない。

平面プランは三廊式で、主身廊は 4 つのベイからなる。東端の主後陣は五角形である。村役場の広場に面した聖堂南側（南側廊の外壁）には、西端に大きな方形の鐘塔が立ち、そこから東側に向けてベイを区切る小さめの扶壁が 4 つ並ぶが、そのうち東端の扶壁が最も幅があって出張りも大きい。この外壁と後陣南側に開けられた窓は尖頭形のゴシック様式のものである。後陣には 18 世紀に建てたペニタン礼拝堂 (Chapelle des pénitents) が接しており、サン＝マルタンの後陣全体を外から見ることはできない。なおこのペニタン礼拝堂の南ファサードの扉口の上には頭巾をかぶった苦行会員の彫像が据えられている。

サン＝マルタンの西ファサードはグラン・リュから 10 段以上石段を登ったところにある。最もロマネスク的な雰囲気をもつ部分を今に残す部分である。扉口は大きな扶壁に左右をはさまれており、

向かってその右側は要塞化された方形の大きな鐘塔、またその左側は、その鐘塔から北側の側廊の西壁へと斜めに低くなるようにして長く連続する壁面となっている。中央の扉口には、3重の半円形ヴォシュールからなるアーキヴォルトが架かり、その上にはやはり3重のアーチに縁取られた半円形の窓が開けられている。この窓の左右には、植物文様の柱頭彫刻を持つ小円柱が付けられている。扉口の向かって左側に立ち上がる扶壁のすぐ左横には、やはり中央の窓とほぼ同じ高さのところに半円頭形の窓が開けられているが、そ



30.5.27 Saint-Martin, Alzon

れには小円柱は見られない。扉口をはさむ2つの扶壁は、一番上にアーチ壁が作られ、その壁の上辺は銃眼の付けられたマシクーリになっており、これも要塞化の名残である。なお扉口とその上の窓の間には、3つの紋章パネルがはめ込まれている。向かって左からニーム司教フェリックス・ベギノ（Félix Béguinot／在位 1896-1921 年）のもの、中央にアルゾンのコミュニーのもの（白い翼を持つ3頭の黒い鹿）、そして右端がアルゾンの農家出身（生まれたのはル・ヴィガン）で後にモナコ司教となったアルナル・デュ・キュレル（Arnal du Curel／在位 1903-1915 年）のものである。

聖堂内部は20世紀の修復によってすっかりと新しいものになっており、古さは全く感じられない。主身廊の両側に南北それぞれに側廊が作られている。17世紀に架け替えられた天井は交差リブ・ヴォールトである。内陣および後陣にもリブが架けられていて、内陣・後陣合わせて都合7面からなる。後陣の南北両端の面に、それぞれ隅切りされたゴシック様式の窓が開けられている。

Bibliographie :

Clément (1993) p.158; Germer-Durand (1868) p.7; Goiffon (1881) pp.15-16.

WS : « Site officiel de la mairie d'Alzon ».

略記号と参考文献

各聖堂のビブリオグラフィーでは、和書、翻訳書、欧文文献（ファーストネームは略）、GV と RIP、Web-site (WS) の順に記した。

CAG : *Carte Archéologique de la Gaul*. Paris, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres.

CSAF : *Cahier de la Sauvegarde de l'Art Français*.

HGL : *Histoire générale de Languedoc*, par Dom Cl. Devic et Dom J. Vaissière, Éditions Privat, Toulouse.

GV : Guide de Visite.

RIP : Renseignements ou Informations sur Place.

カヴァリエ (2012) : 『フランス・プロテスタントの反乱ーカミザール戦争の記録』二宮フサ訳、岩波文庫。

中川久嗣 (2016) : 「スティーヴンソンの旅行記『旅はロバをつれて』と南仏ジェヴォーダン」『文明研究』第 34 号、東海大学文明学会、1-20 頁。

Abbal, Odon (2019) : « Un jour de mai 1738 à l'église de Ceyrac », in *Les cahiers du Haut-Vidourle, Histoire & ethnologie en Piémont Cévenol*, Les amies de Clio, Saint-Hippolyte-du-Fort, no.29, p.11-18.

Anton, Jules et Gravi, E. (1970) : *Recherches autour de Cendras*, Imprimerie TYPOTYP, Nîmes.

Aspord-Mercier, Sophie (2004) : « Sainte-Croix-de-Caderle, Le Temple », in *Bilan scientifique régional Languedoc-Roussillon*, Montpellier, Service Régional de l'Archéologie (SRA), pp.105-107.

————— (2005) : « Sainte-Croix-de-Caderle, Le Temple », in *Bilan scientifique régional Languedoc-Roussillon*, Montpellier, Service Régional de l'Archéologie (SRA), pp.91-92.

————— (2006) : « L'église de Sainte-Croix-de-Caderle (IXème-XVème siècles) », in *Archéologies gardoises*, no.3, Conseil général du Gard, pp.35-41.

Bardy, Benjamin, et al. (1966) : *Dictionnaire des Églises de France, IIc, Cévennes-Languedoc Roussillon*, Robert Laffont, Paris.

Bonnet, Émile (1905) : *Antiquités et monuments du département de l'Hérault*, Imprimerie Ricard Frères, Montpellier.

————— (1938) : *Répertoire archéologique du département de l'Hérault*, Imprimerie de la manufacture de la Charité, Montpellier.

Boudin, Jean-Louis (1899) : « Une excursion à Pompignan », in *Revue du Midi*, 13e année, no.4, Nîmes, pp.363-370.

Bourguet, Jack (1993) : *Le prieuré de Saint-Nazaire-des-Gardies : Dans la garrigue cévenole un édifice roman*, Nîmes.

Caillat, Gérard (2001) : « Notre-Dame du Bonheur, une question de date », in *Lien des chercheurs cévenols*, no.124, p.19.

Charvet, Gratien (1883) : « Le monastier de Tornac, Étude archéologique et historique », in *Bulletin du Comité de l'art Chrétien (Diocèse de Nîmes)*, no.14, Nîmes, pp.287-308.

Chastand, André (1965) : *Histoire d'Anduze : Sa vie politique, religieuse, sociale depuis*

- l'occupation romaine*, Imprimerie du Languedoc, Anduze.
- Clément, Pierre Albert (1989) : *Les chemins à travers les âges, en Cévennes et Bas Languedoc*, Presses du Languedoc, Montpellier.
- (1993) : *Églises Romanes oubliées du Bas Languedoc*, Les Presses du Languedoc, Montpellier.
- (2007) : « Les églises de Cros et d'Aguzan », in *Cahiers du Haut-Vidourle*, no.21, pp.22-28.
- Colpart, S (1975) : « L'église de Saint-Félix-de-Pallières », in *Causses et Cévennes, revue du Club cévenol*, no.4, Paris, pp.124-125.
- Darnas, Isabelle et Durand, Geneviève (2006) : *Itinéraire roman en Cévennes*, Éditions La Voix Domitienne, Saint-Gély-du-Fesc.
- Delattre, Liliane (1999) : « Valleraugue, Notre-Dame de Bonheur », in *Bilan scientifique régional Languedoc-Roussillon*, Service Régional de l'Archéologie (SRA), Montpellier, pp.88-89.
- (2000) : « Valleraugue, Notre-Dame de Bonheur », in *Bilan scientifique régional Languedoc-Roussillon*, Service Régional de l'Archéologie (SRA), Montpellier, pp.106-107.
- Delplanque, Louis Paul, et Roux-Saget, Michèle (2003) : « Le massif de La Fage, 2^{ème} Partie », in *Les Cahiers du Haut-Vidourle*, no.16, Les amis de Clio, Pompignan, pp.25-39.
- Fréminville, Bernard de (2008) : *Les remparts d'Anduze, La porte des mots : Histoire Complète des événements s'étant déroulés dans cette ville au début du 17^e siècle*, La porte des mots, Anduze.
- Germer-Durand, Eugène (1868) : *Dictionnaire topographique du département du Gard*, Paris.
- Girault, Pierre-Gilles (2002) : « Observations sur le culte de saint Gilles dans le Midi », in *Hagiographie et culte des saints en France méridionale (XIII^e-XV^e siècle)*, Cahiers de Fanjeaux, no. 37, Éditions Privat, Toulouse, pp. 431-454.
- Goiffon, Etienne, Abée (1881) : *Dictionnaire topographique, statistique et historique du diocèse de Nîmes*, Nîmes.
- (1900) : *Monographies paroissiales, Paroisses de l'archiprêtré du Vigan*, Nîmes.
- (1916) : *Monographies paroissiales. Paroisses de l'archiprêtré d'Alais*, Nîmes.
- Helmreich, Nathalie (2004) : *Concevoir un projet de valorisation d'un prieuré médiéval en ruine dans les Cévennes-Notre Dame de Bonheur (Val d'Aigoual 30)*, l'Université Paul Valéry-Montpellier 3.
- Kirmann, Jeannine (2004) : *Le prieuré Saint-Martin de Cézas, Historique*, Association

- Asphodèle Le Prieuré, Sumène.
- Laurent, René (1996) : *Promenade à travers les temples de France*, Les Presses du Languedoc, Montpellier.
- Malbos, Lina (1980) : « Étude sur la famille féodale d'Anduze et Sauve du milieu du Xe siècle au milieu du XIIIe siècle », in *Mémoires de l'Académie de Nîmes*, VII^{me} série, tome LX, Années 1977-1979, Nîmes, pp.202-229.
- Moreau, Marthe (1997) : *Les châteaux du Gard du moyen âge à la Révolution*, Les Presses du Languedoc, Montpellier.
- Nougaret, Jean et Saint-Jean, Robert (1975) : *Languedoc roman*, Zodiaque, Saint-Léger-Vauban.
- Paulet, Jean-Jacques (1847) : *Histoire de la ville d'Anduze*, P. Veirun, Imprimeur-Libraire, Anduze.
- Provost, Michel, et al. (1999) : *Carte Archéologique de la Gaul, Le Gard*, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, Paris (CAG) .
- Rédier, J. l'Abbé (1889) : « Le prieuré de Pompignan », in *Revue du Midi*, tome 6, pp.270-298.
- Ribaldone, Thierry (2014) : « Le castrum de Mirabel-le-Vieux à Pompignan », in *Cévennes Magazine*, no.1783, pp.10-15.
- (2017) : « La chapelle Saint-Jean à Pompignan », in *Cahiers du Haut-Vidourle*, no.25, pp.58-63.
- Valette, Pierre (2005) : « L'histoire de la commune, 1. La chapelle romane », in *Bulletin d'information de la commune, Sainte-Croix-de-Caderle*, no.7, pp.19-20.
- Vassal, Vivien et Faucherre, Nicolas (2014) : « La visite du site de Mirabel, commune de Pompignan (Gard) », in *Le lien des chercheurs Cévenols*, no.179, pp.17-23.
- Viguié, Alexandre-Louis-Guillaume (1823/1987) : *Notice sur la ville d'Anduze et ses environs*, rééditions de 1823, Éditions Lacour, Nîmes.

Web-site

- « Base Mérimée (Église paroissiale Saint-André) »
<https://pop.culture.gouv.fr/notice/merimee/PA00103050> (2025.6.16 アクセス)
- « Base Mérimée (Église Saint-Baudile) »
<https://pop.culture.gouv.fr/notice/merimee/PA00103245> (2025.6.14 アクセス)
- « Base Mérimée (Église Saint-Félix) »
<https://pop.culture.gouv.fr/notice/merimee/PA00103204> (2025.6.20 アクセス)
- « Cévennes-Tourisme, La Gleisasse »
<https://www.cevennes-tourisme.fr/visites-decouvertes/la-gleisasse-saint-sebastien-daigrefeuille-fr-4298776/> (2025.5.1 アクセス)

« Midi Libre, 2013.12.07 »

<https://www.midilibre.fr/2013/12/07/quissac-inauguration-du-plan-patrimoine-sur-la-communaute-de-communes,793953.php> (2025.6.25 アクセス)

« Site de La Sauvegarde de l'Art Français : Cros, Église Saint-Vincent »

<https://www.sauvegardeartfrancais.fr/projets/cros-eglise-saint-vincent/>
(2025.6.30 アクセス)

« Site de La Sauvegarde de l'Art Français : Église de Saint-Paul-la-Coste »

<https://www.sauvegardeartfrancais.fr/projets/saint-paul-la-coste-eglise-saint-paul/>
(2025.4.25 アクセス)

« Site de l'Association Asphodèle le Prieuré St-Martin de Cézas »

<https://asphodeleleprieure.fr/> (2025.7.1 アクセス)

« Site officiel de la commune de Boisset-et-Gaujac »

<https://boissetetgaujac.fr/> (2025.5.20 アクセス)

« Site officiel de la commune de Durfort-et-Saint-Martin-de-Sossenac »

<https://www.mairie-durfort.fr/fr/> (2025.6.10 アクセス)

« Site officiel de la commune de Sainte-Croix-de-Caderle »

<https://www.saintecroixdecaderle.fr/> (2025.5.10 アクセス)

« Site officiel de la mairie d'Alzon »

<https://www.alzon.fr/> (2025.7.10 アクセス)

« Site officiel de la mairie de Bagarde »

<https://www.bagard.fr/> (2025.5.1 アクセス)

« Site officiel de la mairie de Saint-Félix-de-Pallières »

<https://www.saintfelixdepallieres.fr/> (2025.6.20 アクセス)

« Site officiel de la mairie de Saint-Paul-la-Coste »

<https://www.saint-paul-la-coste.eu/> (2025.4.25 アクセス)

※追記

拙論「南フランス・ガール県北部のロマネスク聖堂（1）ーボワ・デ・ランスからアレスとその周辺までー」（東海大学紀要文化社会学部、第12号、2024年9月）65頁に誤植があったので訂正する。

13行目「ペレ家」→「ブレ家」